

# 史跡 齋宮跡

平成30年度発掘調査概報

2020年3月

齋宮歴史博物館



第193次調査区遠景（南東上空から）



飛鳥時代の掘立柱塀と掘立柱建物〔第193次調査〕（東から）







第195次調査区遠景（南西上空から）



飛鳥時代の大型化した高床倉庫〔195次調査〕（北東から）



## 序

平成31年・令和元年は、齋宮歴史博物館にとって節目の年となりました。3月には齋宮跡が国史跡に指定されて40年、7月には「三重県齋宮跡出土品」が重要文化財に指定されて10年、さらに10月には齋宮歴史博物館が開館して30年を迎えるなど、新しい時代の幕開けとともに記念すべき事柄が重なりました。

また令和2年は、昭和45年に齋宮跡の発掘調査が始まってから50年目にあたります。これからも齋宮歴史博物館は、半世紀にわたる調査研究の成果を踏まえつつ、全国で唯一無二の史跡である齋宮を体感できるサイトミュージアムとして、国内はもとより海外へも視野を向けて、その価値と魅力を発信していく所存です。

さて、今回報告する第190・193・195次発掘調査は、齋宮の成立にかかる実態を解明するため、共に史跡西部の中垣内地区で行ったものです。従来から史跡の実態解明における大きな課題とされていた飛鳥時代後期の掘立柱塀の構成および周辺の遺構群の把握について二つの大きな成果をあげる事が出来ました。一つ目は、飛鳥時代の掘立柱塀で囲われた方形区画および区画内部の建物を確認したこと、二つ目は、区画の西側に整然と整備された総柱建物群が展開することを確認しました。これらは飛鳥時代の齋宮を考えるため、また今後、周囲の発掘調査方針を考えるための大きな成果と言えます。

この調査で得られた成果は、地元明和町をはじめ、ひろく県民の皆様や齋宮跡を訪れる皆様に還元できますよう、積極的に情報発信してまいります。

史跡齋宮跡の保存、調査研究・整備活用にあたり、貴重なご意見やご指導を頂きました齋宮跡調査研究指導委員の先生方、文化庁などの多くの方々、ならびに発掘調査にあたり様々なご配慮・ご協力を頂きました国史跡齋宮跡協議会をはじめとした地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

2020（令和2）年3月

齋宮歴史博物館

館長 上村 一 弥

# 例 言

- 1 本書は、齋宮歴史博物館が平成30年度に国庫補助金を受けて実施した史跡齋宮跡発掘調査（第190・193・195次調査）の概要をまとめたものである。
- 2 明和町が調査主体となって実施した、史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第194次調査報告書は、別途明和町が刊行する予定である。
- 3 遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第Ⅵ座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。また、建物の軸方位については、全て北を規準として表記している。
- 4 遺構時期区分の指標となる土器・陶器等の器種分類と年代観については、一部を除き以下の文献に拠った。
  - ・齋宮歴史博物館2018「齋宮跡の土器編年の再検討」『齋宮跡発掘調査報告Ⅱ 柳原区画の調査 出土遺物編』
- 5 齋宮跡の時期区分については土器編年に基づき、期と段階を用いて「齋宮跡Ⅱ期第1段階」等と表記するが、本文中ではこれを簡略的に「齋宮Ⅱ－1期」と表現している。
- 6 遺構表示記号は次のとおりである。
  - SA：塀・柱列 SB：掘立柱建物 SD：溝 SH：竪穴建物 SK：土坑
  - SP：柱穴・ピット SX：周溝墓 SZ：その他の遺構・不明遺構
- 7 遺物実測図は基本的に実物の4分の1の縮尺としている。遺物写真は縮尺不同である。
- 8 土層および出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（2004年度版）に拠る。施釉陶器の色調については一部、大日本インキ化学工業株式会社発行『日本の伝統色』第5版（1989年）を用いて補っている。
- 9 遺物の漢字表現は、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「椀」、「つき」は「杯」を用いる。ただし、参考文献からの引用の場合にはこの限りではない。
- 10 発掘調査にあたっては、齋宮跡調査研究指導委員のほか、以下の方々のご指導、ご協力を賜った。
  - 小熊常弘・田村陽一・林部均・山中敏史（五十音順 敬称略）
- 11 本書の執筆・遺物写真の撮影は、川部浩司・宮原佑治があたり、編集は調査研究課で行った。また、発掘調査は川部・宮原が担当し、現地調査及び資料整理については、大川勝宏・山中由紀子・八木光代・西川千晶・森本周子・中西宏美が補佐した。



# 目 次

I 前言	(川部) 1
II 第190次調査	(宮原) 7
III 第193次調査	(宮原) 20
IV 第195次調査	(川部) 51

## 挿 図 目 次

第 I - 1 図	史跡斎宮跡位置図	4
第 I - 2 図	平成30年度発掘調査位置図	5
第 I - 3 図	史跡斎宮跡における大地区表示図	6
第 II - 1 図	第190次調査グリッド図	7
第 II - 2 図	第190・193・195次調査区位置図	8
第 II - 3 図	第190次調査 遺構平面図	9
第 II - 4 図	第190次調査 土層断面図	10
第 II - 5 図	第190次調査 出土遺物実測図	14
第 II - 6 図	中垣内地区北東部における中世遺構の分布	17
第 III - 1 図	第193次調査 グリッド図	20
第 III - 2 図	第193次調査 遺構平面図	21
第 III - 3 図	第193次調査 土層断面図	23
第 III - 4 図	S X 11102 平面・断面図	24
第 III - 5 図	S A 11120・S B 11110 平面・断面図	25
第 III - 6 図	S A 11123・11124・11125 平面・断面図	27
第 III - 7 図	S A 11127・11128 平面・断面図	28
第 III - 8 図	弥生時代 遺構出土遺物	31
第 III - 9 図	弥生時代 包含層出土遺物 1	32
第 III - 10 図	弥生時代 包含層出土遺物 2	33
第 III - 11 図	飛鳥・奈良時代 遺構出土遺物	34
第 III - 12 図	その他の時代 遺構ほか出土遺物	35
第 III - 13 図	包含層・表土出土遺物	36
第 III - 14 図	飛鳥時代の区画および周辺の建物配置	38
第 III - 15 図	奈良時代の区画および周辺の建物配置	40
第 IV - 1 図	第195次調査 グリッド図	51
第 IV - 2 図	第195次調査 遺構平面図	52
第 IV - 3 図	第195次調査 土層断面図	53
第 IV - 4 図	S Z 11231~11234、S I 11091・11230 平面・断面図	55
第 IV - 5 図	S B 11237~11243 平面・断面図	56
第 IV - 6 図	S B 11244~11246 平面・断面図	57
第 IV - 7 図	S B 11249・11250 平面・断面図	58
第 IV - 8 図	S B 11247・11248・11251・11252 平面・断面図	59
第 IV - 9 図	第195次調査 出土遺物実測図 1	62
第 IV - 10 図	第195次調査 出土遺物実測図 2	63
第 IV - 11 図	第195次調査 出土遺物実測図 3	64



第IV-12図	総柱建物群 変遷図1	66
第IV-13図	総柱建物群 変遷図2	67
第IV-14図	飛鳥・奈良時代の齋宮中枢域	68

## 表 目 次

第I-1表	平成30年度史跡齋宮跡の現状変更等許可申請一覧	3
第I-2表	平成30年度発掘調査一覧	3
第II-1表	第190次調査 遺構一覧	12
第II-2表	第190次調査 遺物観察表	15
第III-1表	第193次調査 遺構一覧	29
第III-2表	第193次調査 掘立柱塀・掘立柱建物一覧	30
第III-3表	第193次調査 遺物観察表1	42
第III-4表	第193次調査 遺物観察表2	43
第III-5表	第193次調査 遺物観察表3	44
第III-6表	第193次調査 遺物観察表4	45
第IV-1表	第195次調査 遺構一覧	60
第IV-2表	第195次調査 総柱建物一覧	60
第IV-3表	第195次調査 遺物観察表1	69
第IV-4表	第195次調査 遺物観察表2	70
第IV-5表	第195次調査 遺物観察表3	71
第IV-6表	第195次調査 遺物観察表4	72

## 写真図版目次

巻頭図版1	第193次調査区遠景／飛鳥時代の掘立柱塀と掘立柱建物	
巻頭図版2	第195次調査区遠景／飛鳥時代の大型化した高床倉庫	
写真図版1	第190次調査区全景／SD11025と古代土坑群	18
写真図版2	第190次調査出土遺物	19
写真図版1	第193次調査区全景1／第193次調査区全景2	46
写真図版2	SX11102溝1半裁状況／SX11102溝2土層／SA11120柱穴5土層 SA11120柱穴7・8土層／SB11110全景	47
写真図版3	SA11123・11124・11125全景／SA11123柱穴12土層／SA11124柱穴9土層 SA11127・11128全景／SA11127柱穴4土層／SA11127柱穴3土層	48
写真図版4	第193次調査出土遺物1	49
写真図版5	第193次調査出土遺物2	50
写真図版1	第195次調査区全景／総柱建物群 SB11237・11238・11242・11243・11247・11248	73
写真図版2	SB11237・11238・11242・11243・11247・11248 SB11248布掘り柱掘方土層／SB11248柱穴／SB11248柱穴土層	74
写真図版3	SB11239・11240・11244・11249・11250 SB11250柱穴2土層／SB11250柱穴3土層／SB11250柱穴7土層 SB11250柱穴7柱痕跡 土器出土状況	75
写真図版4	第195次調査区全景／総柱建物群／SB11241・11245／SB11246	76
写真図版5	第195次調査出土遺物	77

# I 前 言

## 1 調査の経緯と経過

### 史跡齋宮跡にかかる経緯と経過

齋宮跡の発見の契機は、高度経済成長期に明野原台地（齋宮段丘面）の西縁部で大規模な宅地造成計画がなされ、その開発事業に先立って実施された昭和45年の齋宮跡（古里遺跡）の確認調査による。大型の建物を含む多くの掘立柱建物、井戸、土坑、奈良時代と鎌倉時代の大溝、蹄脚硯や大型赤彩土馬、緑釉陶器などが発見され、齋宮関連の重要遺跡と認識された。昭和48年度から文化庁の補助事業として確認調査を重ね、昭和54年3月27日に国史跡に指定され、東西2km、南北700mに及ぶ137haの史跡範囲が把握されるに至った。管理団体は明和町である。

三重県では、史跡指定に伴い齋宮跡調査事務所を設置して発掘調査にあたり、平成元年度からは新たに開館した齋宮歴史博物館によって、史跡の内容確認のための計画的な学術調査を継続的に実施している。

齋宮跡の発掘調査では、史跡東部に所在する方格地割と平安時代の齋宮中枢部の具体的な解明が進展した。平成27年度には柳原区画で平安時代前期の齋宮寮庁（正殿・西脇殿・東脇殿）を対象に、活用のための史跡整備の一環として復元建物を建設し、史跡公園「さいくう平安の杜」が公開活用されている。

明和町では「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づき、平成23年度から「明和町歴史的風致維持向上計画」の策定に取り組み、平成24年6月6日に国の認定を受けた。同計画に基づいて、下園東区画周辺において来訪者の案内・交流を目的とした整備を計画し、平成24年度に発掘調査を行い、平成27年度から工事に着手、平成29年3月に「いつきのみや地域交流センター」が竣工した。さらに、平成27年4月24日には「祈る皇女齋王のみやこ齋宮」が日本遺産に認定されている。

### 史跡齋宮跡の発掘調査

昭和45年の齋宮跡（古里遺跡）の確認調査（第1次）を皮切りに、史跡内容確認の計画的な学術調査、現状変更等に伴う調査が積み重ねられ、平成30年度の調査で48年目を迎えた。これまで史跡東部の平安時代齋宮にかかる方格街区（方格地割）内部の発掘調査に重点を置き、具体的な構造の解明に取り組んできた。これらの成果を毎年、発掘調査概報としてまとめているが、齋王の宮殿「内院」、柳原区画の「齋宮寮庁」については正式な発掘調査報告書を刊行している。今後は「寮庫」・「神殿」・「初期齋宮」などにかかる発掘調査報告書を順次刊行していく方針である。

平成29年3月に齋宮歴史博物館では、史跡齋宮跡発掘調査の基本的な考え方をまとめた『史跡齋宮跡発掘調査基本方針』を策定した。当該方針等での史跡内容確認は、初現期（飛鳥～奈良時代）の齋宮の実態解明、方格地割内部構造の解明、衰退期（平安～鎌倉時代）の齋宮の実態解明、齋宮に関わる居住、生産・流通、墓域等の解明の4項目を課題に挙げた。そのなかでも今日的かつ当面の重点目標として、史跡西部での飛鳥～奈良時代齋宮中枢域の実態解明調査を掲げている。特に史跡西部の中垣内地区は、古代伊勢道が本来の直線道路から北側にわずかに湾曲する部分を含み、さらに古代伊勢道から南側に派生する道路がみられるほか、古代伊勢道が敷設される頃の重要施設が集中していたと想定され、これまで飛鳥時代の掘立柱塀と想定されるS A6280を中心に、北から東に約33°の振れをもつ多数の建物跡を確認している。さらに奈良時代になると、正方位へと変えた掘立柱塀による方形区画が確立しており、奈良時代齋宮の中枢施設も配置された重要地区である。

方針策定後の初年度となる平成29年度の第192次調査では、台地平坦面の西端部に平成2年度の第85～8次調査で確認されていた飛鳥時

代の掘立柱塀となるS A6280が、方形区画として西側に展開している可能性を想定して調査を行なった結果、当該期に関連する遺構が極めて希薄であることが明らかとなった。これを受けて平成30年度は、掘立柱塀の東側に方形区画が展開している可能性を想定した第193次調査、さらに西側でも掘立柱塀と第192次調査区の間を追加確認する第195次調査の2つの調査区を飛鳥時代齋宮の実態解明を目的として設けた。また190次調査は、古代伊勢道が北側に湾曲する部分に南接する場所で、古代伊勢道の敷設前後の重要遺構の解明を目的として設けた。調査面積は第190次調査が106㎡（平成29年7月24日～平成30年8月31日）、第193次調査が204.5㎡（平成30年6月4日～8月31日）、第195次調査が330㎡（平成30年9月3日～平成30年12月28日）であった。

#### 発掘調査現場の公開活用

齋宮歴史博物館では、史跡への来訪者増加や魅力の向上のために、発掘調査現場の積極的な公開活用を行っている。具体的には、発掘調査見学者への随時公開・説明、ホームページを通じた情報発信とともに、現地説明会や「子ども1日体験発掘教室」（平成30年度は台風のため中止）、学校等団体の体験発掘を開催している。また、平成30年度は三重大学及び皇學館大学との連携を行い、大学院生・学部生を対象とした調査アシスタントの受け入れを行っている。

第190・193・195次調査の随時公開・説明の見学者はのべ758名であった。これらの公開活用については、三重大学及び皇學館大学の調査アシスタントの協力を得た。

## 2 調査体制

史跡齋宮跡の調査研究・整備活用に関する業務は、齋宮歴史博物館調査研究課が担当した。当該報告に関わる組織は以下の体制で行った。

#### <第190次調査>

・平成29年度

大川勝宏（課長）

穂積裕昌（主幹（課長代理））

川部浩司（主査）

宮原佑治（主任）

#### <190・193・195次調査>

・平成30年度

大川勝宏（課長）

山中由紀子（主幹（課長代理））

川部浩司（主査）

宮原佑治（主任）

・平成31・令和元年度

大川勝宏（課長）

山中由紀子（主幹（課長代理））

川部浩司（主査）

宮原佑治（主任）

## 3 齋宮跡調査研究指導委員会

齋宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、平成30年12月9日に齋宮跡調査研究指導委員会を開催し、第193・195次調査を含む中垣内地区の性格や明和町の整備事業について指導及び助言を得た。指導委員の方々は下記のとおりである。

〔指導委員〕

浅野 聡（三重大学大学院准教授）

稲葉信子（筑波大学大学院教授）

小澤 毅（三重大学教授）

京楽真帆子（滋賀県立大学教授）

金田章裕（京都大学名誉教授）

黒田龍二（神戸大学大学院教授）

佐々木恵介（聖心女子大学教授）

増淵 徹（京都橘大学教授）

松村恵司（奈良文化財研究所長）

本橋裕美（愛知県立大学准教授）

渡辺 寛（皇學館大学名誉教授）

綿貫友子（神戸大学大学院教授）

（五十音順・敬称略）

## 4 平成30年度発掘調査一覧

文化財保護法第125条第1項の規定による史跡現状変更等許可申請は、平成30年度の42件（国許可22件、県許可20件）があった。このうち、当該許可申請の許可条件に基づく史跡齋宮跡の発掘調査及び立会いを要した案件については、

その内訳を第I-1表、発掘調査を実施した内容は第I-2表にまとめた。

明和町主体の第194次調査については、『史跡齋宮跡平成30年度現状変更緊急発掘調査報告』として、令和元年度に明和町が刊行する予定である。

現状変更等許可申請の内容	申請及び許可件数	対応別件数
個人・民間企業による申請	22	発掘調査7・立会い15
公共機関等による生活環境整備に伴う申請	11	立会い11
明和町等による史跡環境整備及び維持管理に伴う申請	7	発掘調査4・立会い3
三重県による計画的発掘調査のための申請	2	発掘調査2

第I-1表 平成30年度史跡齋宮跡の現状変更等許可申請一覧

調査次数	地区	調査面積 (㎡)	調査期間	調査場所	現状変更 申請者	現状変更 申請理由	保存管理の 土地利用区分
190	I9	106.0	H29.7.24~H30.8.31	明和町大字竹川字中垣内	三重県	計画発掘調査	第二種保存地区
193	G10	204.5	H30.6.4~8.31	明和町大字竹川字中垣内	三重県	計画発掘調査	第二種保存地区
195	F10	330.0	H30.9.3~12.28	明和町大字竹川字中垣内	三重県	計画発掘調査	第二種保存地区
194-1	E8, F8, G8	54.0	H30.4.26	明和町大字齋宮字楽殿	個人	住宅建築	第三種保存地区
194-2	Q13	228.05	H30.6.8~10.3 H31.2.12~2.14	明和町大字齋宮字木葉山	明和町	発掘調査	第三種保存地区
194-3	R8, Q9, R9	17.3	H30.6.12~6.27	明和町大字齋宮字篠林ほか	個人	住宅建築	第三種保存地区
194-4	P13	55.4	H30.6.28~7.27	明和町大字齋宮字篠林ほか	個人	住宅建築	第三種保存地区
194-5	O9	5.1	H30.7.24~7.25	明和町大字竹川字東裏	個人	浄化槽埋設	第四種保存地区
194-6	I12	3.0	H30.7.27	明和町大字齋宮字内山	個人	浄化槽埋設	第四種保存地区
194-7	J12	34.2 (31.5)	H30.10.1~12.28	明和町大字齋宮字笛川	個人	住宅建築	第四種保存地区
194-8	D10	48.5	H30.10.1~10.8	明和町大字齋宮字楽殿	明和町	住宅建築	第三種保存地区
194-9	P7	158.1	H30.10.10~10.18	明和町大字竹川字花園ほか	明和町	散策路整備	第二・三種保存地区
194-10	H8	41.4	H30.10.30~11.29	明和町大字齋宮字牛葉	個人	住宅建築	第三種保存地区
194-11	P6	6.8	H30.12.7	明和町大字竹川字花園	個人	住宅建築	第三種保存地区
194-12	F8	114.24	H31.3.5	明和町大字竹川字祓戸	明和町	史跡整備	第三種保存地区

第I-2表 平成30年度発掘調査一覧表



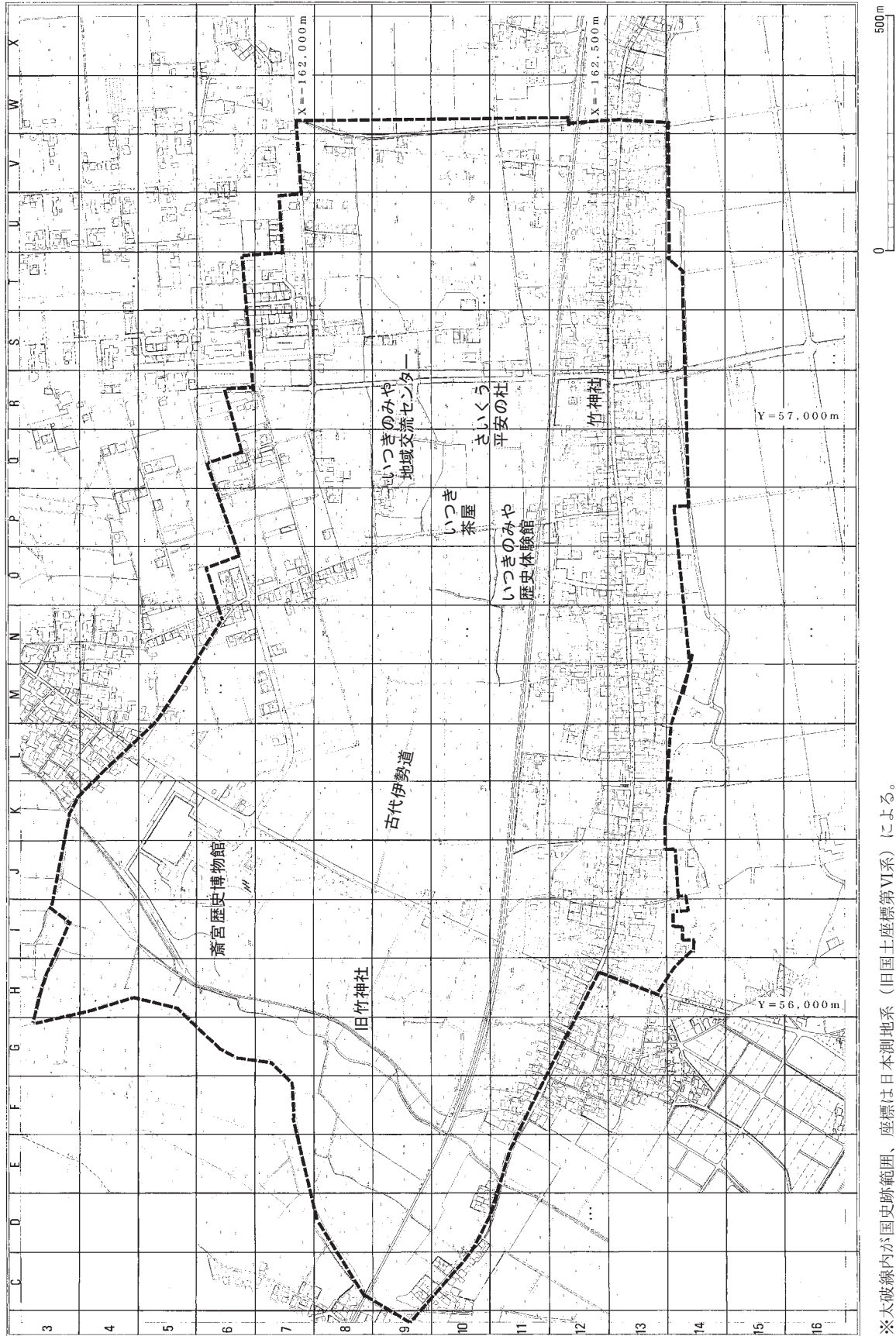


第 I - 1 図 史跡齋宮跡位置図 (1 : 500,000・国土地理院 1/25,000「松阪」「明野」を改変)





第 I - 2 図 平成30年度発掘調査位置図 (1:10,000)



第 I - 3 図 史跡斎宮跡における大地区表示図（2002年）



## Ⅱ 第190次調査 (6 A I 9 中垣内地区)

### 1 はじめに

第190次調査地は、史跡西部の中垣内地区に位置し、史跡を北西から南東方向に横断する古代伊勢道の南側派生道路の西、約30mに位置する。斎宮歴史博物館からは南に約300mとなり、発掘調査前は畑地として土地利用されている。

調査地周辺の既往調査は、第2次・91次・102-5次・137次・141次調査などが行われている。S F 8945 (古代伊勢道南側派生道路) は、第2次調査で西側溝 S D 9528、第141次調査では西側溝 S D 8879、東側溝 S D 8829を検出し、幅は側溝心線で約8.1mであることが確認されている。さらに南側の第30次調査でも、約8.3m幅で東西側溝を検出しているため、北から東に約40°の傾きをもち、古代伊勢道から200m以上南に延びる道路であることがわかっている。側溝からの出土遺物から、設置されたのは奈良時代以前に遡ることが指摘されている一方で、このS F 8945の周辺施設については解明されている状況にあるとはいえない。例えば、古代伊勢道より南に約160mの第30次調査では、S F 8945より東側には道路と並行する方位の竪穴建物群が配置されている一方、S F 8945の西側には竪穴建物があり多くみられない状況が明らかとなっているが、第137・141次調査ではS F 8945の西側にも竪穴建物が確認されている。そのため、局地的な様相はみえてきてはいるものの、S F 8945周囲の実態解明は、やはりまだ十分ではない。

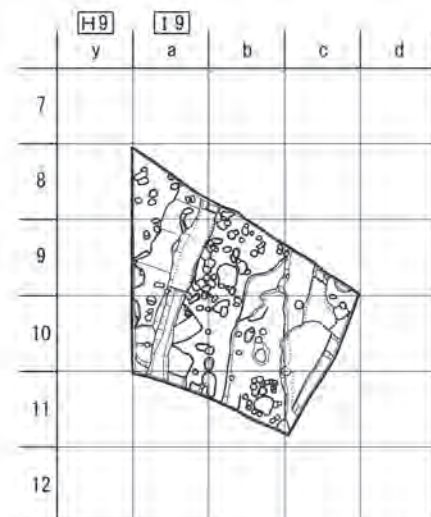
今回の第190次調査では、飛鳥時代に遡る可能性のある竪穴建物 S H 8586を検出した第137次調査の東側隣接地に、古代伊勢道南側派生道路周辺の様相を確認する目的で調査区を設定した。調査面積は106㎡、調査期間は平成29年7月24日～平成30年8月31日である。

### 2 地形環境と地層

史跡斎宮跡は、櫛田川(祓川)・宮川の下流域に挟まれた明野原台地の西方に位置する。後背の玉城丘陵・大仏山丘陵を基点に、北の洪積台地の段丘高位面(明野段丘面)、段丘中位面(斎宮段丘面)の順に地形は下降し、東西に広がる沖積低地(海岸平野・氾濫平野・三角州・後背低地)を介して、伊勢湾へと連なる。

史跡斎宮跡は、段丘中位面(斎宮段丘面)に立地し、段丘南西部を最高所(標高約14.5m)として、東北東に向けて低くなる緩傾斜地で、史跡の東域では標高9m程度となる。傾斜角度は1°にも達しないほどの平坦な地形となっている。

第190次調査地は、現況が畑地の平坦面で、約12.5mの標高を測る。基本層序は上から、表土(耕作土)、造成土(室町期)、遺物包含層(鎌倉～室町時代)地山からなり、地山面までの深度は北端で0.3m、南端で0.5mを測る。遺構の検出は、本来は遺物包含層の上面で行うべきだが、包含層と遺構埋土の碎屑物構成及び色調が似ているため、遺構検出が極めて困難となる。誤認を回避するために、遺構の正しい認識が可能となる地山上面で行った。

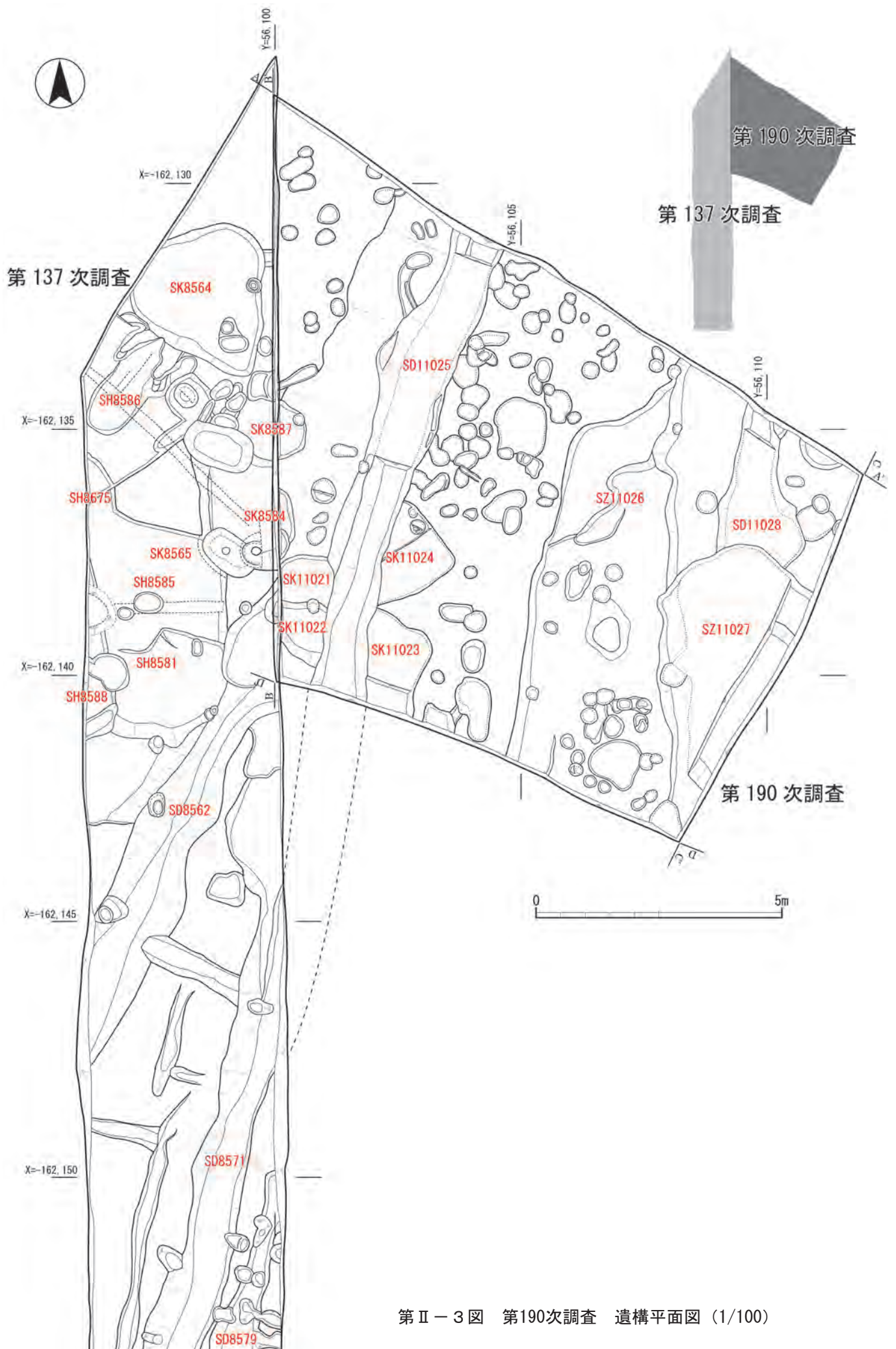


第Ⅱ-1図 第190次調査グリッド図(1/400)





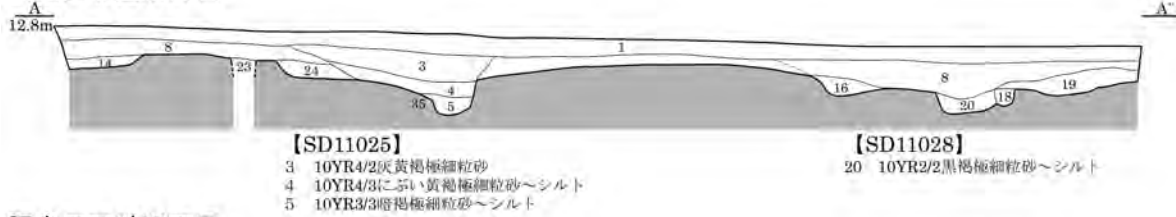
第Ⅱ-2図 第190・193・195次調査 調査区位置図 (1/2,000)



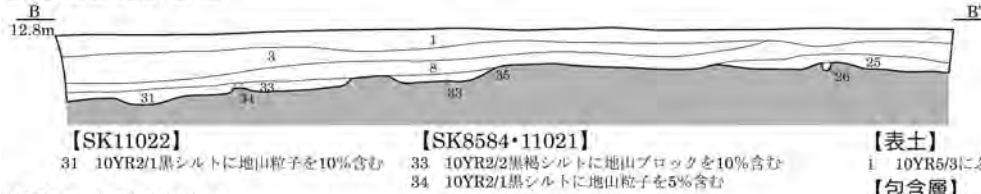
第 II - 3 図 第190次調査 遺構平面図 (1/100)



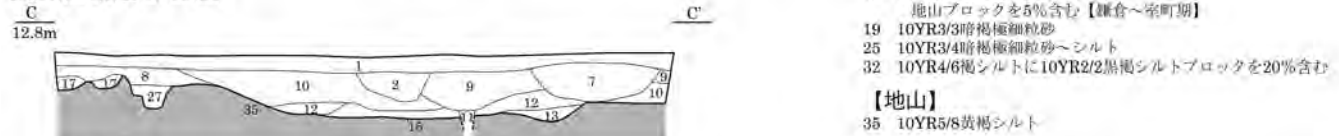
調査区北壁断面図



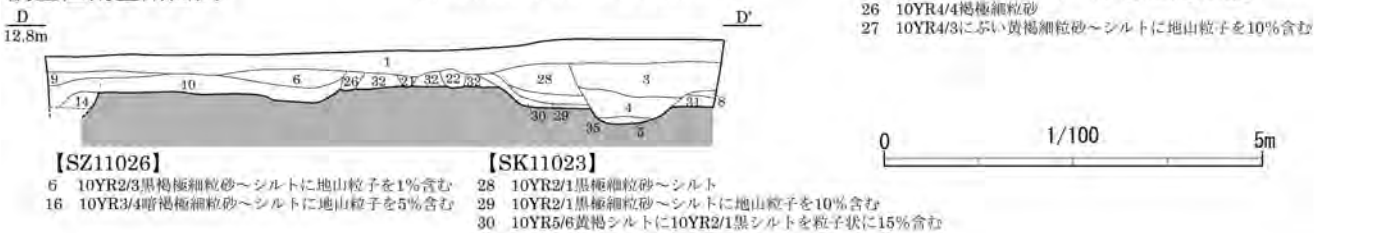
調査区西壁断面図



調査区東壁断面図



調査区南壁断面図



第Ⅱ-4図 第190次調査 土層断面図 (1/100)

3 遺構

調査の結果、飛鳥～奈良時代・鎌倉時代・室町時代以降の各種遺構を検出した。内訳は飛鳥～奈良時代の土坑6基、室町時代以降の溝2条、江戸時代の落ち込み2基となる。また、多数のピットを確認したものの、建物跡として認識できるものはなかった。

(1) 飛鳥～奈良時代の遺構

調査区のほぼ全面に、中・近世の造成などに伴う削平を受けており、確実に古代まで遡る包含層は調査区の南端一部のみ(第Ⅱ-4図の32層)で確認した。そのため、この時期の遺構は大多数が上面を削平され、遺構深度は浅く残存していた。

**SK8587** a9で検出した直径1.2m以上の不整形の土坑で、西側は第137次調査に続くが、別の遺構との重複により正確な形状や規模はわからない。断面形状は逆台形を呈し、上層部は削平されているため、深さは約0.1mが残存している。遺物は、土師器杯G(1・2)や須恵器杯G蓋(3)が出土しており、斎宮I-1～I-2期、飛鳥時代後期から奈良時代前期に位置づけられる。

**SK8584** a10で検出した直径1.1m以上の不整形の土坑で、西側は第137次調査に続くが、別の遺構との重複により正確な形状や規模はわからない。断面形状は逆台形を呈し、上層部は削平されているため、深さは約0.1mが残存している。遺物は、細片のため図化していないが、

土師器片などが出土している。第137次調査概報では斎宮Ⅰ-2～Ⅰ-3期に位置づけられている。

**S K 11021・11022・11023** a10・11で検出した土坑群で、S K 11021・11022の西側は第137次調査に続く。いずれの土坑も埋没後に、中世～近世のS D 11025によって掘り込まれている。平面は不整形ながら隅丸方形に近く、土坑群が一連の遺構であれば、長軸約4.1m、短軸約3.1m以上の堅穴建物となる可能性もある。ただし、カマドや地床炉、支柱穴、壁周溝など堅穴建物の特徴づける諸要素がみられないため、土坑群と認識した。遺物は、土師器の細片が出土したのみであるが、中世以降に下る特徴を持たず、また埋土の様相も踏まえても、古代に位置づけられる。

**S K 11024** a10で検出した一辺が1.8m以上の隅丸方形の土坑で、西半部を中世～近世のS D 11025が後世に掘り込んでいる。断面形状は皿状を呈し、上層部は削平されているため、深さは0.1mが残存している。こちらも平面形状から堅穴建物の可能性もあり、第137次調査で確認したS H 8586と平面方位が類似している。そのため、S H 8586に付随する小規模建物の可能性も考えられるが、堅穴建物を構成する諸要素はみられない。また推測できる平面規模が2m前後とかなり小さいため、土坑と認識した。遺物は、土師器細片が出土したのみであるが、埋土の様相などから古代に位置づけられる。

## (2) 室町時代以降の遺構

**S D 11025** a・b8・9、a10・11で検出した幅3.1m(深掘り部1.6m)、長さ9.5m以上の溝で、南北両側の調査区外に続く。南側は、第137次調査のS D 8571に続く場合、全長26m以上に推定できる。なお溝の肩部は、西側で深さ0.6mまではスロープ状に緩やかに掘り下げ、それよりも下はほぼ垂直に掘り下げている。一方で、肩部の東側は上面からほぼ垂直に掘り下げ、急傾斜部のみを残している。遺物は

少なく、鎌倉時代の陶器山皿(4)が出土しているが、溝内上層からの出土で、正確な時期を反映した遺物ではない。ただし、第137次調査概報では、S D 8571は近世に位置づけられており、それと連なる可能性が高いS D 11025も近世の可能性はあるが、明確に近世まで下る出土遺物はみられなかった。また、近隣で確認されている遺構の様相、特に溝の主軸方位を踏まえると、S D 8571・11025も同じく中世に掘削された溝の可能性は排除できない。

具体的にみると、S D 11025の主軸方位は、北から東に15～20°の傾きで配置されており、北東に隣接する第2次調査区では、類似する傾きの溝群(S D 9524・9527ほか)が確認されている。これら溝群は、いずれも中世でも鎌倉～室町時代に位置づけられるもので、中には、L字形に配置されたものもある。過去の概報では、屋敷地を囲う区画溝や道路としての性格が想定されている<sup>(1)</sup>ことから、S D 11025も同様に屋敷地を区画する溝の一部であったと考えられる。また、東西肩部の傾斜に差がみられたことは、区画の内外による差の可能性があり、東側が急傾斜となることは、塀などの遮蔽物と一体化し、区画の内外を隔てる目的であったと推測できる。

**S D 11028** c9・10で検出した幅1.9m、長さ3.0m以上の溝で、北側は調査区外に続き、南側は江戸時代の落ち込みS Z 11027によって後世に掘り込まれている。また上層部や南側は、室町時代の落ち込みS Z 11206やS Z 11027によって削平されており、深さ約0.3mが残存していた。断面形状は逆台形を呈する。部分的な検出であるため、遺構の性格や時期は明示しにくい。平面方位がS D 11025と類似し、溝の底面の標高も11.3mでS D 11025と一致するため、室町時代前後にS D 11025と共に掘削された区画溝内をさらに区画する溝の可能性が高い。遺物は土師器の再片のみの出土であるが、遺構の重複状況などから、室町時代以前に帰属する。

**S Z 11026** b・c9・10・11で検出した幅5.0m以上、長さ9.0m以上の不整形の落ち込みで、



南北両側の調査区外に続く。南半は同じく室町時代の落ち込みS Z 11027によって掘り込まれている。遺物は、土師器鍋（5）・瓦質土器火鉢（6・7）が出土しており、15世紀後半から16世紀前半に位置づけられる。

**S Z 11027** c10・11で検出した幅3.2 m以上、長さ5.5m以上の不整形の落ち込みで、南東側の調査区外に続く。複数回にわたり掘り込まれており、内部には土器などとともに大量の礫が放り込まれていた。遺物は、古代の須恵器壺（8）や土師器甎（9）、灰釉陶器皿（10）などに加え

て、鎌倉時代の陶器山茶椀（11）なども出土しているが、いずれも混入品と考えられる。遺構の時期は、S Z 11027の埋没後に掘り込まれていることから、16世紀前半以降に位置づけられる。

註

(1) 大川勝宏「IV 第2次調査（古里遺跡A地区）概要報告」『史跡斎宮跡 平成17年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館2007

遺構名	調査時遺構名	グリッド	時期	出土遺物	備考
SK 8584	土坑 2	a10	飛鳥～奈良	土師器・須恵器	第137次調査
SK 8587	土坑 1	a9	飛鳥～奈良	土師器杯・須恵器	第137次調査
SK 11021	土坑 3	a10・11	飛鳥～奈良	土師器	同一遺構か？ 竪穴建物か？
SK 11022	土坑10	a10	飛鳥～奈良	土師器	
SK 11023	土坑 5	a10・11	飛鳥～奈良	土師器	
SK 11024	土坑 4	a9・10	飛鳥～奈良	土師器	
SD 11025	溝 1	a・b8・9, a10・11	鎌倉～室町	土師器・山茶椀	主軸方位N15～20° E 第137次S D 8571と一連の溝か？
S Z 11026	落ち込み 1	b・c9・10・11	室町～江戸	土師器・瓦質土器	
S Z 11027	落ち込み 2	c10・11	室町～江戸	土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶椀・石製品	
SD 11028	溝 2	c9・10	鎌倉～室町	土師器	

第Ⅱ－1表 第190次調査 遺構一覧

## 4 遺物

遺物整理用コンテナ16箱分の遺物が出土した。遺物点数は遺構出土より、遺物包含層や表土からの出土の方が多い。遺構番号順に主な時代別に分けて詳述する。

**S K8587出土遺物（1～3）** 1・2は土師器杯Gで、底部付近まで残存する1の径高指数は0.31となる。3は須恵器杯Gの蓋で、ツマミは意図的であるかわからないが、欠損している。口径は8.1cmとかなり小型で、飛鳥IV～Vに該当する。これらは飛鳥時代後期から奈良時代前期に位置づけられる。

**S D11025出土遺物（4）** 4は陶器の山皿の底部で、斎宮III-3～III-4期に位置づけられる。

**S Z11026出土遺物（5～7）** 5は土師器の鍋で、伊藤編年のIVa期に該当し<sup>(1)</sup>、15世紀後半に位置づけられる。6・7は瓦質土器火鉢で、6は口縁部、7は底部および脚部の破片である。貼り付けられた突帯の形状や、器壁の特徴から6・7は同一個体の可能性が高い。土師器鍋と同等かやや新しい時期が推測できる。

**S Z11027出土遺物（8～12）** 8は須恵器壺類の破片、9は土師器甌の口縁部で、どちらも斎宮I期、飛鳥～奈良時代に位置づけられる。10は灰釉陶器の皿で、斎宮II-3～II-4期に位置づけられる。11は陶器の山茶碗で、斎宮III-3～III-4期に位置づけられる。12は花崗岩製の不明石製品で、端部には平滑に研磨された面をもつ。台座などの可能性があるものの、時期は不明である。

**ピット出土遺物（13～17）** 13は須恵器盤あるいは蓋と推測できる細片、14は土師器高杯の脚部で、どちらも古代に位置づけられる。15は土師器皿で、斎宮III-3～III-4期に位置づけられる。16・17は陶器の山茶碗で、16は底部以外ほぼ完形である。斎宮III-3～III-4期に位置づけられる。

**包含層出土遺物（18～30）** 18は須恵器コップ形杯で、奈良時代に位置づけられる。19は須恵

器高杯で、内外面が黒色化しており、2次被熱によるものと考えられる。どの段階で被熱したかについてはわからない。土器そのものは斎宮I-1～I-2期に位置づけられる。20は灰釉陶器皿で、底部が焼膨れにより高台よりも下部にせり出している。斎宮II-4期に位置づけられる。21・22は陶器の山茶碗で、21は生焼けの資料である。どちらも斎宮IV期に位置づけられる。23は土師器の把手で、鍋か十納に付くものと考えられる。長さとしては鍋の可能性が高く、15～16世紀に位置づけられる。24・25は土師器茶釜形鍋で、伊藤編年のIVb期に該当し、把手と含め、16世紀前半に位置づけられる。26は西暦621年（唐）が初鑄となる開元通寶、27は1411年（明の時代）が初鑄となる永樂通寶で、どちらも中・近世に国内で流通した渡来銭と考えられる。28は砂岩製の砥石で、残存する面は全て使用痕がみられ、一部には金属の削痕が残る。時期は不明である。29・30は土錘で、29は小型で硬質、30は細長く硬質、ともに時期は不明である。

**表土出土遺物（31～34）** 31は土錘で、やや幅広で軟質、時期は不明である。32は須恵器平瓶の頸部で、外面には自然釉がみられる。斎宮I-1～I-2期に位置づけられる。33は陶器の山茶碗で、斎宮IV期、34は土師器茶釜形鍋で伊藤編年のIVb期に該当し、16世紀前半に位置づけられる。

### 註

(1) 土師器鍋については、伊藤裕偉氏の分類・編年を参照した。伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編 考古2 三重県 2008

S K 8587 (1~3)



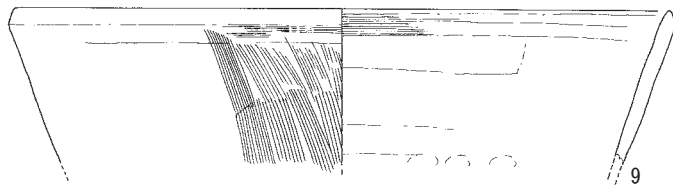
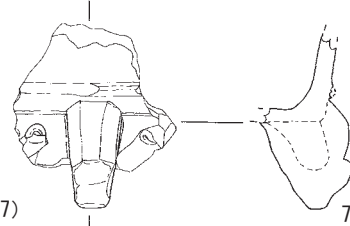
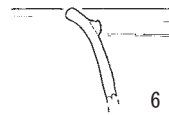
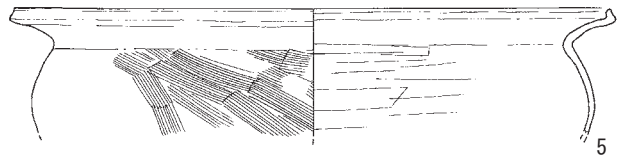
S D 11025 (4)



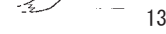
S Z 11027 (8~12)



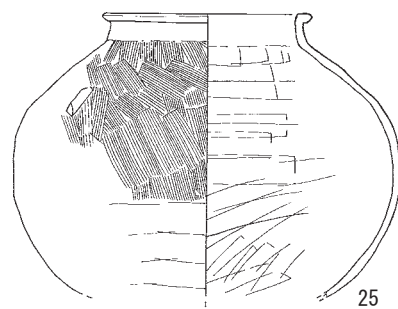
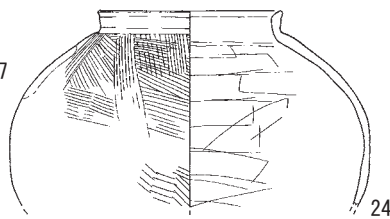
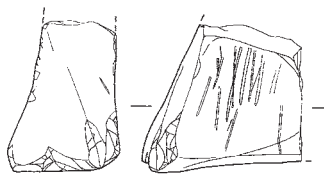
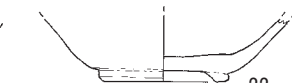
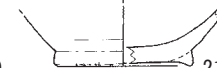
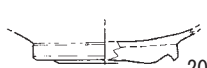
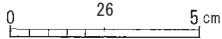
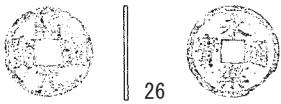
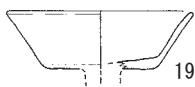
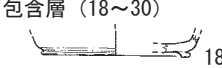
S Z 11026 (5~7)



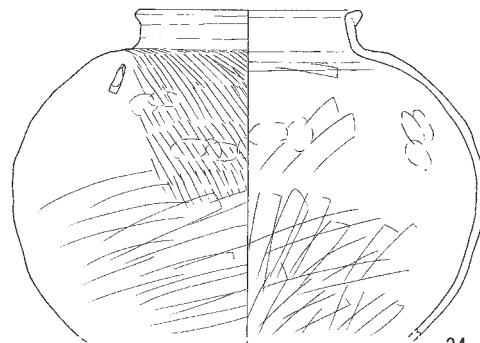
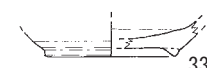
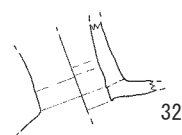
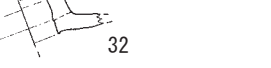
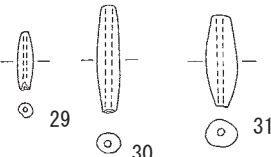
ピット (13~17)



包含層 (18~30)



表土 (31~34)



34

第II-5図 第190次調査 出土遺物実測図 (1/2・1/4)

番号	器種	器形	地区 遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
1	土師器	杯G	SK8587	口径 10.6 残高 3.3	外面・内面：摩滅	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12		003-05
2	土師器	杯G	SK8587	口径 10.4 残高 3.0	外面：ユビオサエ、ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 2/12		003-03
3	須恵器	杯G蓋	SK8587	口径 8.1 残高 1.6	外面：ロクロケズリ、ロクロナデ、ツمام貼付 (欠損) 内面：ロクロナデ	密	良	灰7.5Y5/1	口縁部7/12		006-03
4	陶器	山皿	SD11025	底径 5.3 残高 1.9	外面：ロクロケズリ、ロクロナデ、高台貼付 内面：ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	底部 1/12未満		003-07
5	土師器	鍋	SZ11026	口径 31.4 残高 6.6	外面：ハケ、ヨコナデ 内面：ヘラナデ、ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/12		006-01
6	瓦質土器	火鉢	SZ11026	残高 5.0	外面：突帯貼付、ヨコナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12未満	7と同一 個体か？	004-04
7	瓦質土器	火鉢	SZ11026	底径 37.0 残高 9.3	外面：ヘラケズリ、突帯貼付、脚部貼付、ナデ、 刺突 内面：ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	底部2/12	6と同一 個体か？	004-05
8	須恵器	壺	SZ11027	残高 7.8	外面：ロクロケズリ、ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰5Y6/1	細片		006-04
9	土師器	甌	SZ11027	口径 34.5 残高 8.2	外面：ハケ、ヨコナデ 内面：ハケ、ヨコナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12		006-02
10	灰釉陶器	皿	SZ11027	底径 8.5 残高 1.6	外面：ロクロケズリ、ロクロナデ、高台貼付 内面：ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	底部 1/12未満		003-02
11	陶器	山茶椀	SZ11027	底径 6.9 残高 2.3	外面：ロクロケズリ、ロクロナデ、高台貼付 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	底部4/12		003-06
12	石製品	不明 製品	SZ11027	残高 3.2	重さ120g、花崗岩	—	—		細片		003-08
13	須恵器	盤？	b9P17	残高 2.1	外面：ロクロケズリ 内面：ロクロナデ	密	良	灰7.5Y5/1	細片		003-04
14	土師器	高杯	a8P6	底径 10.4 残高 2.7	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ	密	良	黄橙7.5YR7/8	底部 1/12未満		003-01
15	土師器	皿	a10P2	口径 14.5 器高 2.3	外面：ユビオサエ、ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 5/12		004-01
16	陶器	山茶椀	b9P1	口径 15.9 器高 6.1 底径 6.2	外面：ロクロナデ、糸切、高台貼付 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	口縁部11/12 底部1/12		005-05
17	陶器	山茶椀	a10P2	底径 6.6 残高 1.5	外面：ロクロナデ、糸切、高台貼付 内面：ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	底部3/12		005-03
18	須恵器	杯	包含層	底径 7.0 残高 1.2	外面：ロクロケズリ、ロクロナデ、高台貼付 内面：ロクロナデ	密	良	灰5Y6/1	底部2/12		005-01
19	須恵器	高杯	包含層	口径 9.6 残高 3.0	外面：ロクロケズリ、ロクロナデ、2次被熱 内面：ロクロナデ、2次被熱	密	良	黒10Y2/1	口縁部2/12		005-04
20	灰釉陶器	皿	包含層	底径 7.3 残高 1.7	外面：ロクロケズリ、ロクロナデ、高台貼付 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	底部2/12		005-02
21	陶器	山茶椀	包含層	底径 7.1 残高 3.0	外面：ロクロナデ、糸切、高台貼付、モミガラ 圧痕 内面：ロクロナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	底部4/12		004-03
22	陶器	山茶椀	包含層	底径 6.1 残高 3.5	外面：ロクロナデ、糸切、高台貼付 内面：ロクロナデ	密	良	暗灰黄2.5Y5/2	底部完形		002-02
23	土師器	把手	包含層	径 3.6 残長 3.9	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	把手部 完形	鍋把手か 十納	004-06
24	土師器	鍋	包含層	口径 9.5 残高 10.3	外面：ハケ、把手貼付、煤付着 内面：ヘラナデ、ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部6/12	茶釜形	001-02
25	土師器	鍋	包含層	口径 10.7 残高 14.9	外面：ヘラナデ、ハケ、把手貼付、煤付着 内面：ヘラナデ、ヨコナデ、煤付着	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 ほぼ完形	茶釜形	002-01
26	金属製品	銅銭	包含層	直径 2.4	重さ2.34g、開元通寶	—	—	—	ほぼ完形		002-04
27	金属製品	銅銭	包含層	直径 2.5	重さ1.91g、永楽通寶	—	—	—	ほぼ完形		002-05
28	石製品	砥石	包含層	残長 8.5 幅 7.8 厚さ 6.0	重さ409g、砂岩	—	—	—	一部		005-06
29	土製品	土錘	包含層	長さ 3.1 幅 0.8	重さ1.76g、孔径0.2cm	密	良	橙5YR6/6	ほぼ完形	硬質	002-07
30	土製品	土錘	包含層	長さ 5.7 幅 1.2	重さ6.67g、孔径0.35cm	密	良	暗灰黄2.5Y5/2	ほぼ完形	硬質	002-08
31	土製品	土錘	表土	長さ 4.8 幅 1.7	重さ9.45g、孔径0.3cm	密	良	浅黄橙10YR8/3	完形	軟質	002-06
32	須恵器	平瓶	表土	頸部径 4.4 残高 4.4	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ、ユビオサエ、頸部鏡切	密	良	自然釉：瑠寛茶983 素地：灰5Y5/1	頸部 6/12		004-02
33	陶器	山茶椀	表土	底径 6.7 残高 1.9	外面：ロクロケズリ、ロクロナデ、糸切、高台 貼付 内面：ロクロナデ	密	良	暗灰黄2.5Y5/2	底部 1/12未満		002-03
34	土師器	鍋	表土	口径 11.5 残高 17.2	外面：ヘラナデ、ハケ、把手貼付、煤付着 内面：ヘラナデ、ユビナデ、ヨコナデ、煤付着	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部6/12	茶釜形	001-01

第Ⅱ－２表 第190次調査 遺物観察表



## 5 まとめ

第190次調査では、S F 8945西側の飛鳥～奈良時代の遺構配置として、新たに堅穴建物状の土坑などが複数基確認できた。ただし、調査区の大部分は室町～江戸時代の溝や落ち込みなどにより大きく改変されており、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物などの主要遺構配置の確認については、今後の調査による解明が期待される。

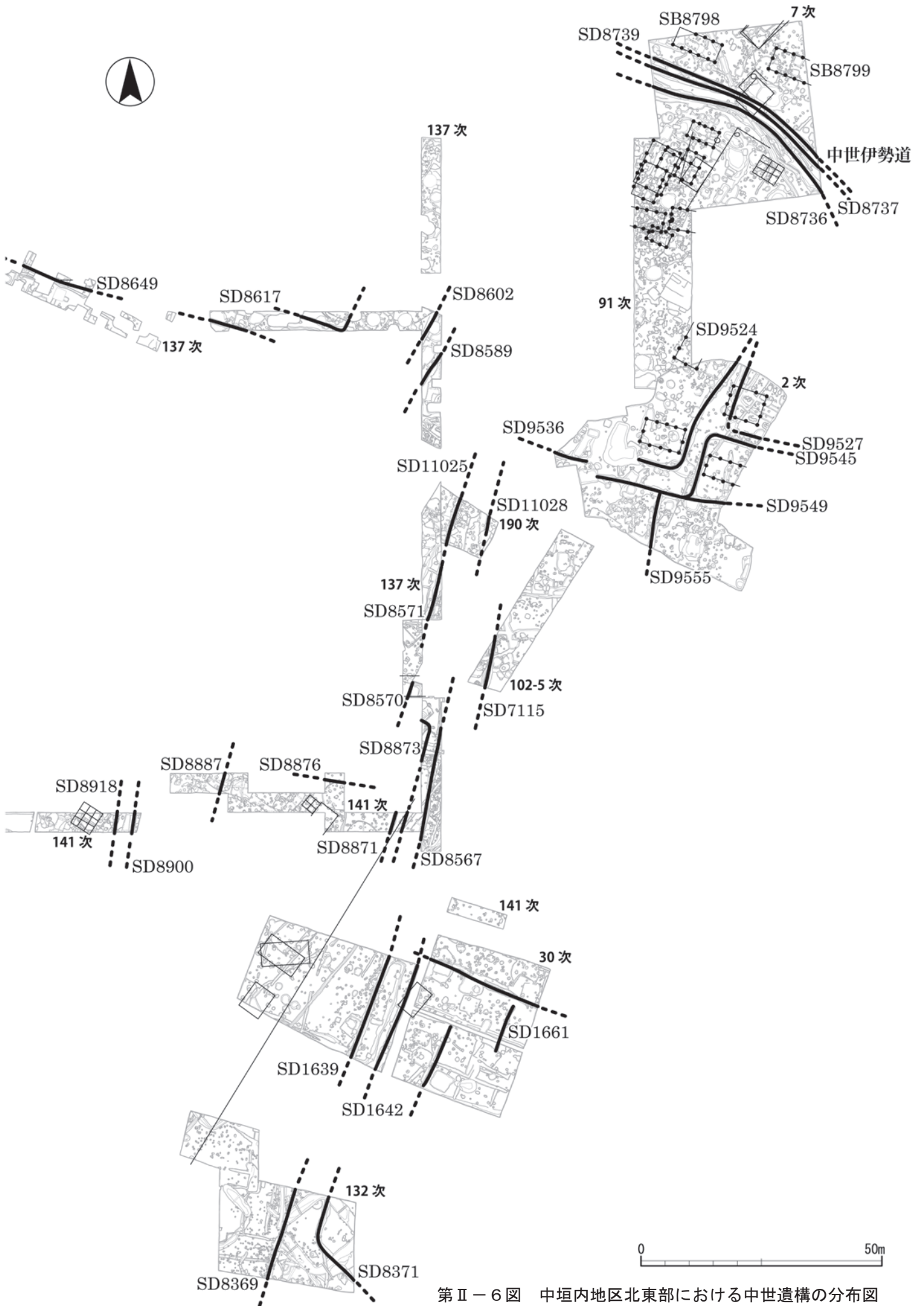
### ・第190次調査周辺の中世遺構群の様相

過去の古里～中垣内地区周辺の発掘調査からみて、中世においては継続的な土地利用の在り方であったわけではなく、時期別に利用された場所が変遷している可能性が指摘されている<sup>(1)</sup>。特に中垣内地区は、中世でも室町時代に該当する遺構が数多く検出されてきた。今回検出したS D 11025・11028も概ね室町時代に掘削された溝で、方位が北から東に15～20°の傾きをもつ。付近には同様の方位で配置された溝が、東西主軸、南北主軸で多数確認されている。また、こうした溝群の中には、軸線を揃え5 m前後の幅で道路状に、あるいは溝の内外に建物群が検出されている場合もあり、屋敷地の区画溝兼道路側溝としての機能を想定することが妥当であろう。特に第7

次調査で検出した、S D 8736・8737・8739からなる中世伊勢道の周囲には、建物群が点在しており、この道路を基点として、中垣内地区ではいくつかの方形区画が南方向に配置されていたことを想定できる。例えば、第2次調査で検出したS D 9524・9549は逆L字形に曲がる道路状遺構を形成し、その基点は中世伊勢道付近であることが予想される。さらに、東西軸の第2次調査S D 9549から第30次調査S D 1649までは、おおよそ110m（1町）で配置されており、計画的な区画設計が行われた可能性がある。現状では、断片的に把握できている溝からの推測であるため、仮設の域はでない。しかし、これまであまり認識されてこなかった、齋宮廃絶後の室町時代の中垣内地区の土地利用を把握することは、それ以前の、特に鎌倉時代における齋宮の在り方の一端を知る手がかりとなり、今後も飛鳥～奈良時代の実態解明とともに、調査データの蓄積を進めたい。

### 註

- (1) 大川勝宏「IV 第2次調査（古里遺跡A地区）概要報告」『史跡齋宮跡 平成17年度発掘調査概報』2007



第II-6図 中垣内地区北東部における中世遺構の分布図 (1/1,000)

写真図版 1



第190次調査区全景（南から）



S D11025と古代の土坑群（南西から）

25・34





第190次調査出土遺物



### Ⅲ 第193次調査 (6AG10 中垣内地区)

#### 1 はじめに

第193次調査地は、史跡西部の中垣内地区でも西に位置し、南約40mで近鉄山田線、西に約90mで段丘崖に至る。発掘調査前は畑地として土地利用されており、調査区西には旧若宮（八幡）神社の石碑のある森が隣接している。調査地周辺の既往調査は、第85－8次・100次・107次・144次・189次・192次調査などが行われており、「初期斎宮」と呼称されてきた飛鳥・奈良時代の斎宮中枢域に関連する掘立柱塀、掘立柱建物、堅穴建物、土坑、溝などが検出されている。

特に第193次調査地の南西約30mに位置する第85－8次調査では、北から東に約33°で振る飛鳥時代の掘立柱塀S A6280を確認している。塀は、部分的に布掘工法の柱穴をもつとされる塀で、一辺1～1.4mの柱掘形、柱間寸法が1.8～2.4mを測る。さらに塀の周囲には、6棟分の掘立柱建物があり、塀の西側には布掘をもつ総柱建物S B6279とそれに類する建物と推測されるS B6278、塀の東側には総柱建物S B6301、側柱建物と推測されるS B6281・6292、また、塀と重複するS B6290（遺構の先後関係から塀より新しい）がある。これら建物群は、塀を含めて、いずれの柱穴からも細片の土器しか出土せず、明確な時期比定には至っていない。ただし、建物群の時期を奈良時代以降とする確実な遺物もなく、現状の時期決定の根拠は、中垣内地区の東部に延びる、奈良時代以前と想定される古代伊勢道南側派生道路の敷設軸に合わせた配置状況から推定している。

そしてS A6280の柱列がどのような区画を構成していたのかは、平成29年度の第192次調査により、西辺となる柱列を確認できなかったこと、塀西側約30mの飛鳥時代の遺構密度が極めて低いことから、塀の西側に方形区画を構成す

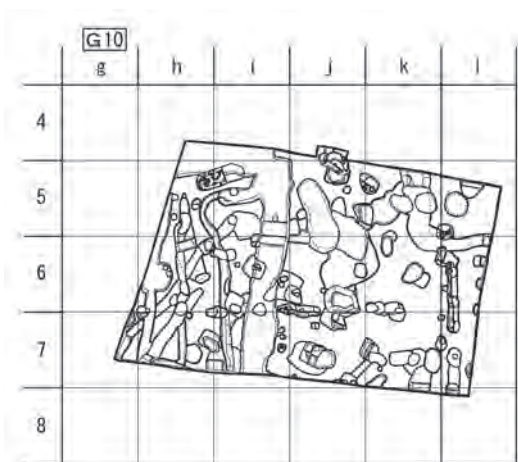
る可能性は排除できた。それにより、塀が区画を構成するならば、塀の東側に配置されている蓋然性が高くなった。

今回の第193次調査では、これまでの調査の蓄積を受けて、S A6280を区画の西辺と推定し、それに対面する東辺を確認することで、飛鳥時代斎宮の区画範囲を確定、あるいは区画内部の様相を把握する目的で実施した。

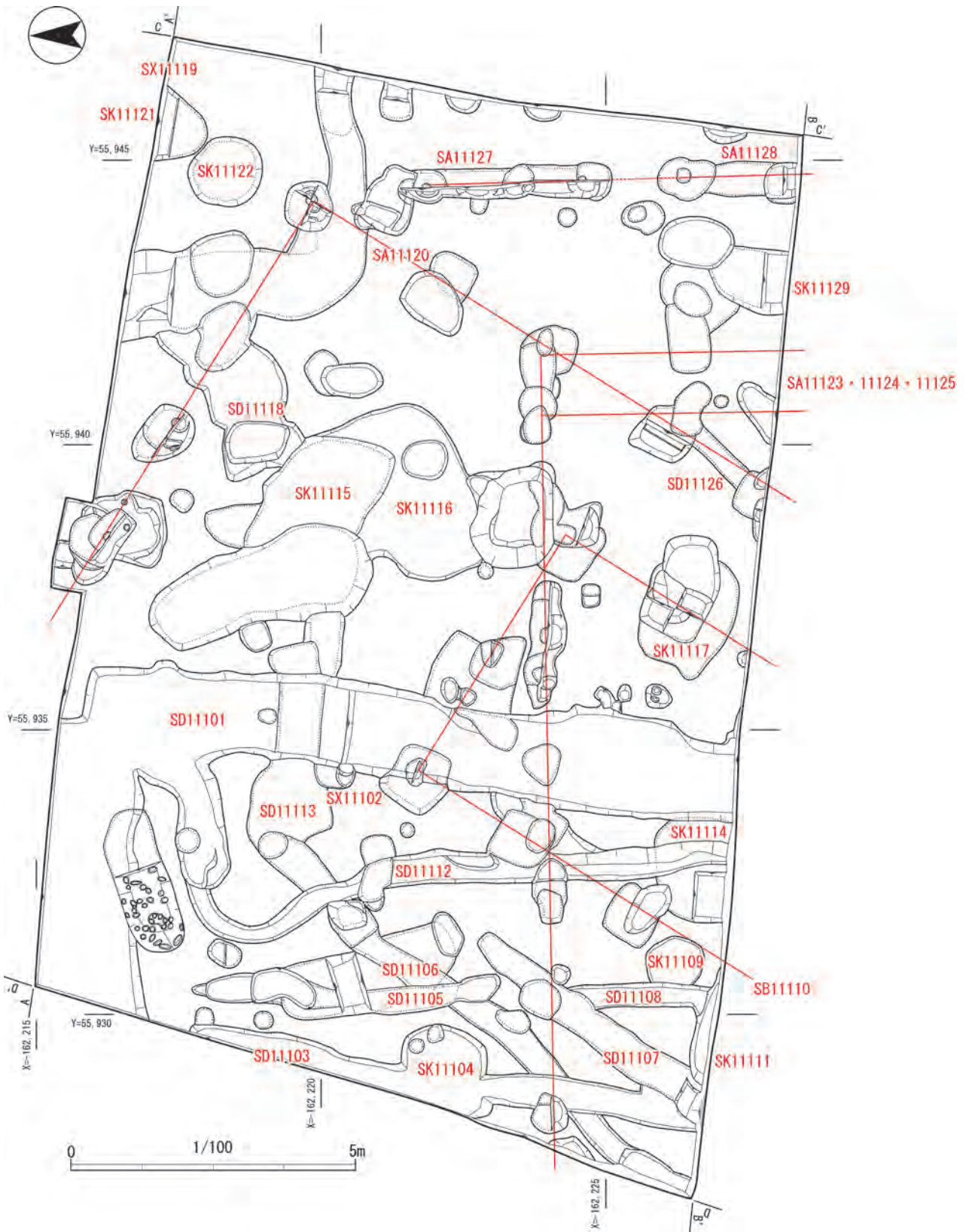
第193次調査の調査面積は204.5㎡、調査期間は平成30年6月4日～平成30年8月31日である。

#### 2 地形環境と地層

第193次調査地は、段丘西側の平坦面で、約14mの標高を測り沖積低地から3～4mの比高がある。基本層序は上から、表土（耕作土）、近世の遺物包含層、古代の包含層、弥生時代の包含層、地山からなり、地山面までの深度は北端も南端も0.55mを測る。遺構の検出は、本来であれば遺物包含層の上面で行うべきだが、包含層と遺構埋土の碎屑物の構成及び色調が似ているため、遺構検出が極めて困難となる。誤認を回避するために、遺構の正しい認識が可能となる地山上面で行った。



第Ⅲ－1図 第193次調査 グリッド図 (1/400)



第三 - 2 図 第193次調査 遺構平面図 (1/100)

### 3 遺構

調査の結果、弥生時代・飛鳥時代・奈良時代・中世以降の各種遺構を検出した。その内訳は弥生時代の方形周溝墓2基、溝2条、土坑8基、飛鳥時代の掘立柱塀1列、掘立柱建物1棟、溝1条、奈良時代の柱列5列、土坑1基、中世以降の溝4条となる。

#### (1) 弥生時代の遺構

##### ・方形周溝墓

**S X 11102** h・i・j5・6・7で検出した、四隅が途切れる形態の溝をもつ方形周溝墓で、比較的残存状況が良好な東西溝の内側で6.0mの規模、南北溝の内側で約6.1mの規模を測る。周溝1～3は後世の遺構と重複していたが、明瞭に周溝とわかるように残存していた(第Ⅲ-4図)。ただし南辺の周溝3は、SD11101により著しく改変を受け、明瞭には検出できなかった。各周溝の規模は、北辺の周溝1が長さ2.6m、幅1.0m、西辺の周溝2が長さ3.2m、幅1.2m、南辺の周溝3は規模不明、東辺の周溝4は長さ4.0m、幅1.7mを測る。断面は、西辺の周溝2で中央部北側にトレンチを入れ、地山面からの深度が0.4mの逆台形を呈する。また、北辺の周溝1で西側を半裁したが、底面より掘削時の痕跡である小ピットを多数検出した。本来は粘質土などで掘削痕跡を覆っていた可能性は考えられるものの、調査時に明瞭な粘質土は確認できなかった。遺構の時期は、四隅が途切れる周溝の形態や出土遺物(1～9)から弥生時代中期中葉に位置づけられる。

**S X 11119** k・15・6で検出した、隅が途切れない溝をもつ方形周溝墓である。周溝の内側での南北辺が約3.5m、東西辺が約3.6mでそれぞれ調査区外に続く。飛鳥時代のS A 11120の柱穴が2か所で重複している。周溝の幅は、北端で最も広く1.6m、一方で東端は最も狭く0.6mほどしかない。周溝の断面は、調査区北・東壁をみると、どちらも弥生時代の包含層を掘り込み、北側は深さ0.6m、東側は0.4mの逆台形を呈する。遺構の時期は、遺物が少なく不鮮明で

あるが、隅が途切れない周溝の形状から弥生時代中期中葉に位置づけられる。

##### ・土坑

**S K 11104** h6で検出した一辺1.5mの不整楕円形の土坑で、西側は調査区外に続き、中央部に後世のSD11103が重複する。そのため上層は失われ、断面は浅く、地山面から0.2mしか残存していなかった。出土遺物から弥生時代中期に位置づけられる。

**S K 11109** h7で検出した一辺1.0mの円形の土坑で、西側は後世のSD11108が重複する。断面は浅く、地山面から0.2mしか残存していなかった。出土遺物から弥生時代中期に位置づけられる。

**S K 11114** h・i7で検出した一辺1.9mの隅丸方形の土坑で、南側は調査区外に続き、中央部をSD11112、東側はSD11101が重複する。断面は、南西側にトレンチを入れたところ、地山面から深さ0.2mの逆台形を呈する。出土遺物から弥生時代中期に位置づけられる。

**S K 11115** j・k5・6で検出した長さ2.5m以上、幅1.9mの不整長方形の土坑で、西側はS X 11102の周溝4、南側はS K 11116と重複している。出土遺物から弥生時代中期に位置づけられる。

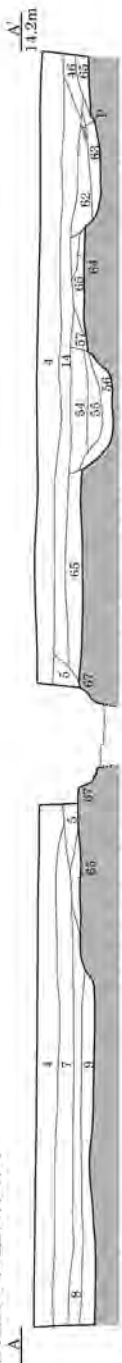
**S K 11116** j・k6で検出した長さ3.2m、幅2.1m以上の不整形の土坑で、北側はS X 11102の周溝4とS K 11115、南側はカクランが重複している。出土遺物から弥生時代中期に位置づけられる。

**S K 11117** j7で検出した長さ2.1m、幅1.5m以上の不整楕円形の土坑で、北側はS B 11110の柱穴5とカクランが重複している。出土遺物から弥生時代中期に位置づけられる。

**S K 11121** 15で検出した長さ1.3m以上、幅0.8m以上の不整楕円形の土坑で、北側は調査区外に続く。S X 11119の中心部付近に位置することが予測され、主体部の可能性も残るが、断片的な検出であるため、その可否は今後の調査に期待したい。断面は、調査区北壁をみると弥生時代の包含層を掘り込み、深さ0.4mの逆台形を呈する。出土遺物から弥生時代中期に位置づ



調査区北壁断面図



【SD11101】

- 7 10YR4/3にぶい黄褐細粒砂～極細粒砂に  
径200μ以下の礫・瓦・近世陶磁器を多く含む
- 8 10YR3/3暗褐色極細粒砂に  
径200μ以下の礫・瓦・近世陶磁器を多く含む
- 9 10YR2/3黒褐色極細粒砂に  
径100μ以下の礫を多く含む

【近世の落ち込み・SD11103・11108】

- 5 10YR4/3にぶい黄褐細粒砂～シルト、しまり弱

【SK11119 周溝】

- 54 10YR2/2～2/1黒褐色～黒極細粒砂～シルトに  
10YR3/4暗褐色シルトブロックを20%含む
- 55 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルトに  
地山ブロックを5%含む
- 56 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルトに  
地山ブロックを20%含む

【SK11121】

- 62 10YR2/1黒極細粒砂～シルトに  
弥生土器片を含む
- 63 62層に地山ブロックを10%含む
- 64 10YR3/3暗褐色シルト

【表土】

- 4 10YR4/4暗褐色細粒砂～シルト

【攪乱】

- 1 10YR4/2灰青褐色シルトに  
炭化粒子を20%含む
- 2 10YR4/3にぶい黄褐極細粒砂～シルト、しまり弱
- 11 10YR2/1黒極細粒砂～シルト
- 13 10YR4/2灰青褐色細粒砂～シルト、しまり弱

調査区南壁断面図



【SA11128 柱穴 2】

- 38 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトに  
10YR4/2灰青褐色シルトブロックを10%含む
- 39 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルトに  
10YR4/2灰青褐色細粒砂～シルトブロックを15%含む
- 40 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト
- 41 10YR3/3暗褐色細粒砂～シルトに  
地山ブロックを20%含む
- 42 10YR4/4極細中粒砂～シルト

【SK11129】

- 20 10YR3/3暗褐色シルト
- 21 10YR5/2灰青褐色シルト、しまり強
- 22 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト

【SK11114】

- 58 10YR2/2～2/1黒褐色～黒シルトに  
地山ブロックを15%含む

【SK11111】

- 49 10YR3/4暗褐色細粒砂～シルトに  
地山ブロックを5%含む (土坑2)

【SD11112】

- 18 10YR4/3にぶい黄褐中粒砂～シルト、しまり極弱
- 19 10YR3/3暗褐色細粒砂～シルト

【SD11103】

- 6 10YR4/3にぶい黄褐細粒砂～シルトに  
10YR2/2黒褐色シルトブロック、地山ブロックを10%ずつ含む

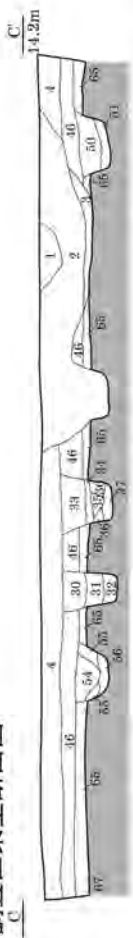
【SD11107】

- 59 10YR2/1黒極細粒砂～シルト
- 60 10YR2/1黒シルト

【SD11106】

- 48 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルトに  
地山ブロックを20%含む

調査区東壁断面図



【ピット】

- 30 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト
- 31 10YR3/4暗褐色極細粒砂～極細粒砂
- 32 31層に地山ブロックを15%含む

【ピット】

- 33 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト
- 34 10YR3/2暗褐色極細粒砂～シルト
- 35 10YR2/2黒褐色シルト
- 36 10YR3/4暗褐色極細粒砂
- 37 36層に地山ブロックを10%含む

【ピット】

- 50 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルト【ピット】
- 51 50層に地山ブロックを10%含む【ピット】

【その他遺構】

- 12 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト【ピット】
- 15 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト【ピット】
- 16 10YR4/3にぶい黄褐細粒砂～シルト
- 17 10YR4/2灰青褐色細粒砂～シルト
- 27 10YR3/3暗褐色細粒砂～極細粒砂【古代の落ち込み?】
- 52 10YR2/2黒褐色シルトに  
10YR2/2暗褐色シルトブロックを20%含む【弥生時代遺構】
- 66 10YR3/3暗褐色シルト

【包含層】

- 14 10YR3/4暗褐色細粒砂～極細粒砂に  
0.10mm以下の礫・瓦をわずかに含む【近世】
- 29 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルト【奈良時代】
- 46 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルトに  
10YR3/4暗褐色極細粒砂を粒子状に20%含む【古代?】
- 47 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルト【古代?】
- 53 10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルトに  
地山ブロックを10%含む【古代】
- 57 10YR2/2～2/1黒褐色～黒シルト【弥生時代】
- 65 10YR2/2～2/1黒褐色～黒褐色細粒砂～シルトに  
地山ブロックを20%含む【弥生時代包含層】

【地山】

- 57 10YR5/8黄褐色シルト

1/100

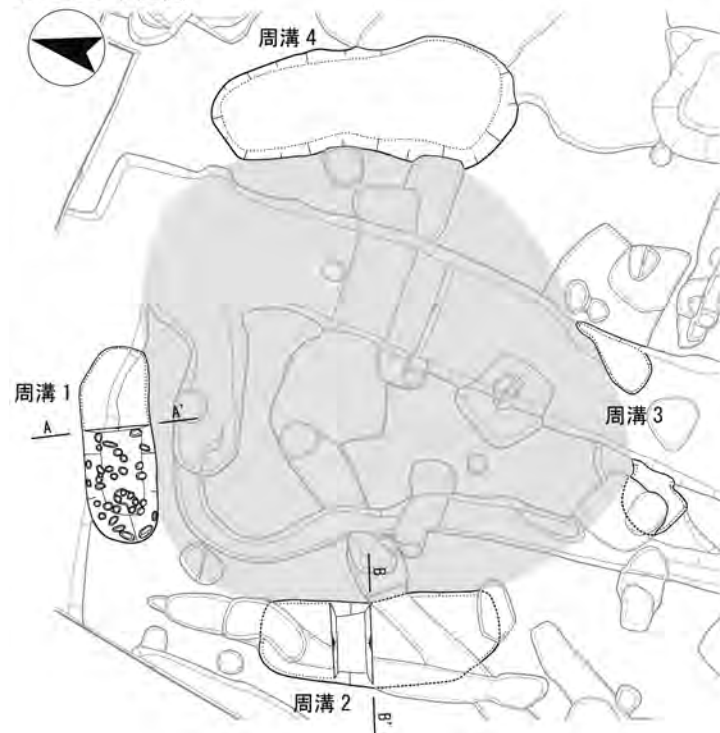
0

5m

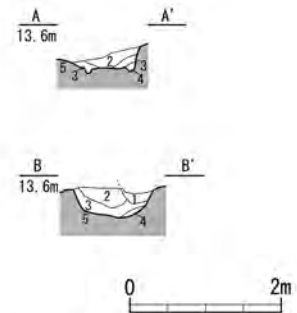
第三 - 3 図 第193次調査 土層断面図 (1/100)



SX11102 平面図



SX11102 断面図



SX11102 土層注記

- 1 10YR2/3黒褐極細粒砂【SD11105】
- 2 10YR2/1~2/2黒~黒褐極細粒砂に  
地山を粒子状に1%含む【周溝埋土】
- 3 10YR2/2黒褐極細粒砂に  
地山を粒子状に20%含む【周溝埋土】
- 4 10YR5/6黄褐中粒砂~シルトに  
10YR2/2黒褐シルトを10%含む【周溝外装粘土か?】
- 5 10YR5/8黄褐シルト【地山】

第三-4図 SX11102平面・断面図 (1/100)

けられる。

S K11122 15で検出した径1.3mの円形の土坑で、北東はS K11121と隣接するものの、重複しない。出土遺物から弥生時代中期に位置づけられる。

・溝

S D11113 i・j5・6で検出した長さ4.3m以上、幅1.5mの溝で、西端をS D11106、中央部をS D11101、東端をS X11102の周溝4が重複している。断面は半裁していないためわからないが、S D11101の底面からもS D11113の埋土を確認しているため、深さは弥生時代の包含層から0.4m以上はあったことがわかる。S X11102の周溝よりも古いことと、出土遺物から弥生時代中期に位置づけられる。

S D11118 j・k5で検出した長さ3.0m以上、幅1.6m以上の溝で、西端をS K11115、東端をS X11119、S A11120が重複している。この重複関係からS X11119の周溝よりも古いことと、出土遺物から弥生時代中期に位置づけられる。

(2) 飛鳥時代の遺構

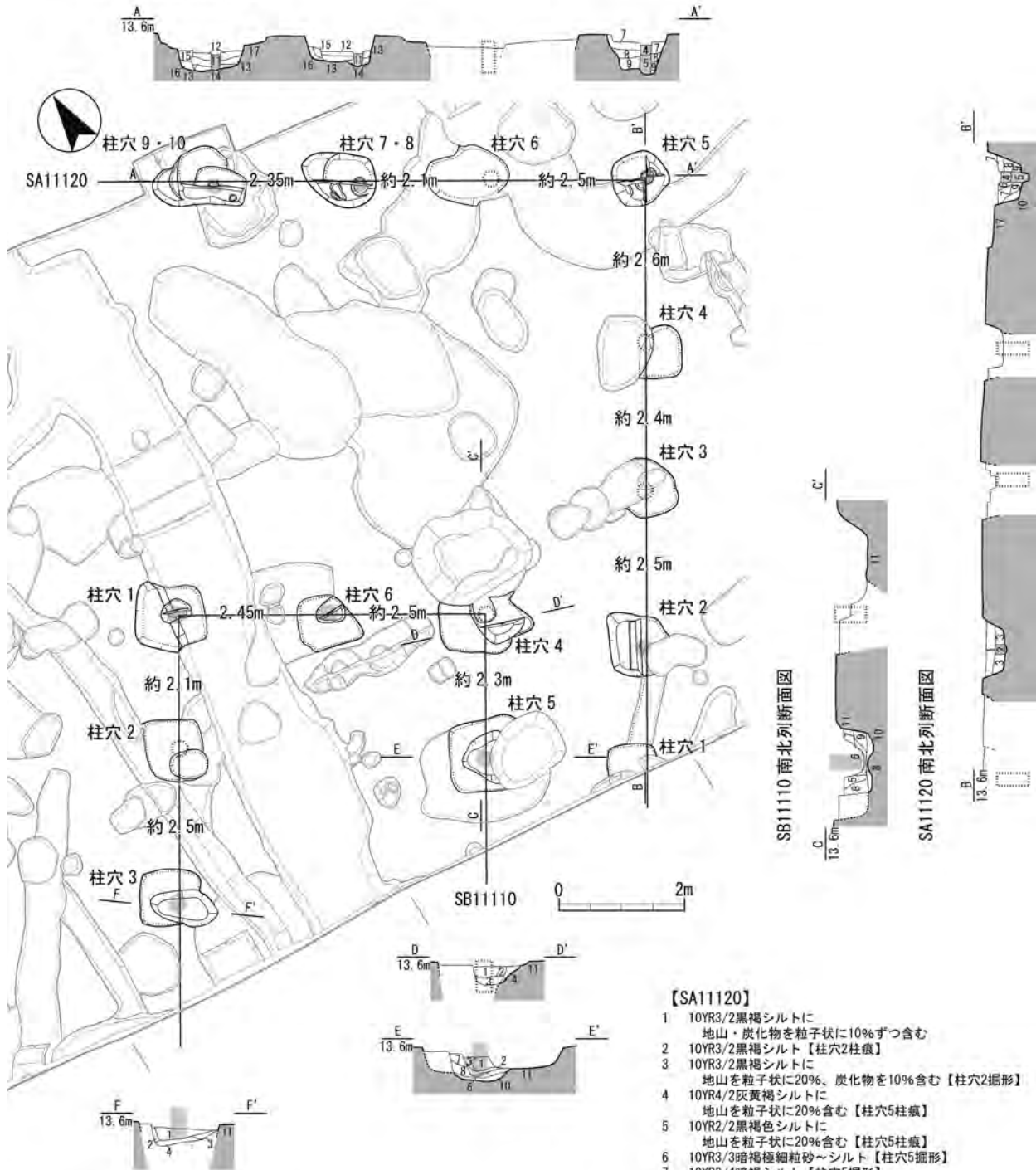
・掘立柱塼

S A11120 j・k・15・k6・j・k7で検出した、北から東に33°振る掘立柱塼となる柱列で、方形区画の東側南北列と北側東西列の角に該当する。

東側南北列は柱穴1~5の計5基の柱穴を検出し、柱穴1より南は調査区外に続く(第三-5図)。今回検出した長さは、柱穴5から測ると6.3m分になり、柱間寸法は、柱痕を確認していないものもあり、推測の域をでないが、北から2.6m、2.4m、2.5mとやや不均一である。各柱穴は、不整形なものを含むが、隅丸方形や楕円形、あるいはそれらが混合した形状を呈している。柱掘形は、一辺0.8~1.0mを測り、半裁した柱穴2の断面観察や平面観察からは建て替えを示す特徴は見受けられなかった。なお、柱穴1・2間に位置するS D11126は、第85-8次調査のS D6280で確認された布掘り状の溝となる可能性もあるが、柱列と主軸が合致しないこと、溝の深さが浅いことなどから断定はできない。

北側東西列は柱穴6~10の計5基の柱穴を3か所で検出し、柱穴9・10より西は調査区外に

SA11120 東西列断面図



【SB11110】

- 1 10YR6/3にぶい黄橙シルトに  
10YR2/2黒褐シルトブロックを30%含む【抜き取り】
- 2 10YR2/2黒褐シルト【抜き取り】
- 3 10YR2/2黒褐シルトに  
地山ブロックを5%含む【抜き取り】
- 4 10YR3/1黒褐極細粒砂【抜き取り】
- 5 10YR4/2灰黄褐細粒砂～極細粒砂【根カラン?】
- 6 10YR2/2黒褐シルトに  
地山を粒子状に10%含む、しまり強【柱の当たり】
- 7 10YR2/1～2/2黒～黒褐シルト【掘形】
- 8 10YR2/1黒シルト【掘形】
- 9 8層に地山ブロックを20%含む【掘形】
- 10 10YR2/2黒褐シルトに  
地山ブロックを10%含む、しまり強【掘形】
- 11 10YR5/8黄褐シルト【地山】

【SA11120】

- 1 10YR3/2黒褐シルトに  
地山・炭化物を粒子状に10%ずつ含む
- 2 10YR3/2黒褐シルト【柱穴2柱痕】
- 3 10YR3/2黒褐シルトに  
地山を粒子状に20%、炭化物を10%含む【柱穴2掘形】
- 4 10YR4/2灰黄褐シルトに  
地山を粒子状に20%含む【柱穴5柱痕】
- 5 10YR2/2黒褐色シルトに  
地山を粒子状に20%含む【柱穴5柱痕】
- 6 10YR3/3暗褐極細粒砂～シルト【柱穴5掘形】
- 7 10YR3/4暗褐シルト【柱穴5掘形】
- 8 10YR2/2黒褐シルトに  
地山ブロックを10%含む【柱穴5掘形】
- 9 10YR2/2黒褐シルトに  
地山ブロックを30%含む【柱穴5掘形】
- 10 10YR3/2黒褐極細粒砂～シルト【柱穴5掘形】
- 11 10YR3/2黒褐シルトに  
炭化物を粒子状に5%含む【柱穴8・10柱痕】
- 12 10YR2/2黒褐シルトに  
地山・炭化物を粒子状に10%含む【柱穴7・8掘形】
- 13 10YR2/2黒褐シルトに  
地山を粒子状に10%含む【柱穴7・8掘形】
- 14 10YR2/2黒褐シルトに  
地山ブロックを15%含む【柱穴7・8掘形】
- 15 10YR3/3暗褐シルトに  
地山を粒子状に5%含む【柱穴9・10掘形】
- 16 10YR2/3黒褐シルトに  
地山を粒子状に3%含む【柱穴9・10掘形】
- 17 10YR5/8黄褐シルト【地山】

続く。今回検出した長さは、柱穴5から測ると8.0m分になり、柱間寸法は、東から2.5m、2.1m、2.35mと不均一である。各柱穴上層面の形状は、南北列よりも東西に幅の広い不整形な楕円形が主体であったが、柱穴7～10の西側の2か所は段下げおよび半裁により、1度の建て替えが行われていることがわかった。また柱穴6も、その平面形状や柱間から予測される柱痕の位置より、柱穴7～10同様に1度の建て替えが行われていることが予測される。建て替え前の当初の柱掘形は、柱穴9で平面形状が一部残存しており、一辺0.8～0.9mの不整楕円形や隅丸方形となることが想定できる。建て替え後の柱掘形も同様で、一辺0.8～0.9mの不整楕円形や隅丸方形となる。

区画の角に該当する柱穴5は、径0.9mの円形の柱掘形をもち、平面・断面観察からは建て替えは見受けられなかった。

南北列・東西列・角の柱穴を通じて、柱痕の太さは0.2m前後で、柱掘形の深さは角の柱穴5や東西列の柱穴9・10で底面の標高が12.7mと最も深く、南北列の柱穴2で底面の標高が13.1mと最も浅い。これは第85～8次調査のSA6280の柱列底面の標高値である12.8～13.0mと大差なく、両柱列が同一区画を形成すると想定することに矛盾がないことを示す要素の一つである。

遺構の時期は出土遺物が少なく、遺物から示すことはできない。しかし、遺物には明確に奈良時代以降である特徴を示すものは含まれていない。加えて、北から東に33°振る特徴は、奈良時代の区画SA9472がほぼ正方位で配置される様相とは一線を画する。これらを踏まえると、SA11120は奈良時代よりも前、飛鳥時代に属する可能性が高くなる。なお、具体的な時期の考察については後述する。

#### ・掘立柱建物

SB11110 i・j6・h・j7で検出した、北から東に33°振る南北棟の側柱建物で、先述したSA11120と並行することから、方形区画北東角部に計画的に配置された建物と推測する（第

III-5図）。SD11101やSD11112などの後世の遺構掘削に伴い、上層部が一部失われているが、柱穴1などはSD11101の底面でも埋土が残存していた。桁行は3間（6.3m）以上で、柱痕は未確認のものも含まれるが、柱間寸法はいずれも2.3m程である。梁行は2間（4.95m）で、こちらも柱痕は未確認のものを含むが、柱間寸法は2.45mと2.5mとなり、ほぼ等間隔に配置されている。いずれの柱穴も東方向への抜き取り痕を伴い、抜き取り後には黄色系シルトが充填されていた。

抜き取り痕を全て掘削した柱穴5では、下層に硬化した柱掘形埋土が広がる部分がみられた。このことから、柱掘形底面の地山直上に柱を据え置いたわけではなく、掘形埋土を敷き、そこをタタキ締めるなどの所作を加えた上で柱を据え置いたと推測できる。

遺構の時期は出土遺物が少なく、遺物から示すことはできない。ただし、SA11120と同様に北から東に33°振ることから、飛鳥時代に属する可能性が高い。

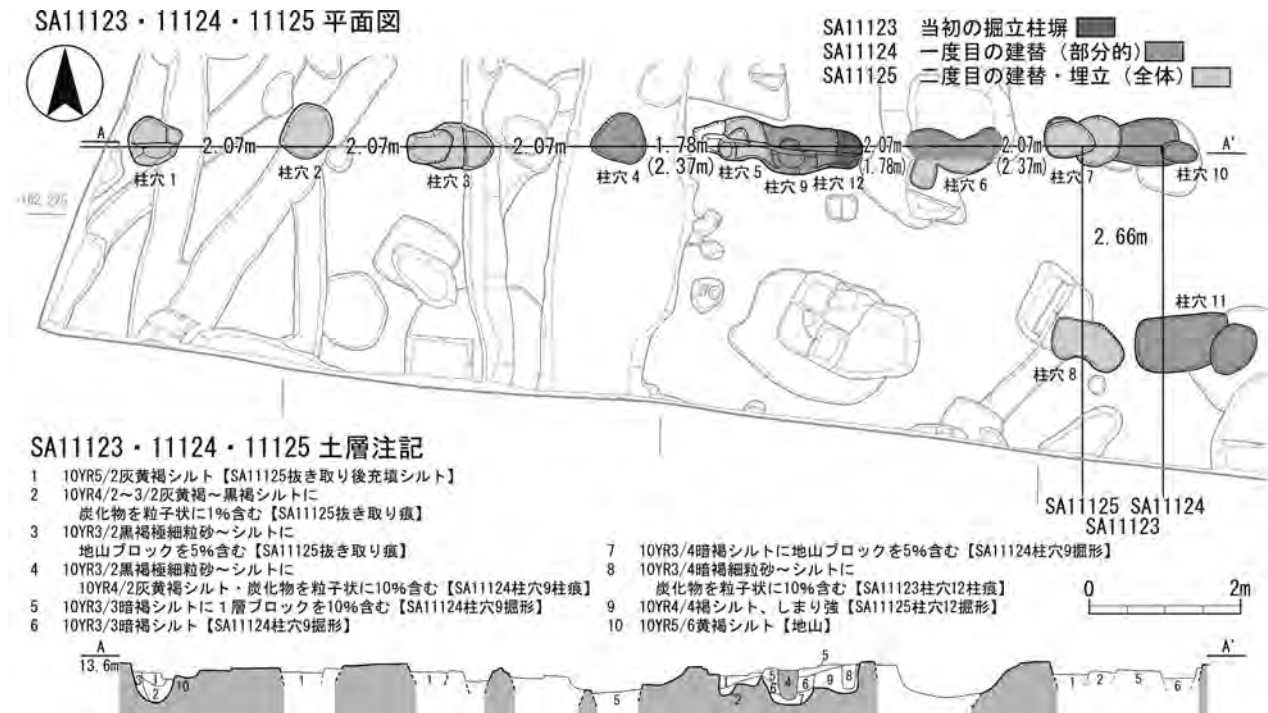
#### ・溝

SD11107 h6・7で検出した溝で、長さ5m以上、幅0.7mを測り、南側は調査区外に続く。後世のSD11103・11108・SK11111が重複し、上層部が失われている。調査区南壁をみると弥生時代包含層から0.9mと深く掘り込まれており、断面はU字形を呈する。

遺構の時期は出土遺物が少なく不明瞭であるが、溝主軸の北から東に約33°振ることから飛鳥時代の塀・建物などに付随する溝の可能性はある。

SD11126 j・k7で検出した溝で、SA11120の柱穴間に配置されていることから、先述した通りSA11120の布掘り状の溝の可能性はある。浅い溝であることが予想されるため、布掘りであれば、溝の底部に近い場所を検出している。そのために主軸がSA11120とは異なっている可能性もあるが、正確にはわからない。今後の南側の調査で同様の布掘り状の溝が確認されることを期待したい。





第三—6図 SA11123・11124・11125平面・断面図（1/100）

### （3）奈良時代の遺構

#### ・掘立柱塼

SA11123・11124・11125 j5・h・i・j・k6・7で検出した、方位がほぼ正方位（北から西に1°振る）の柱列群で、平面および土層観察から、同一場所付近で最低でも2度の建て替えが行われたと考えられる。東西列は7間以上、南北列は2間以上でそれぞれ調査区外に続く（第三—6図）。現状では掘立柱建物として断定できないため塼としているが、第193次調査区の南側約10mに位置する第100次調査区では、この塼と連なる柱列は確認されていない。今後の調査によるが、調査区間の10mの間に建物として南側東西列が確認される可能性が高い。

SA11123として、最も古い段階に位置づけられるものは柱穴12を確認したのみで、その他の柱穴は2度の建て替え時に重複して失われていたものと推測する。掘形埋土に特徴があり、3段階の内で、最も地山に近い埋土が充填され、突き固められていた。ただし、柱穴12以外の柱穴は失われているため、SA11124・11125と同様の柱穴配置であったかどうかは、厳密にはわからない。

SA11124は、柱穴9がSA11123の柱穴12お

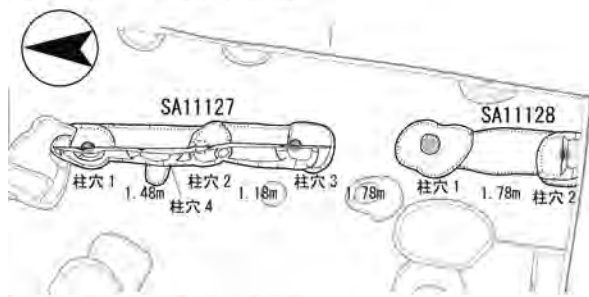
よびSA11125の柱穴5と重複していることから、一度目の建て替え時に相当すると推測した。柱穴9・10・11が該当し、それ以外の柱穴は、次の段階のSA11125によって失われているか、建て替えそのものが全体的なものではなく、北辺の一部と東辺など、部分的なものであった可能性も考えられる。南北列は、SA11125よりも1.1m分東側に張り出す。柱間寸法は、南北列では2.5～2.7mとやや広く、東西列は失われているものが多く不明瞭であるが、2.5m以下になると推測する。

SA11125は、柱穴1～8を検出し、柱穴内に灰色系シルトを充填する特徴がある。東西12.8m以上、南北4.1m以上の規模で、柱間寸法は東西が2.1mを基本とし、一部1.8m、南北は2.5mで配置されている。柱穴には明確な抜き取り痕を伴う柱穴3・7などもあるが、抜き取り痕が不明瞭で柱痕もわからない柱穴1・2・4・5・6のような柱穴もある。

それぞれの遺構の時期は、出土遺物が少ないが、柱穴7の抜き取り痕から斎宮Ⅱ-2期の土師器杯A（87）が出土しており、それよりも以前に廃絶した可能性が高い。特に南に位置する奈良時代の区画と類似するほぼ正方位であるこ



SA11127・11128 平面図



SA11127・11128 断面図



SA11128 柱穴 2 断面図



SA11127・11128 土層注記

- 1 10YR3/2黒褐極細粒砂～シルト【柱穴1柱痕】
- 2 10YR4/4褐中粒砂～シルトに  
φ5cm以下の礫を多く含む【柱穴1掘形】
- 3 10YR3/4暗褐シルト、しまり強【柱穴1掘形】
- 4 3層に地山ブロックを10%含む、しまり弱【柱穴1掘形】
- 5 3層にφ5cm以下の礫を含む【柱穴2】
- 6 10YR4/4褐中粒砂～シルト【柱穴2】
- 7 10YR4/4褐中粒砂～シルトに10YR2/3黒褐シルト  
ブロック・地山ブロックを20%ずつ含む【溝12】
- 8 10YR3/2黒褐極細粒砂～シルト、しまり弱【柱穴3柱痕】
- 9 10YR2/2黒褐シルトに  
地山ブロックを10%含む【柱穴3掘形】
- 10 10YR3/3暗褐細粒砂～シルトに  
地山ブロックを10%、φ15cm以下の礫を含む【柱穴3掘形】
- 11 10YR3/4暗褐細粒砂～シルトに  
地山ブロックを20%含む【柱穴3掘形】
- 12 10YR3/4暗褐中粒砂～極細粒砂に  
φ3cm以下の礫を多く含む、しまり強【溝12】
- 13 10YR4/2灰黄褐シルトに10YR3/2黒褐  
シルトを10%、炭化物をわずかに含む【溝12】
- 14 10YR4/4褐中粒砂～シルトに10YR2/3黒褐  
シルトブロック・地山ブロックを10%ずつ含む【溝12】
- 15 10YR4/2灰黄褐細粒砂～シルトに  
10YR2/2黒褐色シルトを15%含む【柱穴4】
- 16 10YR2/1黒シルト【柱穴4】
- 17 10YR2/3黒褐細粒砂～シルトに  
地山ブロックを5%含む【柱穴4】
- 18 10YR3/4暗褐中粒砂～極細粒砂【溝12】
- 19 10YR6/6明黄褐シルト【地山】

SA11128 柱穴 2 土層注記

- 1 10YR2/3黒褐細粒砂～シルト【切り取り痕?】
- 2 10YR3/2黒褐細粒砂～シルト【柱痕】
- 3 10YR3/3暗褐細粒砂～シルト【掘形】
- 4 10YR6/6明黄褐シルト【地山】

第三-7図 SA11127・11128平面・断面図 (1/100)

とから、奈良時代に位置づけられる。

SA11127・11128 16・7で検出した、どちらもほぼ正方位（北から西に1°振る）の布掘りをもつ南北主軸の柱列で、現状では布掘りをもつ一つの単位として、それぞれ異なる遺構番号を付与している。しかし、今後の東側・南側の調査によっては、建物を構成する一連の柱列群として認識できる可能性が高い。

SA11127は、長さ3.8mの溝の中に、計4基の柱穴が伴う。平面で確認できたものは柱穴1～3で、柱穴4は半裁後に下層から検出した。重複状況から布掘り埋土下層に掘形埋土がある柱穴3・4が古く、柱穴1・2が新しく位置づけられる。ただし柱穴3・4でも断面層序は異なり、柱穴4は柱痕を掘り込むように布掘り埋土が充填されている一方、柱穴3では布掘り埋土を貫通するように柱痕がみられた。そのため、柱穴3は柱穴1・2段階でも存続し、柱穴4のみが布掘り内に埋め殺されたもの考えられる。つまり当初は、柱穴3・4の1間、2.7m（柱間寸法は1.8m）で構成されていたSA11127が、建て替え後は柱穴1・2・3の2間、3.8m（柱間寸法は1.5m・1.2m）で構成されるようになる。

一方でSA11128は、柱穴1・2の1間、2.4m以上（柱間寸法は1.8m）からなり、SA11127同様に布掘りが伴う。柱穴1は上層面で柱痕を確認した。柱穴2は上層面で柱痕を確認できないものの、地山面から約0.3mより下層で確認したため、この高さで柱が切断された可能性を考えておきたい。仮にSA11128をSA11127と同一遺構と考えれば、SA11127古段階である柱穴3・4とSA11128の柱穴1・2は柱間寸法が1.8mと等しく、3間以上で一辺が5.4m以上の柱列となる。なおSA11123等と同様に、第193次調査区の南側約10mに位置する第100次調査区ではこのSA11128の続きは確認されていない。そのため、この柱列も塀ではなく、建物の可能性が高く、今後の南側・東側の調査により解明されることを期待したい。

なお、SA11127・11128の時期は、遺物が少なく、遺物からは示せない。しかし、SA11123・11124・11125と同じくほぼ正方位となることから、奈良時代に位置づけられる。

#### ・土坑

SK11129 k7・8で検出した、長さ1.3m以上、幅1.1mの不整楕円形の土坑で、南側は調査区外に続くため溝の可能性もある。調査区南壁で

遺構名	調査時遺構名	グリッド	時期	出土遺物	備考
SD 11101	溝9	h・i・j4・5/ i6・7	18世紀末葉～ 19世紀	弥生土器・土師器・須恵器・ 陶器・近世陶磁器・金属製品・ 石製品	東側道路側溝か？ SX11102・SD11112・11113・ SK11114・SB11110・SA11125 より新
SX 11102	方形周溝墓1 溝7・8・10	h・i・j5・6	弥生時代 中期中葉	弥生土器	SK11115・11116より新 SD11101・11105・11106・ SB11110より古
SD 11103	溝4	h5・6・7	江戸時代	弥生土器・土師器・近世陶磁器	西側道路側溝か？ SK11104より新
SK 11104	土坑3	h6	弥生時代	弥生土器	SD11103より古
SD 11105	溝1	h5・6	中～近世	土師器	SD11108と同一の溝か？ SX11102より新
SD 11106	溝5	i5, h6・7, g7	時期不明	土師器	SX11102・SD11113より新 SD11105・11116より古
SD 11107	溝6	h6・7	飛鳥時代？	弥生土器・土師器	SB11110に並行 SD11103・11108・SA11125より古
SD 11108	溝2	h7	近現代	土師器・須恵器	SD11105と同一の溝か？ SD11107・SK11111より新
SK 11109	土坑22	h7	弥生時代？	なし	SD11108より古
SK 11111	土坑2	h7	時期不明	なし	SD11107より新 SD11108より古
SD 11112	溝3	h・i5・6, i7	近世？	土師器	SD11106・SK11114・SB11110・ SA11125より新 SD11101より古
SD 11113	土坑5	i・j5・6	弥生時代	弥生土器	SD11101・11106より古
SK 11114	土坑11	h・i7	弥生時代	弥生土器	SD11101・11112・SB11110より古
SK 11115	土坑9	j・k5・6	弥生時代	弥生土器	SX11102より古
SK 11116	土坑13	j・k6	弥生時代	弥生土器	SX11102・SK11115より古
SK 11117	土坑10	j7	弥生時代	弥生土器	SB11110より古
SD 11118	土坑15	j・k5	弥生時代	弥生土器	SA11120より古
SX 11119	方形周溝墓2	k・l5・6	弥生時代 中期後葉	弥生土器	SA11120より古
SK 11121	土坑20	l5	弥生時代	弥生土器	
SK 11122	土坑22	l5	弥生時代	弥生土器	
SD 11126	溝11	j・k7	飛鳥時代？	なし	SA11120布掘り？
SK 11129	土坑21	k7・8	奈良時代	土師器・須恵器	SA11123・11124・11125と関連する遺構か？

第Ⅲ－1表 第193次調査 遺構一覧

みると奈良時代の包含層から深さ0.6mまで掘り込まれており、断面形状は箱形を呈する。なお土坑の中層（第Ⅲ-3図21層）は、SA11125の各柱穴に充填されていた灰色系シルトと同系色・同質のシルトが充填されていた。両遺構の位置関係から、同時期に廃絶したものが人為的に埋められた可能性も考えられる。

遺構の時期は遺物が少ないため不明瞭であるが、土師器甕（90）の特徴は、この遺構を奈良時代の建物に平行することを否定するものではなく、奈良時代に位置づけられる。

#### （4）鎌倉時代以降の遺構

##### ・溝

**SD11101** h・i・j4・5・i6・7で検出したL字形に曲がる溝で、調査区を南北に縦断し、北端ではほぼ直角に西側へ曲がる。南・北・西側で調査区外に続き、南北長が11.5m以上、幅1.9m、東西長が6.1m以上、幅2.0m以上となる。横断面が明確にわかる調査区南壁では、表土直下から深さ0.6mまで、断面が逆台形に掘り込まれており、最大幅で3.5mの幅をもつ。6.0m西側には同一方位で配置されたSD11103があり、SD11101を東側溝、SD11103を西側溝とする溝の心々で6.0mの道路の可能性も想定できる。特に調査区の南側約200mには近世の参宮（伊勢）街道、西側約30mには旧若宮（八幡）

遺構名	調査時 遺構名	ビット番号		時期	規模 間(m)×間(m)	柱間寸法 (m)	主軸	方位 (N規準)	備考
		※ ( ) はグリッド番号							
SB 11110	掘立柱 建物1	(i6) 柱穴1, 柱穴2/(j6) 柱穴6/ (h7) 柱穴3/(j7) 柱穴4, 柱穴5, 柱穴6		飛鳥 時代	3(6.3)以上× 2(4.95)	(桁行)2.1/2.3/2.5 (梁間)2.45/2.5	南北	N33° E	側柱建物 SX11102・SK11117・ 11114より新 SD11101・11112より古
SA 11120	柱列2	(j5) 柱穴8, 柱穴9, 柱穴10/ (k5) 柱穴6, 柱穴7/(15) 柱穴5/(k6) 柱穴3, 柱穴4/ (j7) 柱穴1/(k7) 柱穴2		飛鳥 時代	東西4(8.0)以上 ×南北4(9.4)以上	(東西)2.35/2.1/2.5 (南北)2.6/2.4/2.5/2.2	南北	N33° E	掘立柱塀 SX11119・SD11118 より新 SA11125より古
SA 11123	柱列1古	(j6) 柱列11		奈良 時代	不明	不明	東西?	N1° W	SD111107・SB11110・ SA11120より新 SA11124・11125・SD11 103・11112より古
SA 11124	柱列1中	(i6) 柱穴4/(j5) 柱穴9/(j7) 柱穴6/(k6) 柱穴10/(k7)P3		奈良 時代	東西3(7.2)以上 ×南北2(4.2)以上	(東西)2.4 (南北)2.7	東西?	N1° W	SD111107・SB11110・ SA11120・11123より新 SA11125・SD11103・ 11112より古
SA 11125	柱列1新	(h6) 柱穴1, 柱穴2/(i6) 柱穴3, 柱穴4/(j6) 柱穴5, 柱穴6/(k6) 柱穴7/(k7) 柱穴8		奈良 時代	東西7(12.9)以上 ×南北2(4.1)以上	(東西)2.1/2.1/2.1/1.8/ 2.1/2.1 (南北)2.7	東西?	N1° W	SD111107・SB11110・ SA11120・11123・ 11124より新 SD11103・11112より古
SA 11127	柱列4 溝12	(i6) 柱穴1, 柱穴2/(17) 柱穴3		奈良 時代	2(2.8)以上	1.5/1.3	南北?	N1° W	SA11128と同一遺構か?
SA 11128	柱列3	(17) 柱穴1, 柱穴2		奈良 時代	2(2.0)以上	1.8	南北?	N1° W	SA11127と同一遺構か?

第三ー 2 表 第193次調査 掘立柱塀・掘立柱建物一覧

神社が位置しており、両者を繋ぐ性格などは想定できるかもしれない。また、溝の南側の埋土には多量の礫や近世陶磁器類が含まれており、道路の廃絶時や後世の耕作時に廃棄されたものと推測する。遺構の時期は18世紀末葉～19世紀に位置づけられる。

**SD11103** h5・6・7で検出した、長さ9.0m以上、幅0.6mの南北主軸の溝で、調査区の南側に続く。埋土中には、全体的に礫が多く含まれている。先述した通り、SD11101とともに参宮（伊勢）街道と旧若宮（八幡）神社を繋ぐ道路の側溝の可能性がある。SD11103は、方位や溝の幅などから、第193次調査区の南側約30mの第189次調査区SD11020と連なる溝と推測することが可能で、そうなると全長で40m以上延びる溝と推測できる。

遺構の時期は、出土遺物は少ないもののSD11101と同時期と想定すれば18世紀末葉～19世紀に位置づけられる。

**SD11105・11108** h5・6・7で検出した、長さ7.0m以上の溝で、北側と南側に途切れるため、それぞれに遺構番号を付与した。

SD11105は長さ3.2m以上、幅0.5m、SD11108は長さ2.5m以上、幅0.5mを測り、SD11108の断面は、調査区南壁で表土直下から0.4m掘り込まれた逆台形を呈する。

遺構の時期は、少ないながらも中世・近世の遺物がみられることから鎌倉時代以降に位置づけられる。

**SD11112** h・i5・6・i7で検出した、長さ9.5m以上、幅0.6mの南北主軸の溝で、北端部分は東にむけて湾曲し、SD11101と重複する。主軸はSD11105・11108と並行しており、道路側溝と想定すれば心々約2.3mの道路となる。

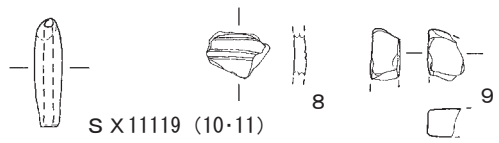
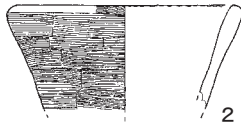
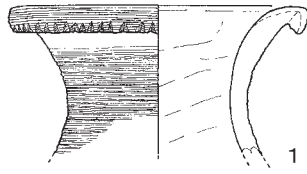
遺構の時期はSD11105・11108同様に鎌倉時代以降に位置づけられる。

#### (5) 時期不明の遺構

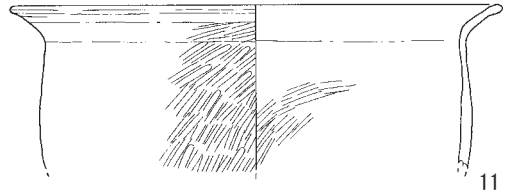
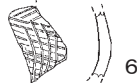
**SK11111** h7で検出した、長さ1.8m以上、幅0.3m以上の不整形を呈すると考えられる土坑で、底面までの深さは0.4mで断面形状は逆台形を呈する。平面形は竪穴建物状にもみえるが、南側の大部分は調査区外に続くため、遺構の形状や性格の解明は今後の調査に期待される。出土遺物は皆無であるため、遺物から遺構の時



S X 11102 (1~9)



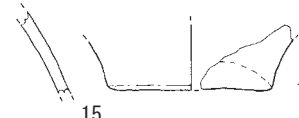
S X 11119 (10-11)



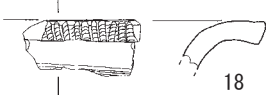
S D 11113 (12)



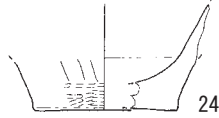
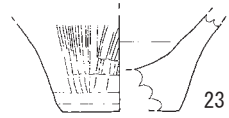
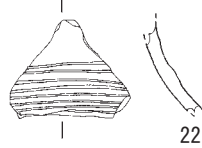
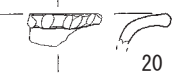
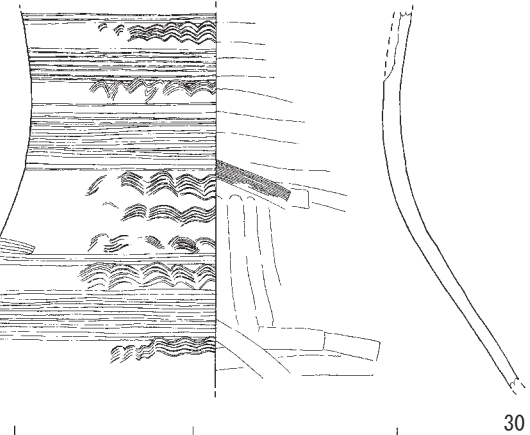
S D 11118 (13~17)



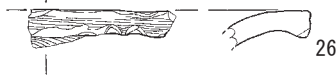
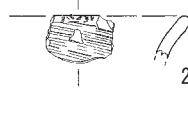
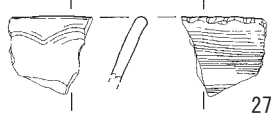
S K 11115 (18~24)



S K 11121 (30)



S K 11116 (25~29)



0 10 cm

第三-8図 弥生時代遺構出土遺物 (1/4)

期は示せないが、重複状況からS D 11107より新しくS D 11108よりも古く、飛鳥から鎌倉時代の間に位置づけられる遺構と想定できる。また、古代の包含層の下層から掘り込まれているため、古代まで遡る可能性が高い。

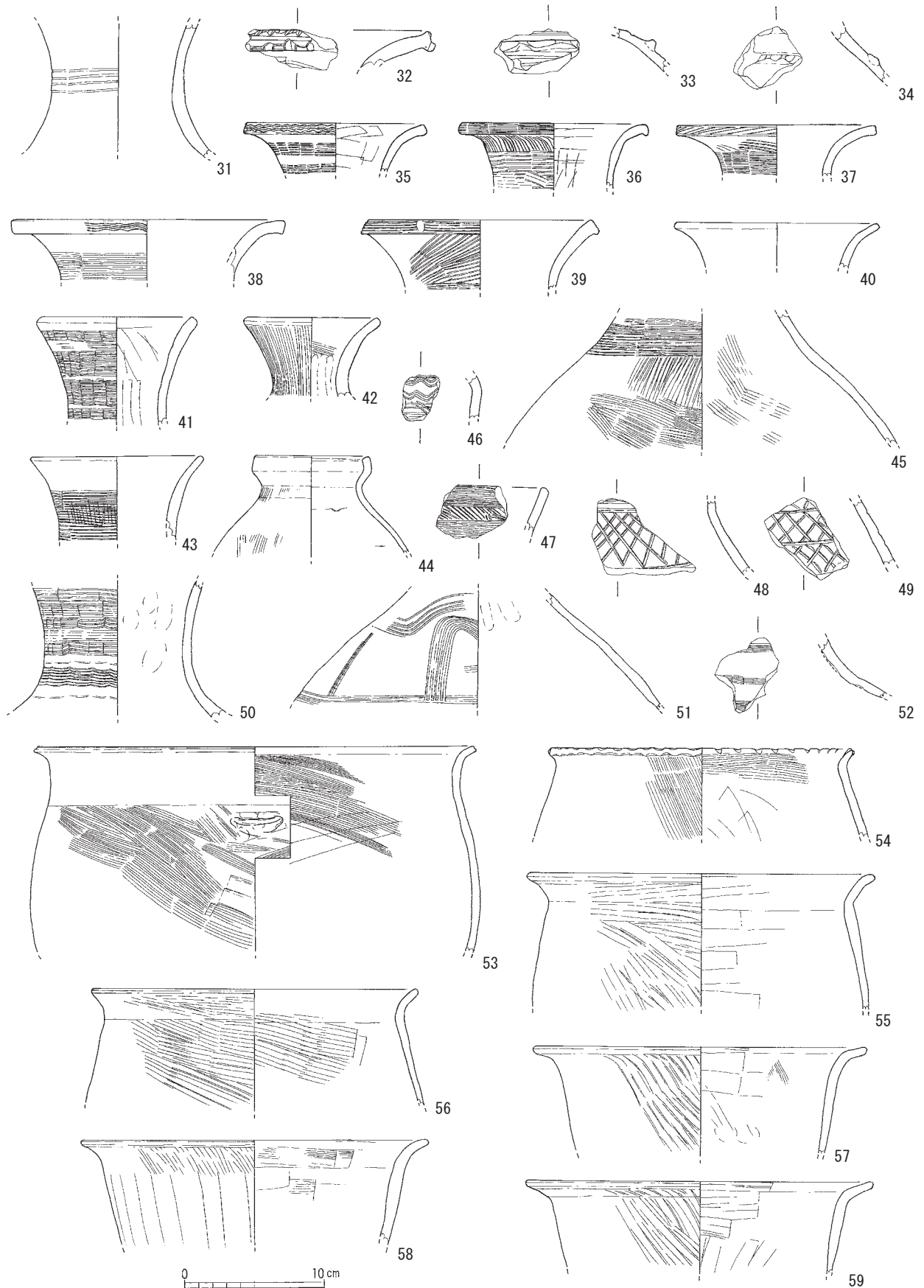
#### 4 遺物

遺物整理用コンテナ31箱分の遺物が出土した。

遺物点数は遺構出土よりも包含層からの出土点数の方が多い。遺構番号順に主な時代ごとに分けて詳述する。

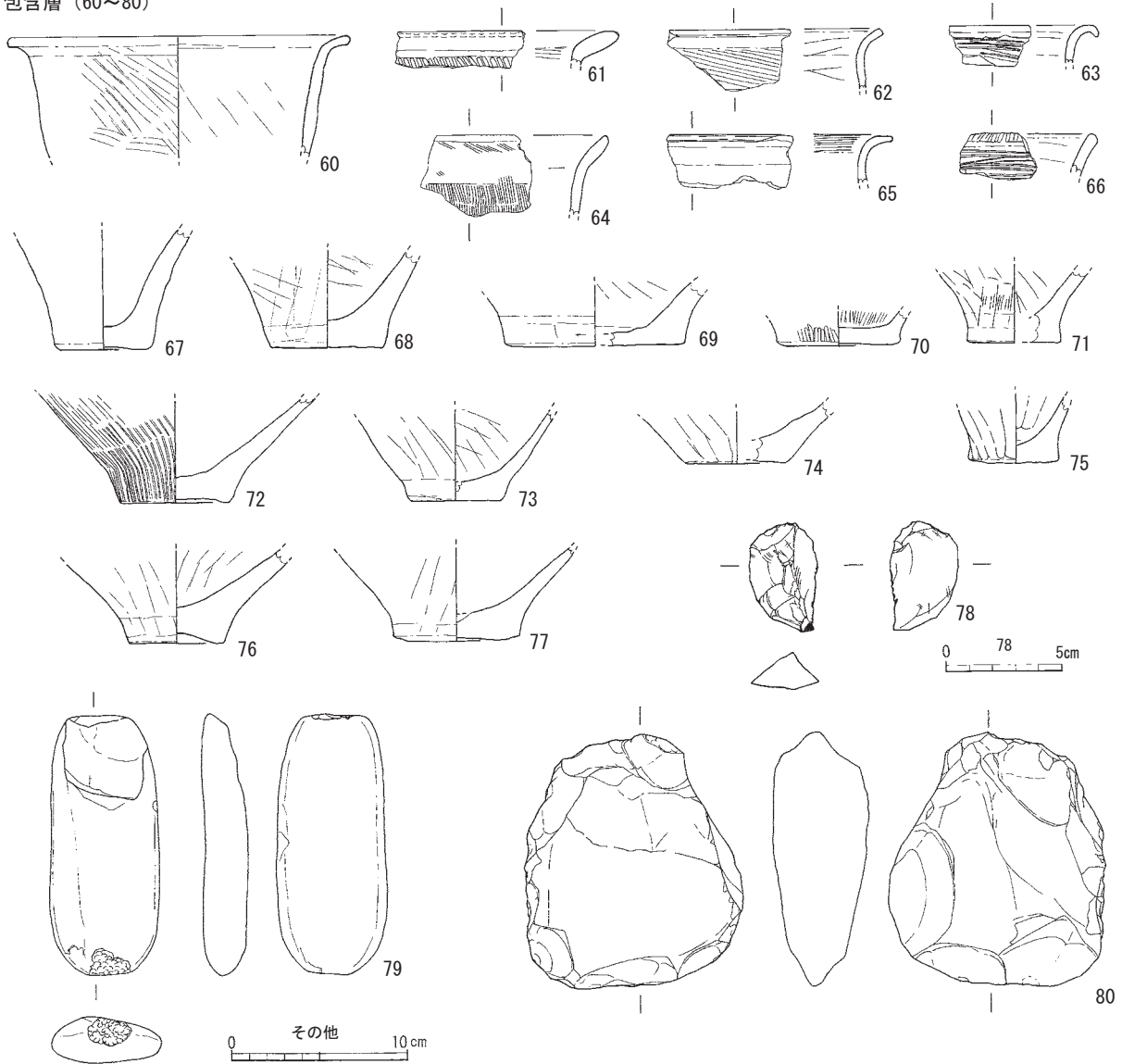
**S X 11102出土遺物 (1~9)** 1~6は周溝4から出土した弥生土器。1・2は広口壺の口縁から頸部で、1は口縁端部を突帯状に肥厚させ、櫛描文および貝殻によるキザミを施す。2は口縁端部に櫛描波状文を施す。1・2ともに頸部

包含層 (31~59)



第三-9圖 弥生時代包含層出土遺物 1 (1/4)

包含層 (60~80)



第三-10図 弥生時代包含層出土遺物 2 (1/3・1/4)

には櫛描直線文を重ねる。3は甕口縁部で内外面にハケ、口縁部は大きく反り、端部にキザミ。4は壺頸部でタテハケ後に櫛描直線文を重ねる。5・6は壺体部で、6は斜格子文を施す。7は周溝2から出土した管状土錘。後世の混入の可能性がある。8・9は周溝1から出土した弥生土器と石製品。9は砂岩製の砥石。出土土器は少ないが、弥生時代中期中葉～後葉に位置づけられる。

**S X 11119出土遺物 (10・11)** 10は縄文土器鉢の波状口縁部で、4条の沈線を施す。縄文時代中期末葉に位置づけられる。11は弥生土器甕

の口縁から体部で、弥生時代中期に位置づけられる。

**S D 11113出土遺物 (12)** 12は弥生土器甕で、弥生時代中期に位置づけられる。

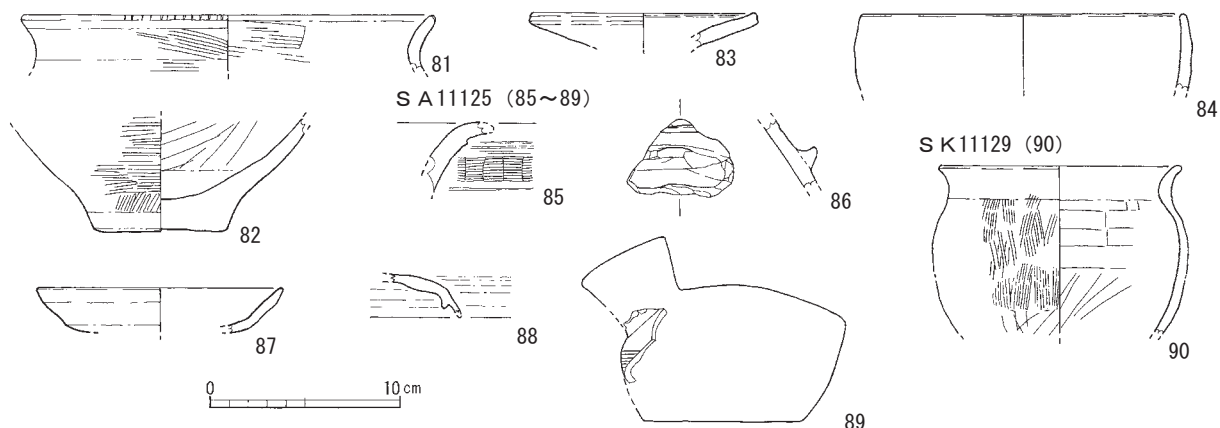
**S D 11118出土遺物 (13~17)** 13~16は弥生土器、17は須恵器。13・14は広口壺口縁部で、13は内面に瘤状突起、14は口縁端部に櫛描波状文を施す。15は壺肩部で、櫛描直線文・波状文を施す。弥生時代中期中葉に位置づけられる。17は飛鳥Ⅲ～Ⅳの杯G蓋で後世の混入の可能性がある。

**S K 11115出土遺物 (18~24)** いずれも弥生



S A 11120 (81・82)

S B 11110 (83・84)



### 第三-11図 飛鳥・奈良時代遺構出土遺物 (1/4)

土器。18・19は広口壺口縁部で、口縁端部に18は櫛による刺突、19はキザミを施す。21は無頸壺の口縁部で、2条の櫛描波状文を施す。22は壺体部、23・24は底部である。弥生時代中期中葉に位置づけられる。

**S K 11116出土遺物 (25~29)** いずれも弥生土器。25・27・28は甕口縁部で、25は内面2か所に瘤状突起をもち、口縁端部にキザミを施す。27は内面に波状文を施す。26・29は壺口縁部で、26は口縁端部に櫛描直線文とキザミ、29は篋による直線文と口縁端部にキザミを施す。弥生時代中期に位置づけられる。

**S K 11121出土遺物 (30)** 30は弥生土器壺頸から肩部で、5段に櫛描直線文と波状文を交互に配置する。上から3段目では3条の波状文となる。弥生時代中期中葉に位置づけられる。

**包含層出土弥生時代遺物 (31~80)** 31~77は弥生土器、78~80は石器。31・50は壺頸部で、31は篋描沈線文、50は櫛描直線文・波状文を施す。32・35~44は広口壺口縁部で、32は口縁端部上下にキザミを施す。35~39は口縁端部に櫛描直線文か波状文を施し、39は瘤状突起をもつ。41~44は細頸壺口縁部で、41・43は櫛描直線文を重ね、44は受口状の口縁部をもつ。45・46・48~52は壺体部で、48・49は篋描斜格子文、51は櫛描直線文より上部に櫛描波状文を不規則に施し、逆T字状にも櫛描直線文を施す。47は鉢口縁部で、櫛描斜線文の上下に直線文を重ねる。

53~66は甕口縁部で、53は体部に把手状の突起、54・61・66は口縁端部にキザミを施す。67~77は壺などの底部。31~33・61は弥生時代前期後半、それ以外は中期中葉~後葉に位置づけられる。78はサヌカイトの剥片、79は砂岩製の敲石、80は砂岩製の石斧未製品で、いずれも時期は判別できないが、弥生時代と推測する。

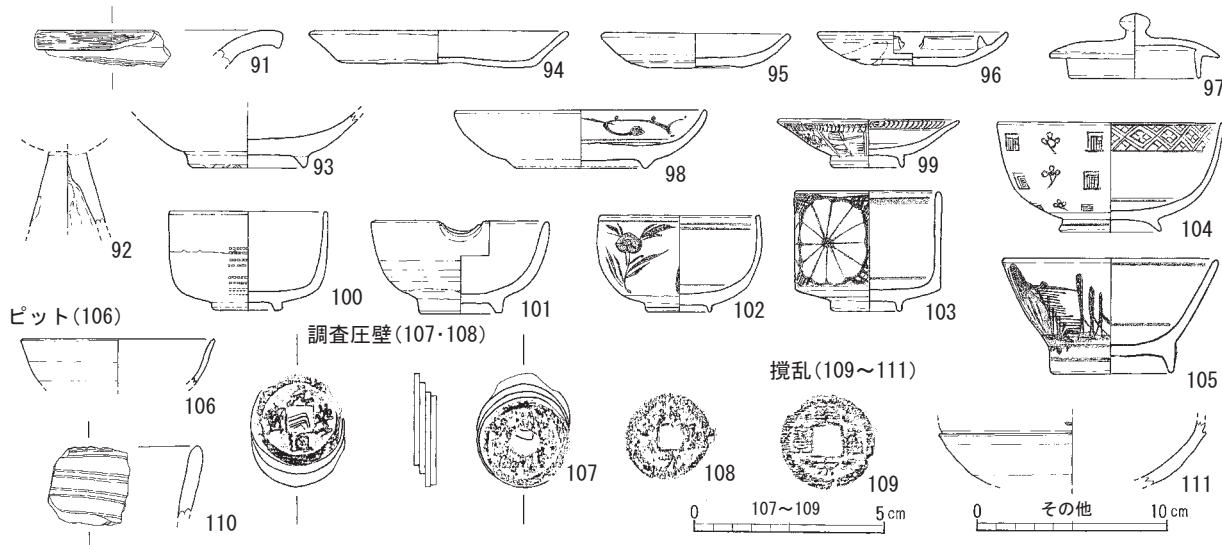
**S A 11120出土遺物 (81・82)** いずれも弥生土器。81は甕口縁部、口縁端部にキザミを施す。82は壺底部。遺構の時期を示す遺物ではなく、柱穴掘削時の混入と考えられる。

**S B 11110出土遺物 (83・84)** 83は柱穴4出土の弥生土器細頸壺口縁部、84は柱穴2出土の土師器鉢。83は遺構の時期を示す遺物ではなく、柱穴掘削時の混入。84は細片のため、正確な時期は断定できない。

**S A 11124・11125出土遺物 (85~89)** 85・86はS A 11125柱穴5出土、87・88はS A 11125柱穴7出土、89はS A 11124・11125柱穴6出土。85は甕口縁部、86は壺肩部で、1条の突帯文を施す。これらは柱穴掘削時の混入。87は土師器杯Aで、斎宮II-2期に属するが柱抜き取り痕からの出土のため遺構の時期とはならない。88は飛鳥IVに属する須恵器杯G蓋、89は小型平瓶の肩部で、内外面に漆が付着していた。柱掘形出土となる遺構の時期を示す資料は皆無である。

**S K 11129出土遺物 (90)** 90は土師器小型甕で、奈良~平安時代に位置づけられる。

SD11101(91~105)



第三-12図 その他の時代遺構ほか出土遺物 (1/2・1/4)

**SD11101出土遺物 (91~105)** 91~93以外は近世遺物。91は弥生土器広口壺口縁部、92は古墳時代の土師器高杯脚部、93は陶器山茶碗の底部。94は土師器皿、以下陶磁器で、95・96は灯明皿・受け皿、97は土瓶蓋、98は染付皿、99は染付小皿、100は鎧茶碗、101は片口小碗、102は丸形湯呑、103は箱形湯呑、104は丸碗、105は広東碗で、概ね18世紀末葉~19世紀に位置づけられる。

**ピット出土遺物 (106)** 106は飛鳥時代の須恵器杯G身の口縁部。

**調査区壁出土遺物 (107・108)** 107は4枚の古銭が錆着したもので、表裏の2枚は銘を「元豊通寶 (1078年初鑄)」、「聖宋元寶 (1101年初鑄)」と解読できた。108は107と重なるように出土した。銘は錆により不鮮明であるが「天聖元寶 (1023年初鑄)」と推測した。107の錆着により解読できていない2枚はあるものの、解読できたものはいずれも北宋銭である。中世墓に伴う六文銭などの可能性も考えられるが、表土直下の壁面からの出土であるため今後南方の調査時に明確な遺構が確認される可能性がある。

**攪乱出土遺物 (109~111)** 109はSB11110柱穴5と重複する攪乱から出土した「皇宋通寶 (1038年初鑄)」。110・111はSK11129と重複す

る攪乱から出土した。110は弥生土器壺の口縁部で、2条の沈線文が4段に施す。111は古墳時代の須恵器無蓋高杯で波状文がわずかに残存している。

**包含層出土遺物 (112~151)** 112・113は古墳時代土師器高杯。

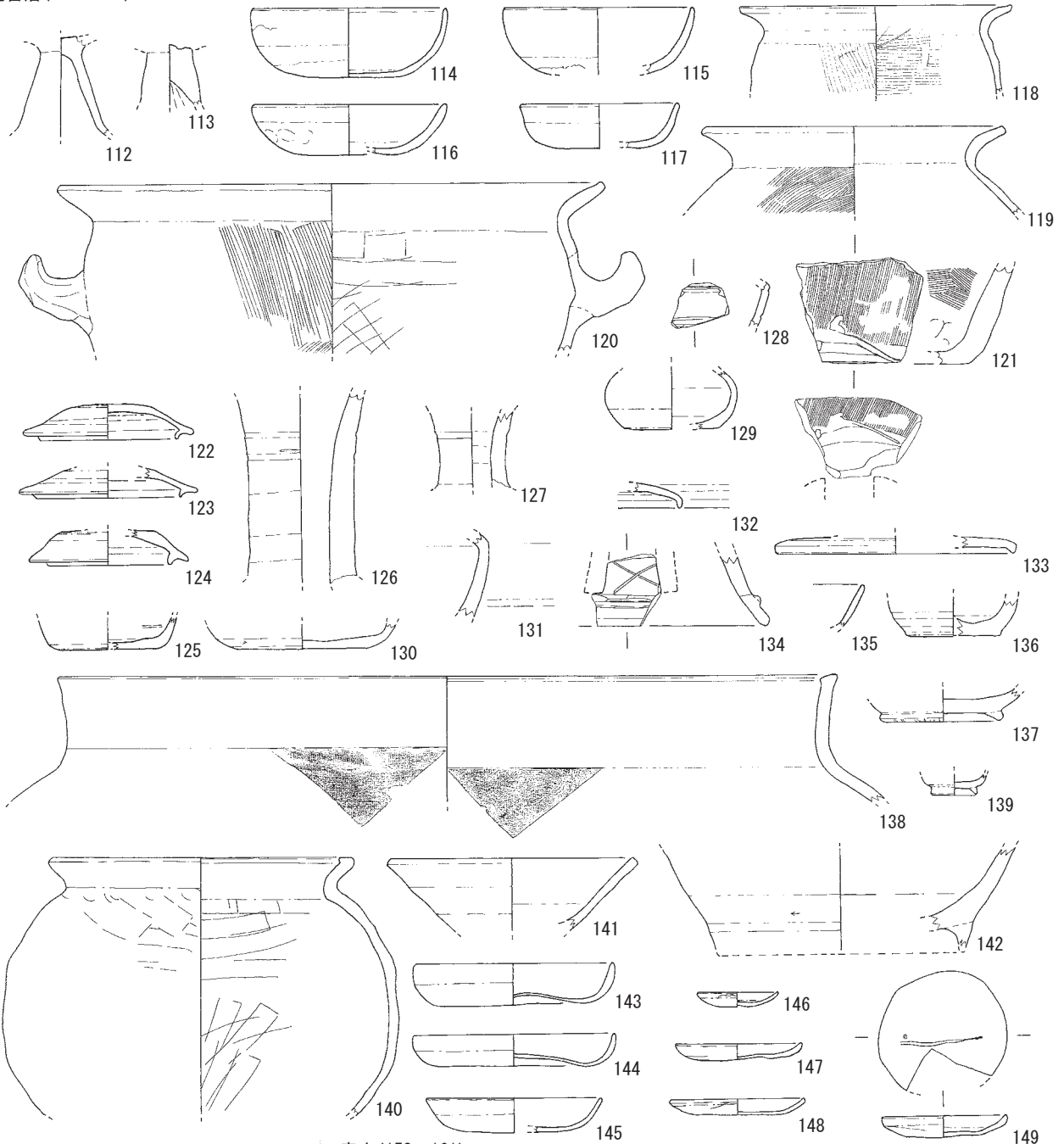
114~124は古代の土師器で114~117は杯G、118・119は甕、120は鍋、121は甌、122~134・138は須恵器で、122~124は杯G蓋、125は杯G身、126・127は壺・瓶類の頸部、128・129は小型壺、130は平底壺底部、131は瓶類体部、132・133は杯B蓋、134は円面硯脚部で×字の線刻がみられる。138は甕Aで、これらは概ね飛鳥から奈良時代に位置づけられる。

135・137・141・142は陶器山茶碗で、135は小碗、137・141は碗、142は大型鉢。139は小型模造品灰釉陶器碗、136はロクロ土師器の壺、143・144は土師器杯D、146は小皿、147・148は皿Dで、これらは概ね平安から鎌倉時代に位置づけられる。

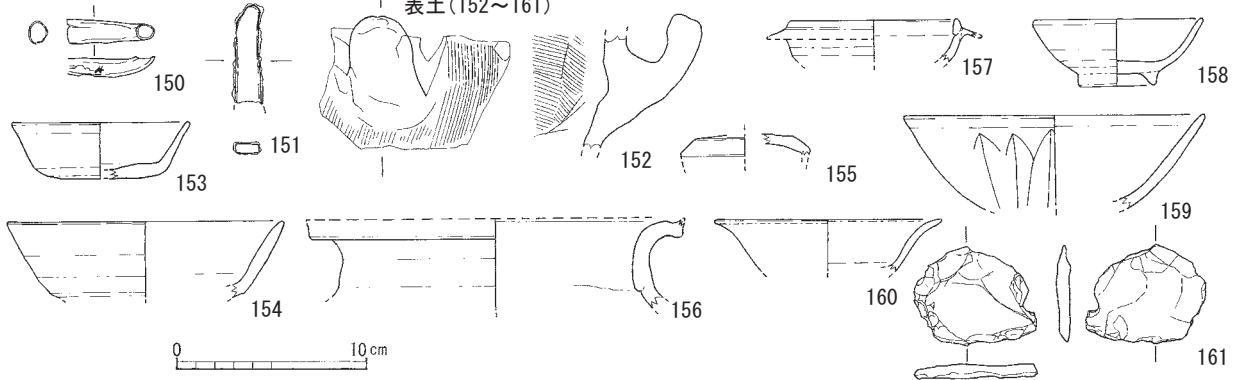
145・149は土師器皿、149は見込面に焼成前穿孔と二股の線刻がみられる。150・151は金属製品で、150は青銅製の煙管雁口、151は鉄製の火打金である。

**表土出土遺物 (152~161)** 152は土師器鍋把

包含層(112~151)



表土(152~161)



第三-13图 包含層・表土出土遺物 (1/4)



手部。153～156は須恵器で、153は杯G身、154は杯Aか杯B、155は甕、156は甕。157は小型模造品の灰釉陶器製の羽釜形土製品、158は陶器山茶碗小碗、159は青磁花卉碗、160は白磁小碗、161は石器不明未製品。

## 5 まとめ

第193次調査では、出土遺物からの検討に課題は残るものの、飛鳥から奈良時代にかけての掘立柱塀や掘立柱建物など、齋宮を構成すると考えられる重要遺構を多数確認することができた。以下、飛鳥から奈良時代を時代別に、中垣内地区の解明状況についてまとめておきたい。

### (1) 飛鳥時代方形区画の構造と年代根拠

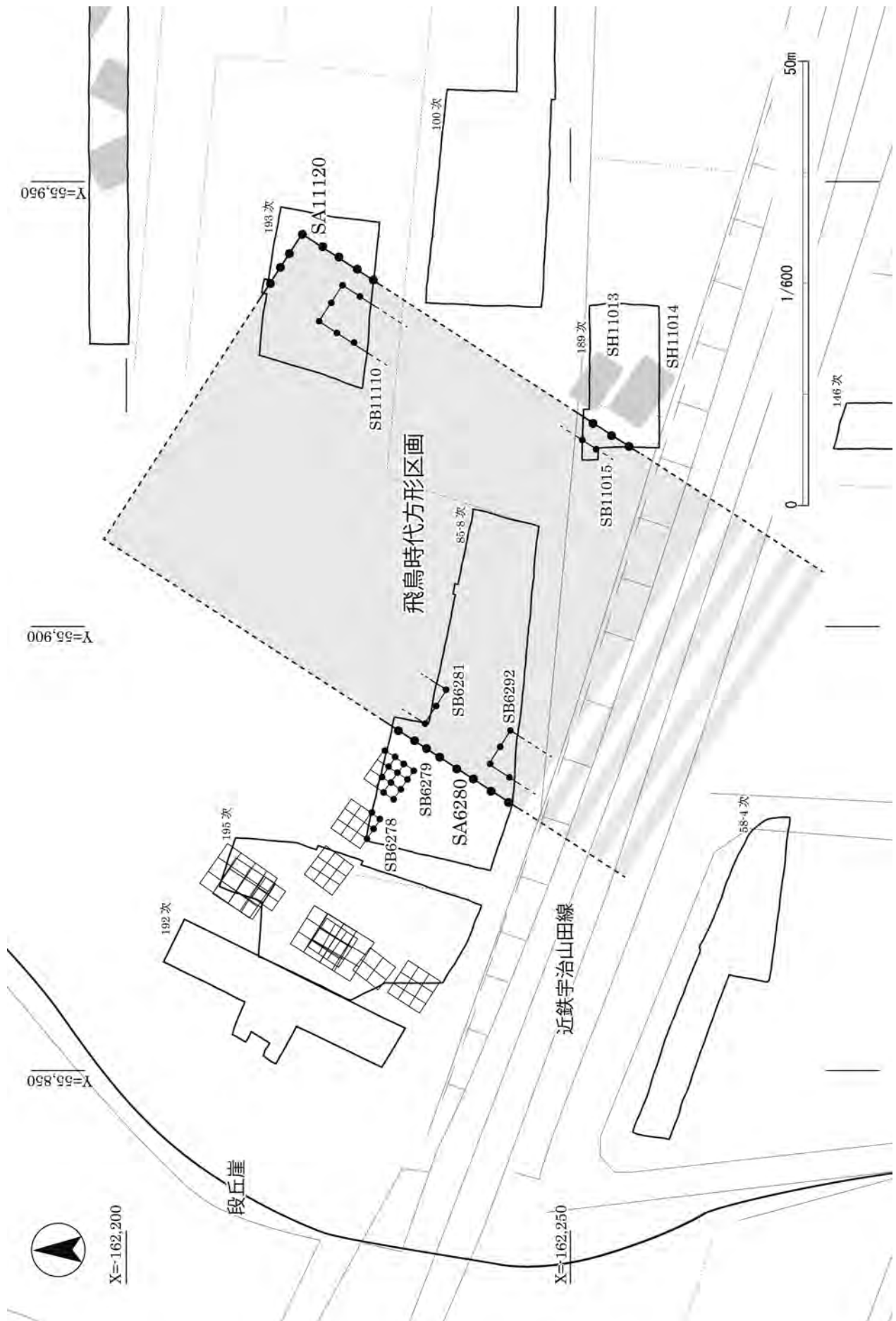
S A11120は、第85～8次調査のS A6280同様に北から東に33° 振る掘立柱塀で、両者の位置関係から一連の方形区画を形成すると考えてよいだろう。また第193次調査区より南約25mに位置する第189次調査区では、このS A11120の延長線上に位置する北から東に33° 振るS B11015を確認していた(第Ⅲ-14図)。ただし、第189次調査の段階では、S A11120は確認されておらず、またS B11015そのものが限定的な確認であったため、先の概報では総柱建物と報告している<sup>(1)</sup>。しかし今回、S A11120を検出したことにより、その延長線上に位置し、同じ傾きとなるS B11015もS A6280と同様に、一連の方形区画を形成する東側の南北列であると考えられるようになった。これにより、S B11015の東辺をS A11120東側南北列の一部として修正し、S B11015の西辺はS A11120と並行する別の建物として、そのままの遺構番号を踏襲する。

現状の飛鳥時代方形区画の解明状況を整理すると、S A11120は区画の北東角部で、北側の東西列は8.0m(193次)のみ、東側の南北列は6.3m(193次)と5.5m(189次)で、合計で45m以上の規模になることがわかる。一方で、北西角部は未解明であるため、現状では西側の南北列はS A11120と異なる遺構番号S A6280を付与しているが、これまで16m分(85～8次)

を確認している。仮に北東角部を反転し、北西角部に置き換えると、西側の南北列は55m以上となることがわかる。そして、区画の南部には、近鉄線路が通るため、調査されていない部分が多いものの、線路より南に位置する第58～4次調査地ではS A6280に連なる西側南北列や、南側東西列の柱穴は確認できていない。そのため、西側南北列はどれだけ長くなったとしても、柱穴の深度が極端に浅くなければ、仮称北西角部から第58～4次調査地までの距離である80mには至らない。以上から、飛鳥時代の方形区画の平面規模は、東側南北列であるS A11120から西側南北列であるS A6280までの距離、約41～42m(約115大尺あるいは140小尺?)を東西幅とし、南北幅は先述した55～80mに納まる規模であることを現状では解明できた。

さらに区画内の建物については、一部であるがその配置が把握できている。区画内に位置しおおよその規模が判明しているのは、S B11110(193次)および総柱建物のS B6301(85～8次)であるが、S B6301は北から東に22° 振る向きとなり、区画の方位とは対応しないことから塀に伴う遺構との認識はできない。一方でS B6281・6292(85～8次)・S B11015(189次)は検出範囲が限定的であるため、未確定な要素が多い建物ではあるが、S A6280・S A11120と両建物端部の間隔は2.5mとなり、S A11120とS B11110の間隔と等しい。また、北から東に約33～34° 振ることから、方形区画の方位ともおおむね合致する。現状ではS B6281・6292・11015ともに、方形区画に伴って配置された建物群である可能性が高い。S B11110の配置と合わせて考えると、方形区画の縁部に側柱建物が整然と配置され、中心部分には一定の空白地が広がる様相が浮かび上がるものの、現状では各建物の全貌がわかっていないこと、区画の中心的建物が未解明であることから推測の域は出ない。

そして、この方形区画の年代を飛鳥時代とする根拠であるが、現状では比定根拠とできるような出土遺物は、第193次調査以外の既往調査



第Ⅲ-14図 飛鳥時代の区画および周辺の建物配置（600分の1）

も含めても、掘立柱塀・建物の柱穴からの出土はない<sup>(2)</sup>。このように掘立柱塀・建物の出土遺物が少なく、時期比定が困難な状況は、南に隣接する正方位区画S A9472でも同様であった。しかしS A9472は、周囲の建物の状況から、奈良時代であることが判明している。それは史跡西部の竪穴建物でも正方位に配置されるものには、飛鳥時代まで遡る遺物が出土するものがなく、正方位配置をとる建物は奈良時代前期まで年代がくだるとの指摘である<sup>(3)</sup>。これについては正方位の竪穴建物が区画の位置する中垣内地区に1棟もみられないこと、正方位としながらも3~4°程度東西に傾くものも含まれていることなど、検討すべき課題は多いものの、現状では妥当な位置づけと考えられる。同じ視点でS A11120・S A6280をみると、中垣内地区内でも189次調査地で検出した竪穴建物S H11013は、S A11120の東1.2mに位置し、塀と接する短軸の北から東に約33~37°振る向きで、塀と平行するように配置されている。床面からは飛鳥Ⅲ<sup>(4)</sup>に該当する須恵器杯Gの蓋が出土しており、S H11013は飛鳥Ⅲの660年代後半~670年代前後の実年代<sup>(5)</sup>を想定している。S H11013とS A11120が類似した方向で隣接し、重複しない関係であることは、両者が近接する時期関係をもつものと推測することは許されるであろう。またS H11013からは、上層からの出土ではあるものの鞆羽口や椀形鉄滓などがみられ、工房的性格をもつ建物であった可能性が高い。そのため、飛鳥時代方形区画の造成に伴って先行して配置された建物であると仮定すれば、方形区画の年代は自ずとS H11013が位置づけられる670年代以降から、方形区画が正方位配置をとるようになる奈良時代前半までの間に比定できる。このようにN33°Eの区画を7世紀後半、正方位の区画を8世紀前半と想定する年代的位置づけは、これまで確認されている全国の他の地方官衙における方位の在り方と対比しても矛盾しない。他の地方官衙の建物や区画でもおおむね、7世紀後半までは地形や周辺の道路遺構などの要因に応じて、斜方位で配置されて

いるものが、早いものは7世紀末葉、遅いものでも8世紀前半には正方位配置に変化することが指摘されている<sup>(6)</sup>。以上が、齋宮におけるN33°Eの斜方位区画を670年代以降から8世紀前半までに位置づける理由であるが、もちろん今後の発掘調査によっては塀や建物から明確な時期決定の根拠となるような出土遺物の確認される可能性もあるため、今後の調査に期待したい。

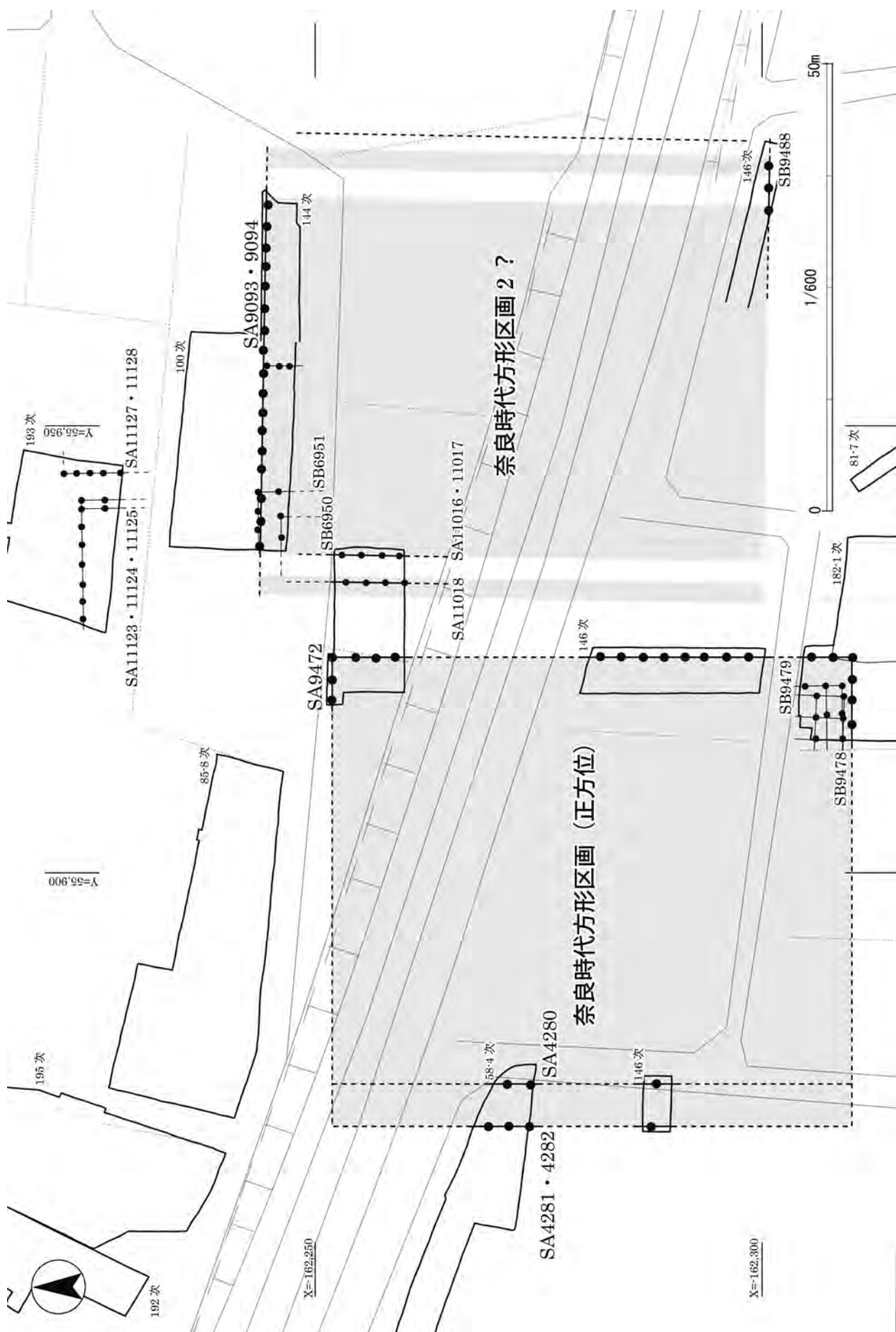
#### 註

- (1) 宮原佑治「Ⅱ 第189次調査」『史跡齋宮跡平成28年度発掘調査概報』2018
- (2) 川部浩司「Ⅲ 第192次調査周辺の既往調査」『史跡齋宮跡 平成29年度発掘調査概報』2018
- (3) 水橋公恵「建物・塀の方位からみた奈良時代初期齋宮の変革—掘立柱塀S A9472の年代的位置づけを中心に—」『齋宮歴史博物館研究紀要』十六 齋宮歴史博物館2007
- (4) 西弘海「B 土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所1978
- (5) 小田裕樹「4 土器群の位置づけ」『奈良山発掘調査報告Ⅱ』奈良文化財研究所2014
- (6) 大橋泰夫「地方官衙と方位」『技術と交流の考古学』同成社 岡内三眞編2013 ※『古代国府の成立と国郡制』2018に再掲

#### (2) 奈良時代の齋宮中枢域周辺の様相

奈良時代の方形区画S A9472については、先述した通り近鉄線路にまたがり正方位で配置されていることが確認されている。またS A9472の東隣りには、S A9093・9094(100次)があり、S A11016・11017(189次)やS B9488(146次)とともに、もう一つの方形区画状に配置される点は注視する必要がある。現状では、この柱列群が角部を形成することを確認していないので、S A9472とは別の奈良時代の方形区画となることは断定できない。ただし、S A9093・9094は東西に40m以上続く塀で、正方位(北から東に1°振る)となるため、方形区画





第三-15図 奈良時代の区画および周辺の建物配置 (1/600)

を形成しないとしても、S A 9472に準ずるような奈良時代の重要施設を遮蔽する塀などであった可能性が高い。その構造は、今後の調査の進捗による解明を期待したいが、193次調査ではS A 11123・11124・11125、S A 11126・11127などのほぼ正方位(北から西に1°振る)で配置された遺構群が、S A 9093・9094から北に約20m地点で検出した。これらは部分的な検出であるため、その全貌はわからないが、S A 11123・11124・11125は東西7間(12.9m)以上の平面規模が長大なもの、S A 11127・11128は溝もち構造のものと、どちらも特異な構造をもつ。

仮に両柱列が掘立柱建物を形成すると仮定すると、まずS A 11123・11124・11125は、桁行7間以上となる建物となる。これまでの齋宮跡の発掘調査で確認されている桁行7間を超える建物は、総柱で中世までくることが確実なS B 8937(141次)を除けば、S B 8539(136次)の1棟を数えるのみである。しかし、この1棟も、調査区をまたいで8間×2間として検出されている建物であるため、確実なものは桁行6間分までで、7間をこえる建物はみられない。そのため、現状では全貌が不確かではあるものの、S A 11123・11124・11125は今後の調査によっては現状の齋宮で唯一の桁行7間以上の建物として認識される可能性が出てくる。桁行7間以上、梁行2間の細長い建物は、長舎として官衙遺跡に多用されることが指摘されており<sup>(1)</sup>、奈良時代の方形区画と有機的関係をもって配置された可能性は考えておく必要があるだろう。

次に、溝もちの構造を採用するS A 11127・11128であるが、同様の溝もち構造を採用する建物は史跡内で11棟確認されている。これらの内、側柱建物に採用される最も古い例としてS B 4900(72-2次)が奈良時代前期に位置づけられているが、他はおおむね奈良時代後期以降である<sup>(2)</sup>。ただし、総柱建物も含めると飛鳥時代後期～奈良時代前期に該当するものも一定程度含まれていることには注意が必要である。そもそもこうした「布掘り」や「溝もち」工法は、奈良時代以前の伊勢湾西岸域では明和町織

糸遺跡のS B 21・22など<sup>(3)</sup>、齋宮及び齋宮に隣接するような極めて限定的な遺跡に採用された工法と推測され、決して一般的なものではない。恐らくはこの地に、正方位の方形区画が造成される前後、あるいは飛鳥時代後期の方形区画が造成される段階に、建物の基礎構造を強固にするための土木技術として新たにもたらされたものと考えたい。なお、こうした「布掘り」や「溝もち」工法を採用した掘立柱建物については、次章で報告する第195次調査において飛鳥時代後期に遡る総柱建物群が確認されている(第IV章を参照)。

以上、第193次調査で検出した奈良時代S A群を建物群と仮定した場合、これまで齋宮で確認されていない長舎建物や、溝もち構造をもつ先進的技法を採用した建物群となる可能性がある。現状では推測の域を出ないが、奈良時代における齋宮の中核域、つまり齋王の宮殿を囲う方形区画、そしてその周囲に配置された官衙、つまり齋宮寮(司)に関連する遺構群としての機能を帯びるものであるかどうか、奈良時代についても今後の解明調査にかかる期待は大きい。

#### 註

- (1) 奈良文化財研究所『長舎と官衙の建物配置』報告編 第17回古代官衙・集落研究会報告書奈良文化財研究所研究報告 第14冊2014
- (2) 倉田直純「齋宮跡で確認の所謂「布掘り」・「溝もち」掘立柱建物について」『齋宮歴史博物館研究紀要』二十 齋宮歴史博物館2011
- (3) 泉雄二『織糸遺跡—明和町金剛坂を中心とする方形周溝墓群の調査—』三重県埋蔵文化財センター—2007

番号	器種	器形	地区 遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
1	弥生土器	壺	SX11102 東周溝	口径 15.8 残高 7.7	外面：口縁端部に櫛描波状文、櫛描直線文 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部 3/12		009-04
2	弥生土器	壺	SX11102 東周溝	口径 11.4 残高 5.6	外面：口縁端部に櫛描波状文、櫛描直線文 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部1/12		001-02
3	弥生土器	甕	SX11102 東周溝	残高 2.8	外面：ハケ、口縁端部にキザミ 内面：ハケ、ヨコナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	口縁部1/12		008-05
4	弥生土器	壺	SX11102 東周溝	残高 7.5	外面：ハケ、櫛描直線文 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	細片		009-07
5	弥生土器	壺	SX11102 東周溝	残高 3.2	外面：ミガキ、篋描直線文2条 内面：ミガキ	密	良	褐7.5YR4/3	細片		009-05
6	弥生土器	壺	SX11102 東周溝	残高 4.0	外面：櫛描直線文が交差 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	細片		001-01
7	土製品	土錘	SX11102 西周溝	長さ 5.8 幅 1.5	重さ9.35g、孔径0.5cm	密	良	淡黄2.5Y8/3	ほぼ完形		006-04
8	弥生土器	壺	SX11102 北周溝	残高 2.4	外面：篋描直線文2条、赤漆附着 内面：ナデ	密	良	赤漆：にぶい赤褐2.5YR4/4 素地：灰黄褐10YR5/2	細片		005-07
9	石製品	砥石	SX11102 北周溝	残長 2.7 幅 1.5	重さ9.01g、砂岩製	—	—	—	細片		006-01
10	縄文土器	鉢	SX11119	残高 2.4	外面：横方向の沈線文 内面：ナデ	密	良	黄灰2.5Y4/1	細片		001-04
11	弥生土器	甕	SX11119	口径 25.4 残高 8.7	外面：ミガキ、ヨコナデ 内面：ミガキ、ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部1/12		001-03
12	弥生土器	甕	SD11113	口径 21.6 残高 7.9	外面：板ナデ、ナデ 内面：ナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	口縁部2/12		002-07
13	弥生土器	壺	SD11118	残高 1.8	外面：口縁端部にハケメ 内面：瘤状突起、ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部1/12 未満		005-02
14	弥生土器	壺	SD11118	残高 1.7	外面：ナデ、口縁端部に櫛描波状文 内面：ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部1/12 未満		005-03
15	弥生土器	壺	SD11118	残高 4.5	外面：ナデ、櫛描直線文、櫛描波状文 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	細片		005-01
16	弥生土器	壺	SD11118	底径 7.4 残高 3.5	外面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	底部3/12		005-04
17	須恵器	杯G蓋	SD11118	口径 10.5 残高 1.7	外面：ロクロケズリ、ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰5Y6/1	口縁部3/12		005-05
18	弥生土器	壺	SK11115	残高 2.6	外面：口縁端部に櫛刺突 内面：ナデ、櫛描直線文	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/12 未満		004-03
19	弥生土器	壺	SK11115	残高 3.1	外面：口縁端部にキザミ、ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12 未満		003-05
20	弥生土器	甕	SK11115	残高 1.7	外面：口縁端部にキザミ、ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12 未満		004-01
21	弥生土器	無頸壺	SK11115	残高 2.6	外面：口縁端部にキザミ、櫛描波状文 内面：ナデ	密	良	灰黄褐10YR4/2	細片		004-02
22	弥生土器	壺	SK11115	残高 4.7	外面：ミガキ、篋描横線文7条 内面：ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	細片		003-06
23	弥生土器	壺	SK11115	底径 6.2 残高 5.1	外面：ヘラケズリ、ナデ 内面：ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	底部4/12		003-03
24	弥生土器	壺	SK11115	底径 7.4 残高 5.6	外面：ヘラケズリ、ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	底部5/12		003-04
25	弥生土器	壺	SK11116	残高 3.8	外面：ハケ、口縁端部に櫛描横線文、キザミ 内面：ハケ、浮文	密	良	灰黄褐10YR5/2	口縁部1/12 未満		004-08
26	弥生土器	壺	SK11116	残高 1.9	外面：ハケ、口縁端部に櫛描横線文、キザミ 内面：ハケ、ナデ	密	良	黄灰2.5Y4/1	口縁部1/12 未満		004-05
27	弥生土器	壺	SK11116	残高 3.5	外面：口縁端部にキザミ、櫛描直線文 内面：ナデ、櫛描波状文	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部1/12 未満		004-06
28	弥生土器	壺	SK11116	残高 2.3	外面：貝殻条痕文、口縁端部に櫛刺突 内面：ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部1/12 未満		004-04
29	弥生土器	壺	SK11116	残高 3.0	外面：篋描直線文2条、口縁端部にキザミ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 7.5YR7/4	口縁部1/12 未満		004-07
30	弥生土器	壺	SK11121	頸径 19.4 残高 20.0	外面：ナデ、篋描直線文、櫛描波状文 内面：ハケ、ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/4	頸部3/12		011-02
31	弥生土器	壺	包含層	頸径 9.5 残高 9.7	外面：ナデ、篋描直線文4条 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	頸部5/12		010-04
32	弥生土器	壺	包含層	残高 2.7	外面：口縁端部にキザミ 内面：ナデ	密	良	灰黄褐10YR6/2	口縁部1/12 未満		021-03
33	弥生土器	壺	包含層	残高 3.0	外面：ミガキ、突帯貼付、キザミ、篋描直線文 内面：ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	細片		019-02
34	弥生土器	壺	包含層	残高 4.0	外面：ミガキ、突帯貼付、キザミ 内面：ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	細片		019-01
35	弥生土器	壺	包含層	口径 12.7 残高 3.4	外面：櫛描直線文、口縁端部に櫛描波状文 内面：ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部2/12		021-01
36	弥生土器	壺	包含層	口径 13.1 残高 4.7	外面：櫛描斜線文、櫛描直線文、口縁端部に 櫛描直線文 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部2/12		021-02
37	弥生土器	壺	包含層	口径 13.8 残高 3.6	外面：櫛描直線文、口縁端部に櫛描斜線文 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR5/3	口縁部1/12		020-04
38	弥生土器	壺	包含層	口径 19.2 残高 4.4	外面：櫛描直線文、口縁端部に櫛描波状文 内面：ナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	口縁部1/12		020-02
39	弥生土器	壺	包含層	口径 15.9 残高 5.0	外面：貝殻条痕文、口縁端部に貝殻直線文、 瘤状突起 内面：ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	口縁部2/12		020-03
40	弥生土器	壺	包含層	口径 14.2 残高 3.3	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄褐 10YR5/4	口縁部1/12		019-05
41	弥生土器	壺	包含層	口径 10.6 残高 7.8	外面：櫛描直線文 内面：ナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	口縁部2/12		020-05
42	弥生土器	壺	包含層	口径 9.3 残高 5.6	外面：ハケ 内面：ハケ、オサエ、ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	口縁部9/12		010-01

第三 - 3 表 第193次調査 遺物観察表 1



番号	器種	器形	地区 遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
43	弥生土器	壺	包含層	口径 12.0 残高 6.0	外面：ハケ、櫛描直線文 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部5/12		010-02
44	弥生土器	細頸壺	包含層	口径 8.0 残高 6.9	外面：ハケ、ナデ 内面：ナデ	密	良	明赤褐5YR5/6	口縁部6/12		013-01
45	弥生土器	壺	包含層	残高 9.3	外面：ハケ、櫛描直線文	密	良	にぶい黄褐 10YR5/3	肩部片		020-01
46	弥生土器	壺	包含層	残高 3.3	外面：櫛描波状文、櫛描直線文 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	細片		019-03
47	弥生土器	高杯?	包含層	残高 3.7	外面：櫛描斜線文、櫛描直線文 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	細片		019-07
48	弥生土器	壺	包含層	残高 5.3	外面：籠描直線文、籠描斜格子文 内面：ナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	細片		018-03
49	弥生土器	壺	包含層	残高 4.7	外面：籠描直線文、籠描格子文 内面：ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	細片		018-04
50	弥生土器	壺	包含層	頸径 10.5 残高 9.9	外面：櫛描直線文、櫛描波状文 内面：ナデ	密	良	にぶい黄褐10YR5/3	頸部径4/12		010-03
51	弥生土器	壺	包含層	残高 8.4	外面：櫛描波状文、櫛描直線文、貝殻刺突 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	肩部片		019-06
52	弥生土器	壺	包含層	残高 4.2	外面：ナデ、櫛描直線文 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	細片		019-04
53	弥生土器	甕	包含層	口径 31.1 残高 14.8	外面：把手貼付、ナデ、ハケ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部1/12		013-02
54	弥生土器	甕	包含層	口径 21.4 残高 6.3	外面：ハケ、口縁端部にキザミ 内面：ハケ、ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/12 未満		014-01
55	弥生土器	甕	包含層	口径 24.2 残高 9.7	外面：ハケ、ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部1/12		016-01
56	弥生土器	甕	包含層	口径 22.9 残高 8.4	外面：ハケ、ナデ 内面：ハケ、ナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	口縁部1/12		016-02
57	弥生土器	甕	包含層	口径 23.5 残高 7.5	外面：ハケ、ナデ、煤付着 内面：ハケ、ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	口縁部1/12		015-03
58	弥生土器	甕	包含層	口径 24.5 残高 7.6	外面：ハケ、ナデ、口縁端部にキザミ 内面：ハケ、ナデ	やや 密	良	灰黄褐10YR5/2	口縁部2/12		015-01
59	弥生土器	甕	包含層	口径 24.3 残高 6.6	外面：ハケ、ナデ、煤付着 内面：ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部1/12		015-02
60	弥生土器	甕	包含層	口径 19.2 残高 7.0	外面：ハケ、ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部1/12		014-05
61	弥生土器	甕	包含層	残高 2.0	外面：条痕文、ナデ、口縁端部に櫛による刺突 内面：ハケ、ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部1/12		014-02
62	弥生土器	甕	包含層	残高 3.5	外面：ハケ、ナデ 内面：ナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	口縁部1/12		014-04
63	弥生土器	甕	包含層	残高 2.2	外面：条痕文 内面：ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部1/12 未満		013-03
64	弥生土器	甕	包含層	残高 4.5	外面：ハケ、ナデ 内面：ハケ、ナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	口縁部1/12 未満		021-06
65	弥生土器	甕	包含層	残高 2.6	外面：ナデ 内面：ハケ、ナデ	密	良	オリーブ褐2.5Y4/4	口縁部1/12		014-03
66	弥生土器	甕	包含層	残高 2.5	外面：条痕文、ナデ、口縁端部にキザミ 内面：ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	口縁部1/12 未満		013-04
67	弥生土器	壺	包含層	底径 4.9 残高 6.9	外面：オサエ、ケズリ 内面：ケズリ、ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	底部5/12		016-06
68	弥生土器	壺	包含層	底径 6.3 残高 5.5	外面：ケズリ 内面：ケズリ、ナデ	密	良	にぶい橙5YR6/4	底部完形		015-04
69	弥生土器	壺	包含層	底径 9.5 残高 3.6	外面：ケズリ、ナデ 内面：ケズリ、ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	底部4/12		016-03
70	弥生土器	壺	包含層	底径 5.2 残高 2.0	外面：オサエ、ミガキ 内面：ミガキ、ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	底部2/12		018-02
71	弥生土器	壺	包含層	底径 5.0 残高 3.9	外面：ケズリ、ハケ、ナデ 内面：ケズリ、ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	底部3/12		016-04
72	弥生土器	壺	包含層	底径 5.9 残高 6.4	外面：オサエ、ナデ、ハケ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/4	底部完形		011-01
73	弥生土器	壺	包含層	底径 4.9 残高 5.2	外面：オサエ、ケズリ 内面：ケズリ、ナデ	密	良	灰白2.5Y8/2	底部6/12		017-02
74	弥生土器	壺	包含層	底径 5.5 残高 3.4	外面：オサエ、ケズリ 内面：ナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	底部4/12		017-01
75	弥生土器	壺	包含層	底径 4.7 残高 3.8	外面：オサエ、ケズリ 内面：ケズリ、ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	底部完形		016-05
76	弥生土器	壺	包含層	底径 5.2 残高 5.4	外面：ケズリ 内面：ケズリ、ナデ	密	良	にぶい橙5YR6/4	底部3/12		015-06
77	弥生土器	壺	包含層	底径 5.5 残高 5.3	外面：ケズリ、ナデ 内面：摩擦	密	良	灰黄褐10YR5/2	底部6/12		015-05
78	石器	剥片	包含層	長さ 4.6 幅 3.0 厚さ 1.6	重さ16.75g、サヌカイト製	—	—	—	—		017-03
79	石器	敲石	包含層	長さ 14.9 幅 6.2 厚さ 2.5	重さ384g、砂岩	—	—	—	—		017-04
80	石器	未製品	包含層	長さ 14.5 幅 12.3 厚さ 5.3	重さ1234g、砂岩	—	—	—	—	打製石斧 未製品	018-01
81	弥生土器	甕	SA11120 柱穴9	口径 21.6 残高 3.0	外面：口縁端部にキザミ、ハケ、ナデ 内面：ハケ、ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12		003-01
82	弥生土器	壺	SA11120 柱穴5	底径 6.3 残高 6.0	外面：ミガキ、ケズリ 内面：ヘラナデ、ナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	底部7/12		002-06
83	弥生土器	壺	SB11110 柱穴4	口径 11.5 残高 1.8	外面：口縁端部に籠描沈線文1条、ナデ 内面： ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	口縁部2/12		001-05
84	土師器	鉢	SB11110 柱穴2	口径 16.8 残高 4.1	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	口縁部1/12		001-06
85	弥生土器	壺	SA11125 柱穴5	残高 3.7	外面：突帯貼付、ハケ 内面：ナデ	密	良	灰黄褐10YR4/2	細片		002-05

第三 - 4 表 第193次調査 遺物観察表 2

番号	器種	器形	地区 遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
86	弥生土器	壺	SA11125 柱穴5	残高 3.6	外面：突帯文貼付、篋描沈線文 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	細片		002-04
87	土師器	杯A	SA11125 柱穴7	口径 12.7 残高 2.4	外面：ナデ、オサエ、ヨコナデ 内面：ナデ	密	良	橙5YR7/6	口縁部1/12		002-01
88	須恵器	杯G蓋	SA11125 柱穴7	残高 2.1	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰白5Y7/1	細片		002-02
89	須恵器	小型 横瓶	SA11124・11125 柱穴6	残高 3.9	外面：ナデ、カキメ、漆付着 内面：ナデ、漆付着	密	良	黄灰2.5Y6/2	細片		002-03
90	土師器	甕	SK11129	口径 12.5 残高 8.9	外面：ハケ、ナデ、ケズリ 内面：ヘラナデ、ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部4/12		005-06
91	弥生土器	壺	SD11101	残高 1.8	外面：ハケ、口縁端部に櫛描直線文 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12		007-03
92	土師器	高杯	SD11101	残高 3.9	外面：ナデ 内面：シボリ痕	密	良	にぶい黄橙10YR6/4	脚部		009-06
93	陶器	山茶椀	SD11101	底径 5.9 残高 3.0	外面：ロクロナデ、糸切、高台貼付 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	底部5/12		007-02
94	土師器	皿	SD11101	口径 13.4 器高 1.9	外面：オサエ、ヨコナデ、煤付着 内面：ナデ、ヨコナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部6/12		007-01
95	近世陶磁	灯明皿	SD11101	口径 9.7 器高 1.8	外面：ロクロケズリ、ロクロナデ、糸切 内面：ロクロナデ	密	良	鉄釉：代赭色761 素地：灰黄2.5Y7/2	口縁部4/12		007-05
96	近世陶磁	灯明皿	SD11101	口径 9.9 器高 1.8	外面：ロクロケズリ、ロクロナデ、糸切 内面：受け部貼付、ロクロナデ	密	良	鉄釉：代赭色761 素地：灰黄2.5Y7/2	ほぼ完形	油受け 皿	007-04
97	近世陶磁	土瓶蓋	SD11101	口径 9.0 器高 3.4	外面：灰釉 内面：素地	密	良	灰釉：砂色800 素地：灰黄2.5Y7/2	完形		009-01
98	近世陶磁	染付皿	SD11101	口径 13.1 器高 3.0 底径 6.8	外面：文様なし 内面：染付植物文、見込部にも文様有	密	良	釉：水縹993 素地：灰白5Y8/1	口縁部5/12 底部5/12		008-03
99	近世陶磁	染付 小皿	SD11101	口径 9.5 器高 2.6 底径 3.6	外面：染付渦巻文、植物文 内面：染付渦巻文	密	良	釉：水縹993 素地：白9/	口縁部6/12 底部6/12		008-01
100	近世陶磁	鍍茶椀	SD11101	口径 8.2 器高 4.4 底径 2.9	外面：陰刻施文、上半部鉄釉、下半部灰釉 内面：鉄釉	密	良	鉄釉：皂色959 灰釉：青白椽989 素地：灰白2.5Y7/1	口縁部4/12 底部完形		008-02
101	近世陶磁	片口 小椀	SD11101	口径 9.4 器高 4.4 底径 4.8	外面：ロクロケズリ、ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰釉：青白椽989 素地：灰黄2.5Y7/2	ほぼ完形		009-02
102	近世陶磁	丸形 湯呑	SD11101	口径 8.3 器高 5.1 底径 3.2	外面：染付花文 内面：染付横線文、見込部にも文様有	密	良	釉：藍白869 素地：灰白5Y8/1	口縁部3/12 底部完形		007-07
103	近世陶磁	筒形 湯呑	SD11101	口径 7.5 器高 6.3 底径 3.5	外面：染付菊花文 内面：染付横線文、見込部にも文様有	密	良	釉：灰白946 素地：灰黄2.5Y7/2	口縁部8/12 底部7/12		007-06
104	近世陶磁	丸椀	SD11101	口径 12.0 器高 5.7 底径 5.4	外面：染付記号 内面：染付帯状菱形文	密	良	釉：灰白946	ほぼ完形		009-03
105	近世陶磁	広東椀	SD11101	口径 11.0 器高 6.0 底径 6.1	外面：染付風景画 内面：染付横線文	密	良	釉：銀鼠947 素地：灰白2.5Y7/1	口縁部10/1 2 底部9/12		008-04
106	須恵器	杯G身	ピット	口径 10.1 残高 2.5	内外面：ロクロナデ	密	良	灰5Y5/1	口縁部1/12		006-03
107	金属製品	銅銭	調査区 壁面	長さ 3.0 幅 0.6	重さ13.47g、直径2.5cm 元豊通寶、聖宋通寶ほか2枚が重なる	—	—	—	ほぼ完形		006-05
108	金属製品	銅銭	調査区 壁面	直径 2.3	重さ2.48g、天聖元寶	—	—	—	ほぼ完形		006-06
109	金属製品	銅銭	攪乱2	直径 2.5	重さ2.71g、皇宋通寶	—	—	—	ほぼ完形		003-07
110	弥生土器	壺	攪乱3	残高 3.9	外面：篋描直線文6条、口縁端部にキザミ 内面：ナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	口縁部1/12 未満		006-02
111	須恵器	無蓋 高杯	攪乱3	最大径 14.0 残高 3.4	外面：ロクロナデ、波状文 内面：ロクロナデ	密	良	灰5Y5/1	細片		003-02
112	土師器	高杯	包含層	残高 6.3	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	脚部		021-04
113	土師器	高杯	包含層	残高 3.8	外面：ナデ 内面：シボリ痕	密	良	明赤褐2.5YR5/6	脚部		021-05
114	土師器	杯G	包含層	口径 11.9 器高 4.3	外面：オサエ、ナデ 内面：ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部1/12		022-04
115	土師器	杯G	包含層	口径 12.0 器高 4.1	外面：オサエ、ナデ 内面：ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部1/12		022-03
116	土師器	杯G	包含層	口径 11.9 器高 3.1	外面：オサエ、ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12		021-10
117	土師器	杯G	包含層	口径 10.7 器高 2.8	外面：オサエ、ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12		021-09
118	土師器	甕	包含層	口径 17.0 残高 5.5	外面：ハケ、ナデ 内面：ハケ、ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部1/12 未満		021-07
119	土師器	甕	包含層	口径 18.6 残高 5.5	外面：ハケ、ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部4/12		022-01
120	土師器	鍋	包含層	口径 33.5 残高 10.5	外面：ハケ、把手貼付、ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部2/12		023-01
121	土師器	甌	包含層	残高 6.0	外面：ケズリ、ハケ 内面：ハケ、ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	底部1/12 未満		022-02
122	須恵器	杯G蓋	包含層	口径 8.5 残高 2.2	外面：ロクロケズリ、ロクロナデ 内面：ロクロナデ、ナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	ソマミのみ 欠損		022-05
123	須恵器	杯G蓋	包含層	口径 8.9 残高 1.8	外面：ロクロケズリ、ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	口縁部1/12		022-06
124	須恵器	杯G蓋	包含層	口径 7.5 残高 2.1	外面：ロクロケズリ、ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	口縁部2/12		022-07

第三 - 5 表 第193次調査 遺物観察表 3

番号	器種	器形	地区 遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
125	須恵器	杯身	包含層	底径 5.8 残高 2.0	外面：ナデ、ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰5Y5/1	底部3/12		027-08
126	須恵器	長頸壺	包含層	頸径 6.5 残高 11.9	外面：ロクロナデ、沈線 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	頸部5/12		027-05
127	須恵器	長頸壺	包含層	頸径 4.1 残高 4.9	外面：ロクロナデ、沈線 内面：ロクロナデ	密	良	自然釉：黒緑859 素地：灰5Y6/1	頸部6/12		027-04
128	須恵器	壺？	包含層	残高 2.5	外面：ロクロナデ、沈線 内面：ロクロナデ	密	良	灰7.5Y6/1	細片		027-06
129	須恵器	小型壺	包含層	底径 4.7 残高 3.6	外面：ナデ、ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	不良	灰黄褐10YR6/2	底部5/12		026-08
130	須恵器	壺	包含層	底径 4.0 残高 1.6	外面：ロクロナデ、糸切 内面：ロクロナデ	密	良	灰5Y5/1	底部6/12		027-01
131	須恵器	壺・瓶	包含層	残高 5.2	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	細片		027-03
132	須恵器	蓋	包含層	残高 1.5	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	暗灰黄2.5Y5/2	口縁部1/12 未満		027-07
133	須恵器	蓋	包含層	口径 14.6 残高 1.0	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	口縁部1/12		027-09
134	須恵器	円面硯	包含層	残高 4.0	外面：ロクロナデ、突帯貼付、方形透孔、 ×線刻 内面：ロクロナデ	密	良	灰5/0	脚部1/12 未満		027-02
135	陶器	小椀	包含層	残高 2.7	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	口縁部1/12		024-05
136	ロクロ 土師器	鉢	包含層	底径 5.3 残高 2.3	外面：ロクロナデ、ロクロナデ、糸切 内面：ロクロナデ	密	良	浅黄2.5Y7/4	底部6/12		024-04
137	陶器	山茶椀	包含層	底径 7.0 残高 2.0	外面：ロクロナデ、ロクロナデ、糸切、 高台貼付、ナデ 内面：ナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	底部6/12		023-04
138	須恵器	甕	包含層	口径 48.4 残高 7.9	外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、当て具痕	密	良	灰黄2.5Y6/2	口縁部2/12		012-01
139	小型 模造品	灰釉 陶器椀	包含層	底径 2.8 残高 1.4	外面：ロクロナデ、ロクロナデ、糸切、 高台貼付、ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄2.5Y6/3	底部1/12		023-03
140	土師器	鍋	包含層	口径 18.4 残高 16.1	外面：ケズリ、ナデ、煤付着 内面：ナデ	密	良	灰黄褐10YR6/2	口縁部6/12		023-02
141	陶器	山茶椀	包含層	口径 15.0 残高 4.6	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	口縁部2/12		026-05
142	陶器	大鉢	包含層	残高 6.3	外面：ロクロナデ、ロクロナデ、 高台貼付、ナデ 内面：ナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	底部付近		024-01
143	土師器	杯D	包含層	口径 12.2 器高 2.7	外面：オサエ、ナデ 内面：ナデ	密	良	灰白2.5Y8/2	完形		026-04
144	土師器	杯D	包含層	口径 12.4 器高 2.0	外面：オサエ、ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部3/12		026-06
145	土師器	皿	包含層	口径 10.7 器高 2.2	外面：ナデ 内面：オサエ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部1/12		021-08
146	土師器	小皿	包含層	口径 4.9 器高 0.9	外面：オサエ、ナデ 内面：ナデ	密	良	橙5YR6/6	完形		024-03
147	土師器	小皿	包含層	口径 7.8 器高 1.1	外面：オサエ、ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	ほぼ完形		024-06
148	土師器	小皿	包含層	口径 8.3 器高 1.0	外面：オサエ、ナデ 内面：ナデ	やや 密	良	灰白10YR8/2	ほぼ完形		024-02
149	土師器	小皿	包含層	口径 7.6 器高 1.4	外面：オサエ、ナデ、焼成前穿孔 内面：ナデ、細長いV字状線刻	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部9/12		024-07
150	金属製品	煙管	包含層	長さ 4.6 幅 1.3	重さ4.89g、青銅製	—	—	—	雁口部		024-08
151	金属製品	火打金	包含層	残長 5.3 幅 1.6	重さ10.81g、鉄製	—	—	—	全体4/12		024-09
152	土師器	鍋	表土	残高 6.9	外面：ハケ、把手貼付、ナデ 内面：ハケ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	把手部のみ		025-05
153	須恵器	杯身	表土	口径 9.2 器高 3.0	外面：ナデ、ロクロナデ、ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	暗灰黄2.5Y5/2	口縁部3/12		025-02
154	須恵器	杯身	表土	口径 14.5 残高 4.0	外面：ロクロナデ、ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰7.5Y4/1	口縁部2/12		025-01
155	須恵器	腿	表土	最大径 6.8 残高 1.1	外面：ロクロナデ、ロクロナデ、沈線 内面：ナデ	密	良	灰黄2.5Y6/1	細片		025-04
156	須恵器	甕	表土	口径 19.9 残高 4.7	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰褐5YR6/2	口縁部1/12		025-03
157	小型 模造品	灰釉陶 器羽釜	表土	口径 8.8 残高 2.3	外面：ロクロナデ、ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	浅黄2.5Y7/3	口縁部1/12		025-06
158	陶器	小椀	表土	口径 8.8 器高 3.5	外面：ロクロナデ、ロクロナデ、 高台貼付、ナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	口縁部9/12		025-07
159	青磁	花卉椀	表土	口径 15.8 残高 5.0	外面：花卉文	密	良	釉：錆青磁856 素地：灰白2.5Y7/1	口縁部1/12	龍泉 窯系	026-02
160	白磁	小椀	表土	口径 11.6 残高 2.8	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	釉：水縹993 素地：灰白5Y7/1	口縁部1/12		026-01
161	石器	未製品	表土	長さ 6.5 幅 5.3	重さ34.7g、片岩	—	—	—	—		026-03

第三－6表 第193次調査 遺物観察表4



写真図版 1



第193次調査区全景 1 (垂直写真)



第193次調査区全景 2 (南西から)



S X11102溝 1 半裁状況 (北西から)



S X11102溝 2 土層 (北から)



S A11102柱穴 5 土層 (北東から)



S A11120柱穴 7・8 土層 (南から)



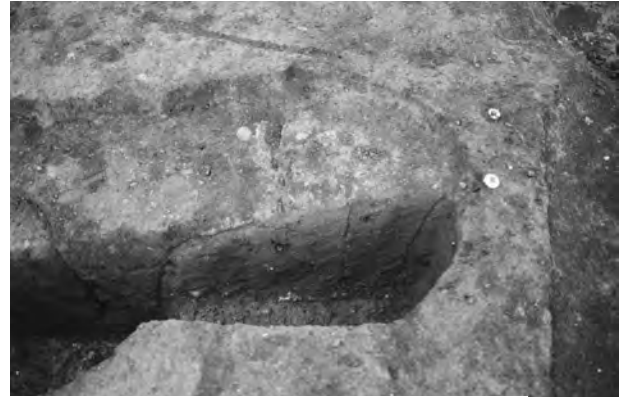
S B11110全景 (南から)



写真図版 3



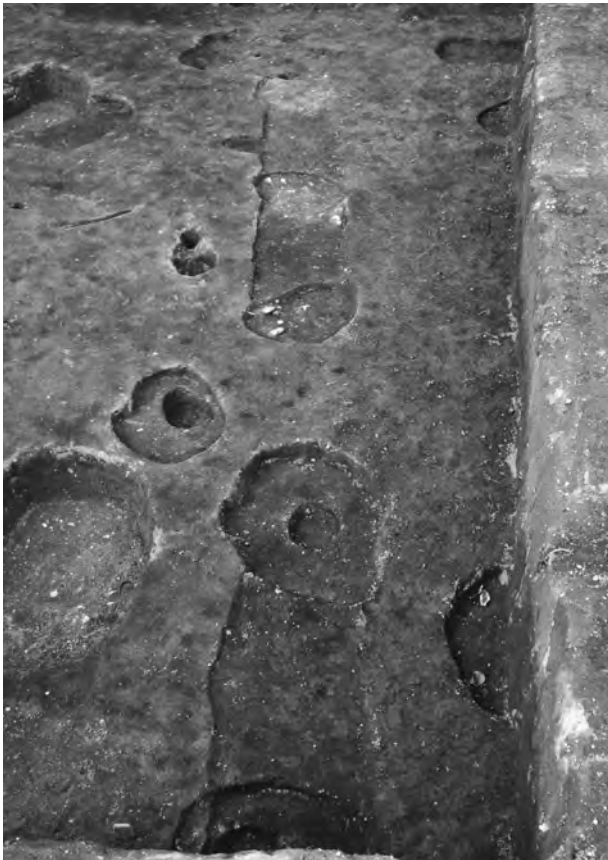
S A11123・11124・11125全景（東から）



S A11123柱穴12土層（南から）



S A11124柱穴9土層（南から）



S A11127・11128全景（南から）



S A11127柱穴1・2間土層（西から）



S A11127柱穴3土層（西から）





第193次調査出土遺物 1

写真図版 5



第193次調査出土遺物 2

# IV 第195次調査 (6 A F 10 中垣内地区)

## 1 はじめに

半世紀に及ぶ発掘調査の蓄積によって、史跡西部の段丘縁辺には、古代伊勢道を基点として南北へ派生する道路の西側に飛鳥～奈良時代の掘立柱建物・竪穴建物の広範な形成が確認されている。特に掘立柱塀による方形に区画された空間が複数箇所確認されており、平安時代に方格街区（方格地割）が敷設される以前の齋宮中枢域（齋王宮殿域）と想定している。

飛鳥時代は、古代伊勢道から南へ派生する直線道路の敷設軸と同様の北で東に33°振れた方位の掘立柱塀による方形区画を中心とし、周辺の建物群は官衙域と推定されている。飛鳥時代の齋宮中枢域は、第193次調査で掘立柱塀の北東角が確認され、その延伸部分の第189次調査を東辺、第85～8次調査を西辺とした方形区画の配置が明らかとなった。方形区画はN33°Eの方位をとり、東西幅約41m、南北幅55m以上の規模をもつ。区画内部には長舎を含む掘立柱建物群が整然と配置されているものと予想される。

奈良時代には、正方位の配置で方形に掘立柱塀をめぐらす空間整備が施される。方形区画の平面規模は南北約57mを測るが、ほぼ同一の地点で2～3回の建替えが確認されている。配置をみると方形区画が東西に併存、あるいは交互に変遷を重ねていることから、齋王宮殿域とし、その周辺に官衙域が配されるとみられる。

第195次調査地は、史跡西部の中垣内地区に所在する。齋宮段丘面（段丘中位面）の段丘崖が沖積低地側に西方へ張り出す箇所に位置し、発掘調査前は畑地として土地利用されている。

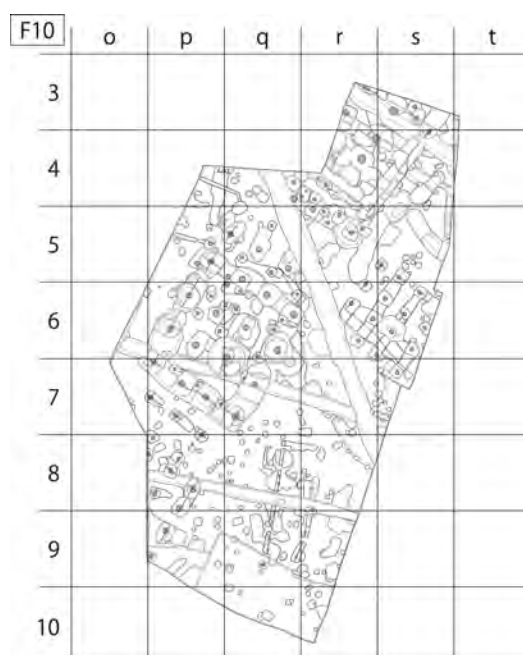
調査地は飛鳥時代の方形区画の西隣接地にあたり、その区画から段丘崖までの東西40～50m間の土地利用状況、齋宮中枢域に付随する重要施設の確認を目的としている。

## 2 地形環境と地層

史跡齋宮跡は、紀伊山地に端を発する櫛田川（祓川）・宮川の下流域に挟まれた明野原台地の西方に位置する。後背の玉城丘陵・大仏山丘陵を基点として、そこから北へ段丘高位面（明野段丘面）、段丘中位面（齋宮段丘面）の順に地形は下降し、東西に広がる沖積低地（海岸平野・氾濫平野・三角州・後背低地）を介して、伊勢湾へと連なる。史跡齋宮跡は、段丘中位面（齋宮段丘面）に立地し、史跡西域の段丘面南西部を最高所（標高14.5m程度）として、全体に東北東に向けて緩やかに下へ傾斜し、史跡の東域では標高9m程度となる。傾斜角度は1°にも達しないほどの平坦な地盤を形成している。

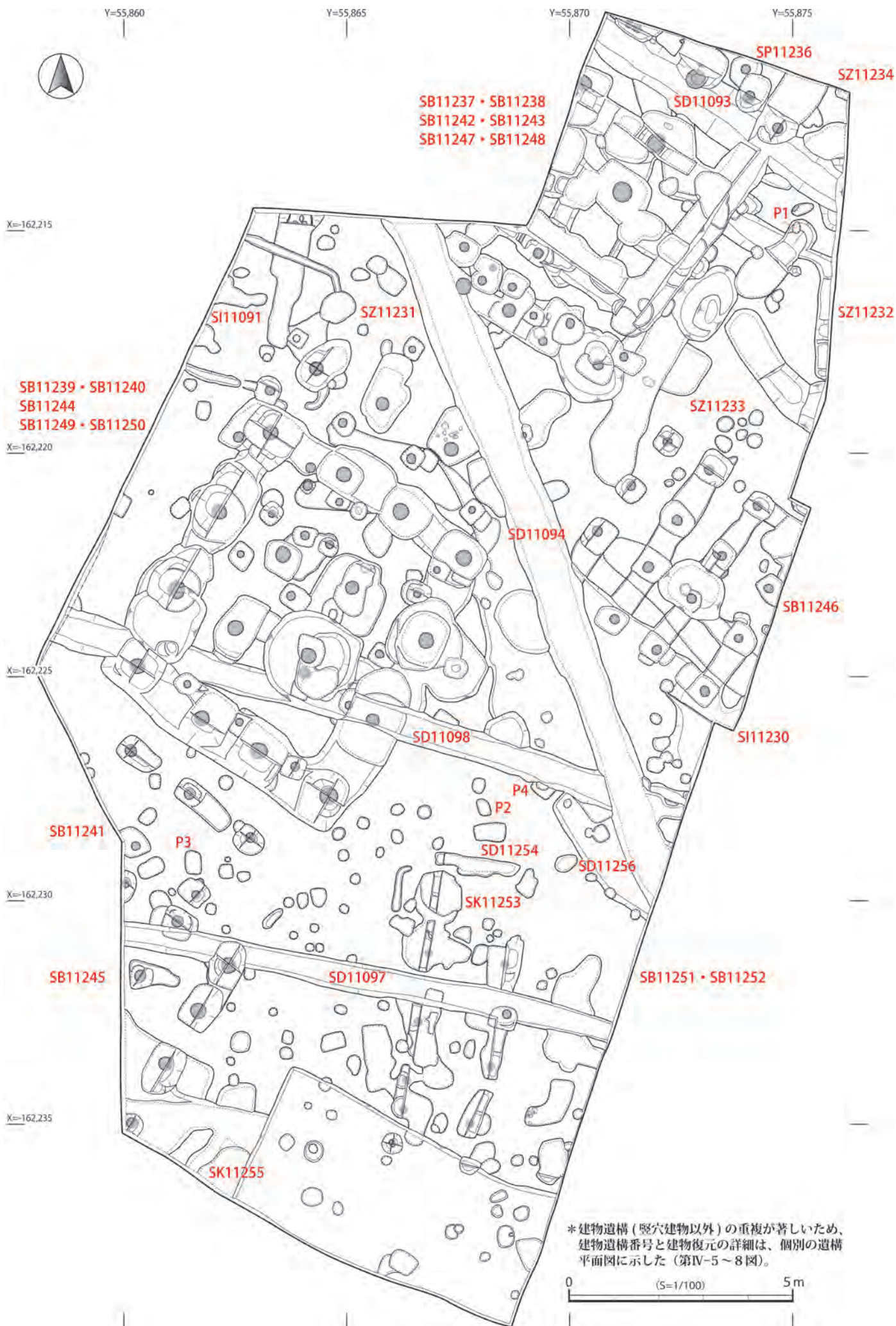
第195次調査地は、段丘西縁の現況が畑地の平坦面で、約14mの標高を測り沖積低地から3～4mの比高がある。

基本層序は上から、作土（A1層）、客土（A2～A4層）、遺物包含層（B1～B3層）、地山（C・D層）からなり、地山面までの深度は北



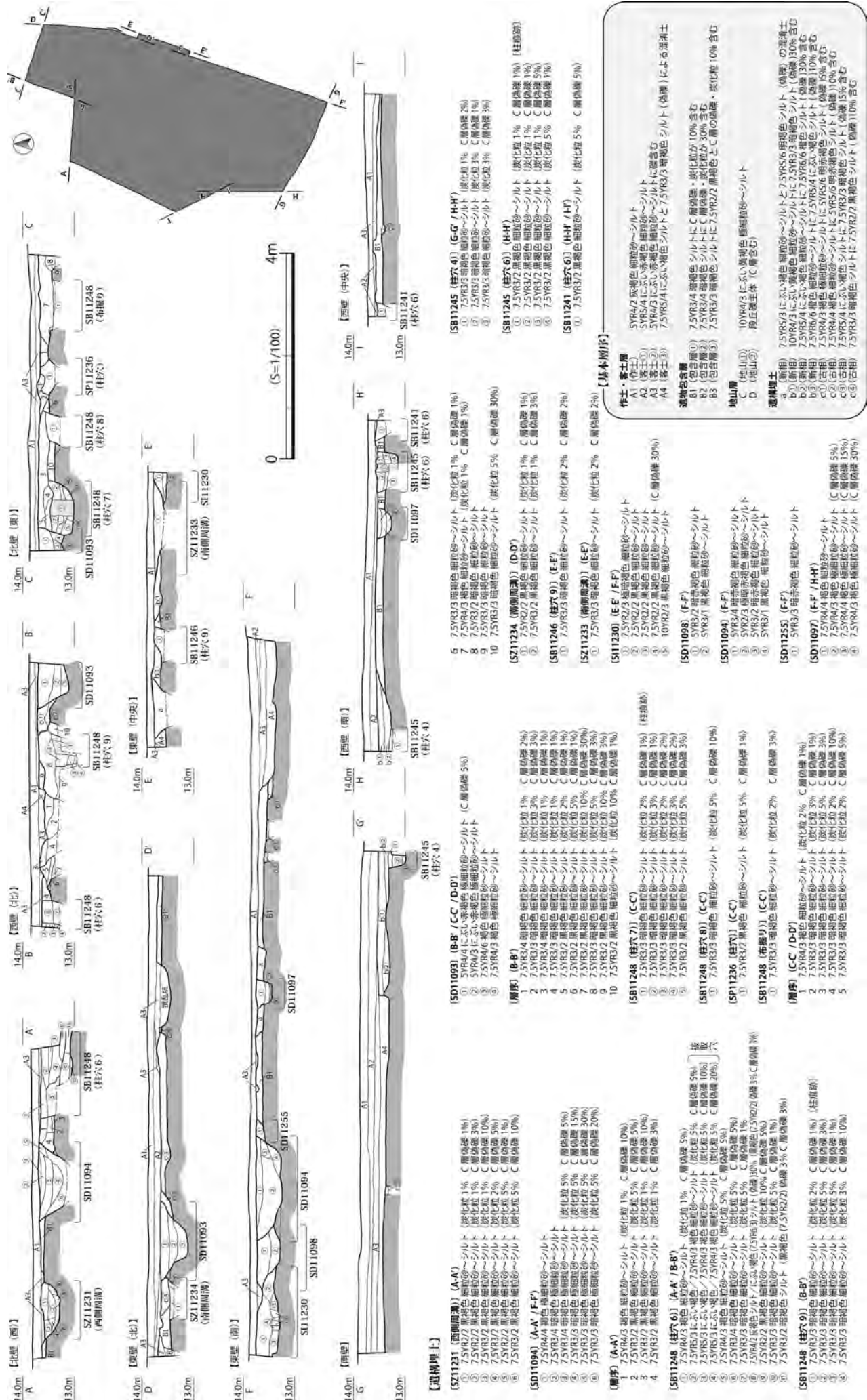
第IV-1図 第195次調査 グリッド図 (1/400)





第IV-2図 第195次調査 遺構平面図 (1/100)





第IV-3図 第195次調査 土層断面図 (1/100) — 53 —

端で0.4m、南端で0.6mを測る。遺構の大半は遺物包含層の上面から掘り込んでいる。遺物包含層と遺構埋土の碎屑物構成・色調が似ており、当該面での遺構検出は困難のため、地山直上で行って誤認を回避するよう努めた。

### 3 遺構

調査の結果、縄文・弥生・古墳・飛鳥・奈良時代、鎌倉時代以降の各種遺構を検出した。検出遺構は、縄文時代中期末のピット3基、弥生時代前期後葉～中期前葉の竪穴建物1棟、弥生時代中期中葉の方形周溝墓4基、古墳時代中～後期とみられる竪穴建物1棟、飛鳥時代後半の総柱建物14棟、奈良時代前期と推定される総柱建物2棟、溝1基・土坑1基、鎌倉時代以降の溝4条などがある。また、掘立柱建物と考えられる柱穴を検出したものの、建物配置や規模、所属時期などの詳細は判然としないものがある（第IV-2～8図）。

#### （1）縄文時代の遺構と関連地層

**遺物包含層** 調査区北半部で縄文時代中期末を中心とする土器片が少量出土している。包含層のほかに、弥生時代以降の遺構や攪乱坑（樹木根痕）からも出土があった。

**P 1～3** s4、q・r7、p8で検出したピットである。いずれも縄文時代中期末の土器片が少量出土した。

#### （2）弥生時代の遺構と関連地層

**遺物包含層** 調査区全域で弥生土器の破片が出土している。弥生土器は弥生時代前期後葉～中期前葉を中心とし、わずかに中期前葉～中葉の土器が含まれる。包含層のほかに飛鳥時代以降の遺構や攪乱坑（樹木根痕）からも出土している。

**S I 11230** 調査区中央東端（r7、s6・7）で平面形が円形の竪穴建物1棟を確認した。摺鉢状の掘り込みとその壁際付近に柱穴列をめぐらしており、竪穴建物としては簡易的な構造である。建物規模は長軸で約4.2mを測る。建物東半部は調査区外のため、中央土坑等の内部施設は不明である。弥生時代前期後葉～中

期前葉の土器片が出土した。

**S Z 11231～11234** 調査区北半部で弥生時代中期中葉の方形周溝墓4基を確認した。墓群構成から墓の築造順は、S Z 11231からS Z 11234にかけて行われたと想定される。いずれも四隅切れの平面形をもち、S Z 11231～11233は隣り合う周溝墓の周溝一辺を共有する特徴がある。S Z 11231の墓規模は周溝芯々間で約8.5mを測る。周溝からは弥生時代中期中葉の土器片が少量出土した。供献土器と把握できる完形品相当の資料はなく、いずれも破片化している。破碎散布儀礼による土器片の可能性はあるが、特定するには至らない。

#### （3）古墳時代の遺構

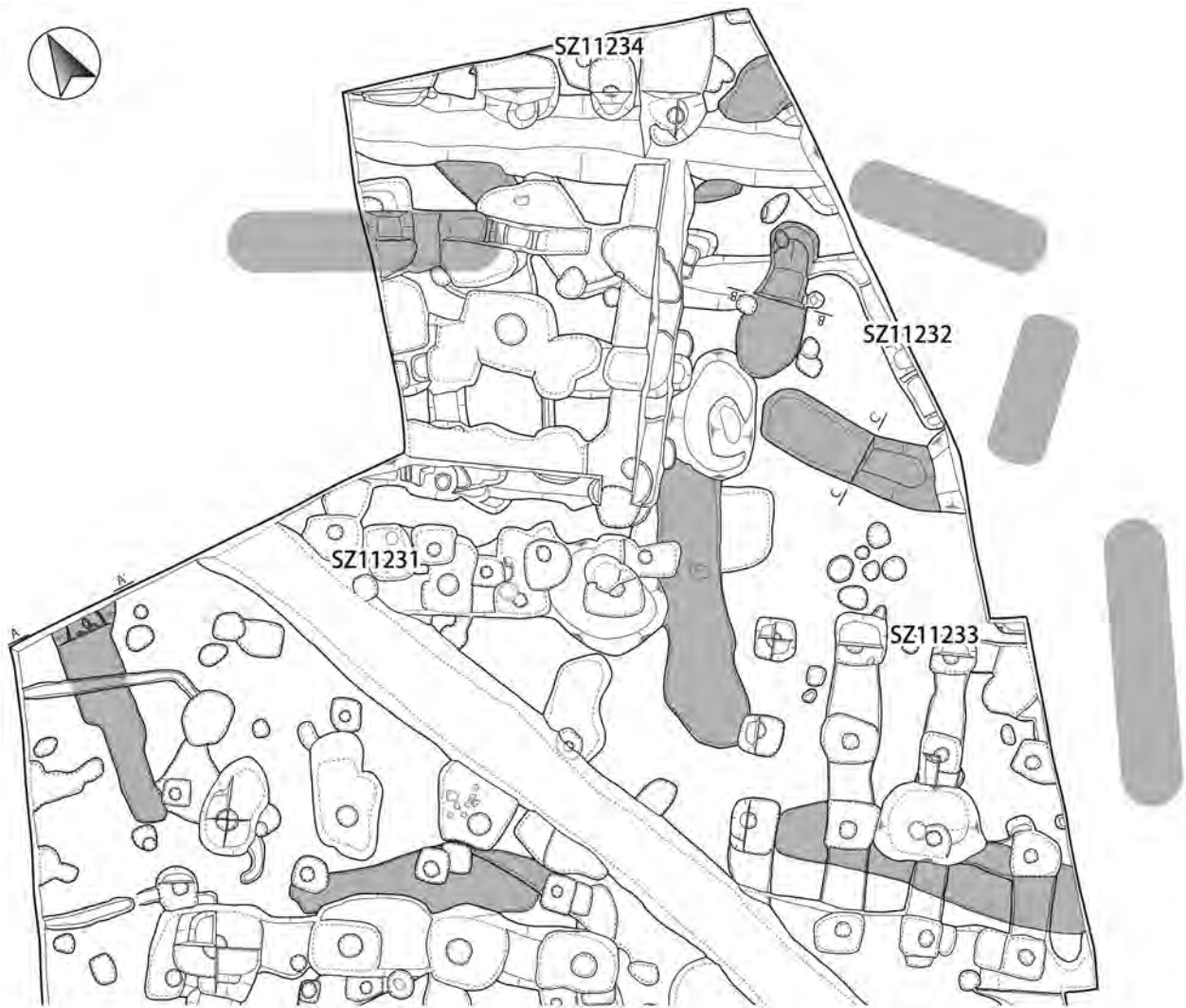
**S I 11091** 調査区北西端（p・q4・5）で、平面形が隅丸方形の竪穴建物1棟を確認した。第192次調査S H 11091の東半部に相当し、建物規模は長軸4.9m×短軸3.3mを復元できる。建物遺構の上面は大きく削平されており、壁際溝と造付カマドの基部が遺存するに留まり、主柱穴と貼床は確認できなかった。出土遺物はないが、周辺の既往調査から古墳時代中期後葉～後期前葉に属すると推定される。

#### （4）飛鳥時代の遺構

調査区全域で多数の柱穴が設けられており、諸特徴による組み合わせから建物14棟を把握した。すべて総柱建物であり高床倉庫と想定される。柱掘方及び柱痕跡から飛鳥時代後半頃の土器片の出土をみるが、相対的に出土遺物は僅少である。柱穴の重複関係と出土遺物や周辺の既往調査の成果に基づく建物軸の方位から、いずれも飛鳥時代に属する。なお、総柱建物群の変遷は本章5節で考察する。

S B 11237・11238・11242・11243・11247・11248は調査区北部（q・r・s3・4・5）、S B 11239・11240・11244・11249・11250は調査区中央部西半（p・q・r5・6・7）、S B 11246はその東半（r・s5・6・7）、S B 11241・11245は調査区南部西半（o・p7・8・9）、S B 11253・11254はその東半（q・r8・9）で検出した。個々の総柱建物の詳細は、第IV-5～8図・第IV-2表を参照されたい。





【SZ11231 西側周溝】



【SZ11231】(A-A')

1	7.5YR2/2 黒褐色 細粒砂～シルト	(炭化粒 1%)	C層 偽礫 1%)	機能時堆積層
2	7.5YR2/2 黒褐色 細粒砂～シルト	(炭化粒 1%)	C層 偽礫 3%)	
3	7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂～シルト	(炭化粒 1%)	C層 偽礫 10%)	
4	7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂～シルト	(炭化粒 2%)	C層 偽礫 5%)	
5	7.5YR2/2 黒褐色 細粒砂～シルト	(炭化粒 5%)	C層 偽礫 1%)	
6	7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂～シルト	(炭化粒 5%)	C層 偽礫 10%)	

【SZ11232 西側周溝】

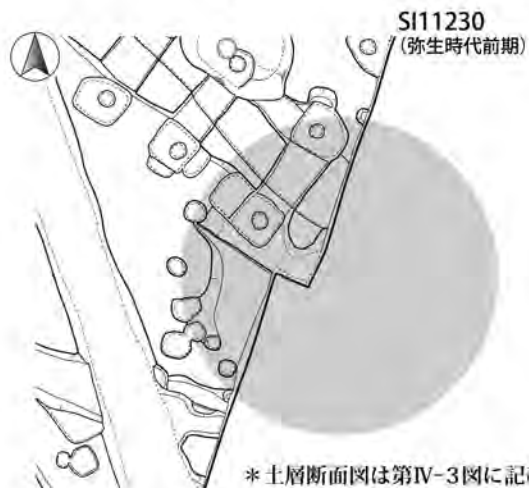
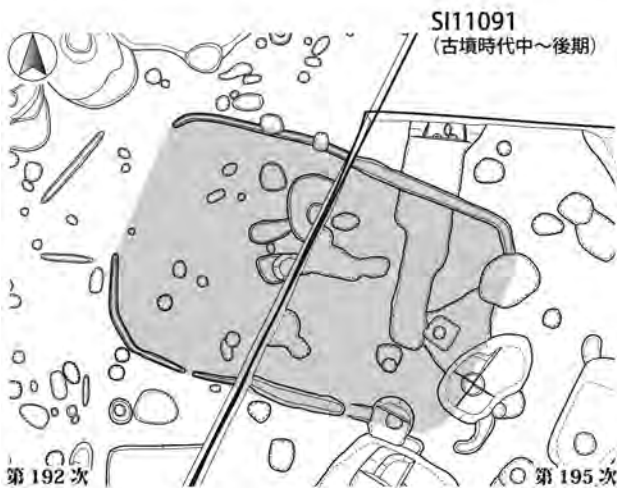
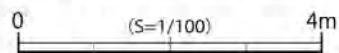


【SZ11232 南側周溝】



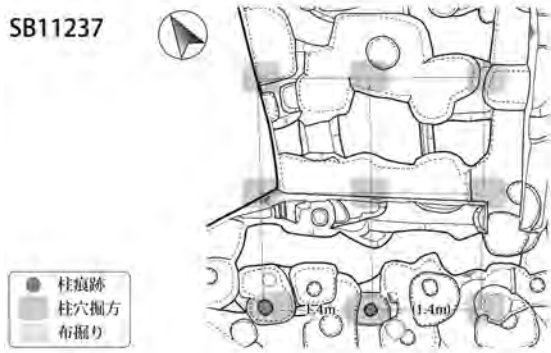
【SZ11233】(B-B' / C-C')

1	7.5YR3/2 黒褐色 シルト	(C層 偽礫 5%)	機能時堆積層
2	7.5YR2/2 黒褐色 シルト	(C層 偽礫 10%)	
3	7.5YR4/3 褐色 シルト	(炭化粒 5% C層 偽礫 30%)	

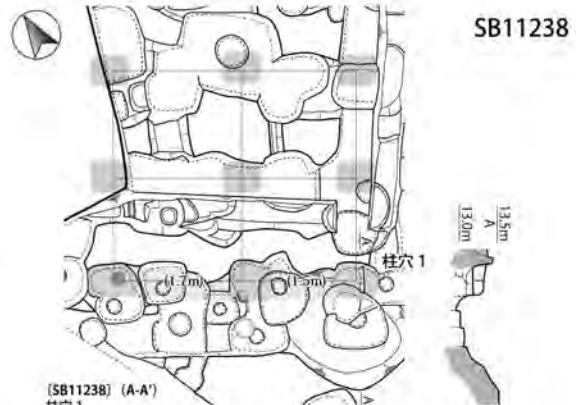


第IV-4図 SZ11231～11234、SI11091・11230 平面・断面図 (1/100)

SB11237



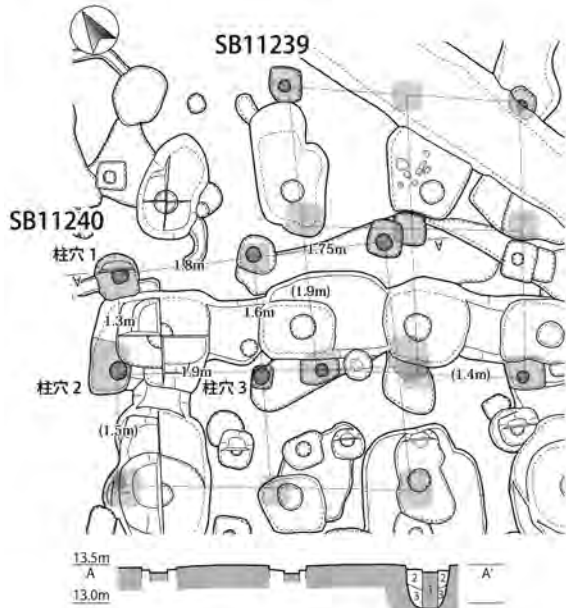
SB11238



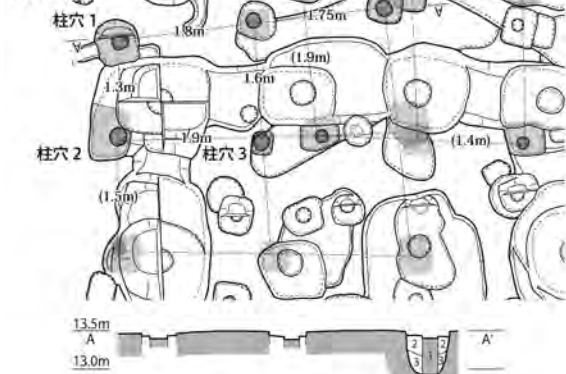
(SB11238) (A-A)

柱穴 1

- 1 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 20% C層偽礫 30%)
- 2 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 20% C層偽礫 20%)



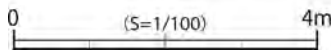
SB11240



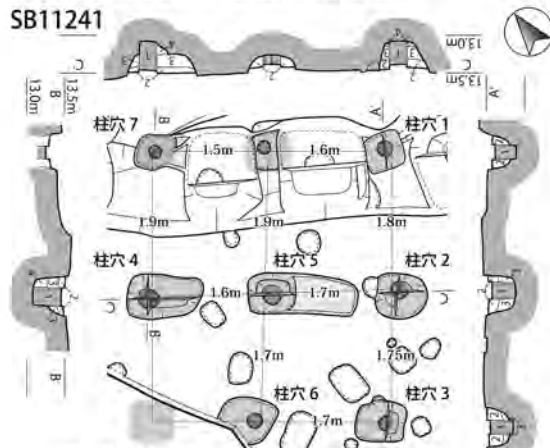
(SB11240) (A-A)

柱穴 1

- 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂〜シルト (C層偽礫 5% 黒褐色 (7.5YR2/2) 偽礫 10%)
- 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂〜シルト (C層偽礫 5% 黒褐色 (7.5YR2/2) 偽礫 10%)
- 3 7.5YR2/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (C層偽礫 5% 黒褐色 (7.5YR2/2) 偽礫 10%)



SB11241



(SB11241) (A-A' / C-C')

柱穴 1

- 1 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 5% C層偽礫 1%)
- 2 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 3% C層偽礫 3%)

柱穴 2

- 1 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 5% C層偽礫 1%)
- 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 3% C層偽礫 3%)
- 3 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 1% C層偽礫 2%)
- 4 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 3% C層偽礫 1%)

柱穴 3

- 1 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 5% C層偽礫 1%)
- 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 2% C層偽礫 2%)
- 3 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 2% C層偽礫 1%)

(SB11241) (B-B' / C-C')

柱穴 4

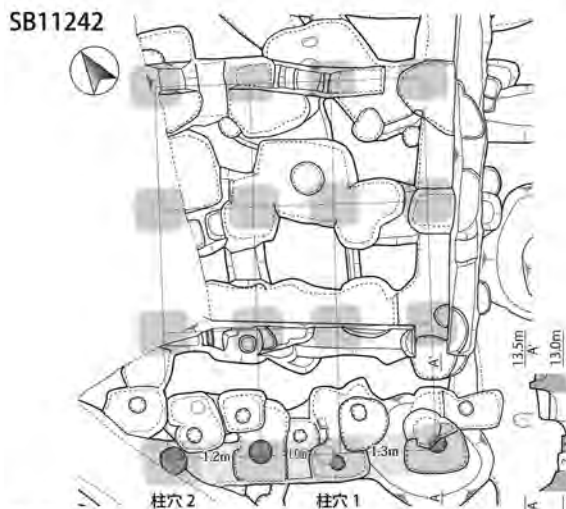
- 1 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 5% C層偽礫 1%)
- 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 1% C層偽礫 2%)
- 3 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)
- 4 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 3% C層偽礫 3%)

(SB11241) (C-C')

柱穴 5

- 1 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 5% C層偽礫 1%)
- 2 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 3% C層偽礫 3%)

SB11242



(SB11242) (A-A')

柱穴 1

- 1 7.5YR3/1 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 30% C層偽礫 20%)
- 2 7.5YR3/1 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 10% C層偽礫 10%)

(SB11243) (A-A')

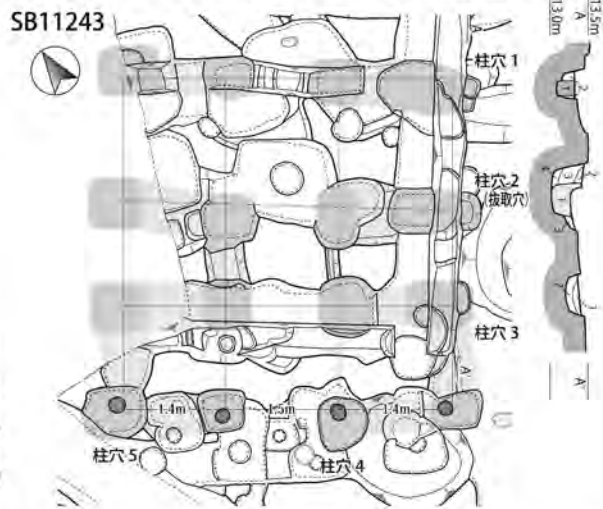
柱穴 1

- 1 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 3% C層偽礫 2%)
- 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 2% C層偽礫 1%)

柱穴 3

- 1 7.5YR4/2 灰褐色 中粒砂〜シルト (炭化粒 5% C層偽礫 5%)
- 2 10YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 1%)

SB11243



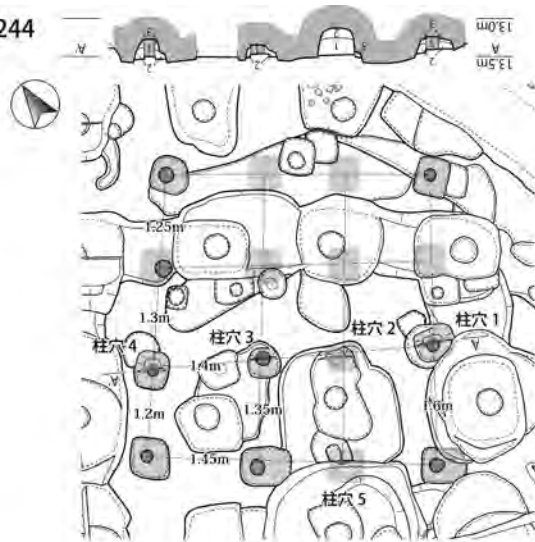
柱穴 2

- 1 10YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 5% C層偽礫 3%)
- 2 10YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)
- 3 10YR2/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 2% C層偽礫 2%)
- 4 10YR3/2 黒褐色 細粒砂〜シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)

第IV-5図 SB11237~11243 平面・断面図 (1/100)

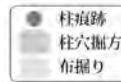


SB11244

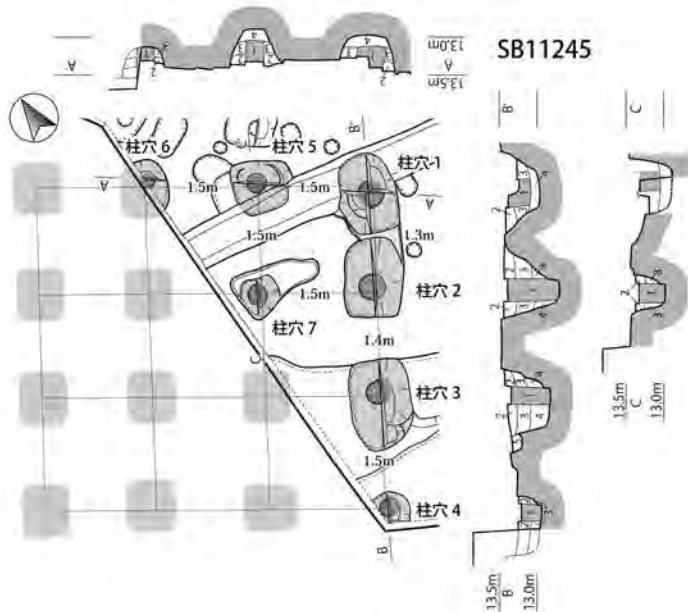


(SB11244) (A-A')

- 柱穴 1
- 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 10%)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層偽礫 5%)
  - 3 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 2%)
- 柱穴 2
- 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層偽礫 2%)
  - 2 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 2%)
  - 3 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層偽礫 5%)
- 柱穴 3
- 1 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層偽礫 3%)
- 柱穴 4
- 1 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 2%)
  - 2 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 5%)
  - 3 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 2%)



SB11245



(SB11245) (A-A')

- 柱穴 1
- 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 2%)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1% 季大礫多数)
  - 3 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層偽礫 2%)
  - 4 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 5%)
- 柱穴 5
- 1 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)
  - 2 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1%)
  - 3 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層偽礫 1%)
  - 4 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層偽礫 3%)
- 柱穴 6
- 1 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)
  - 2 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1%)
  - 3 7.5YR3/1 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)

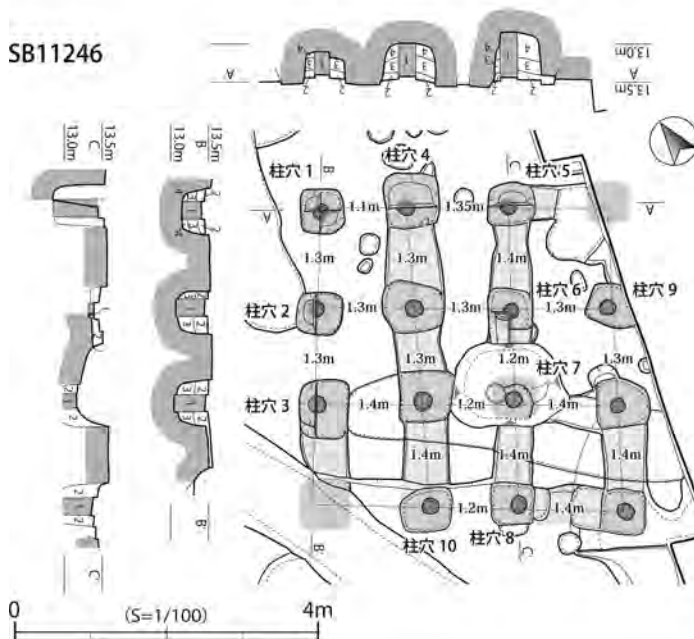
(SB11245) (B-B')

- 柱穴 2
- 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 2%)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1% 季大礫多数)
  - 3 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層偽礫 2%)
  - 4 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)
- 柱穴 3
- 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 2%)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1% 季大礫多数)
  - 3 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層偽礫 2%)
  - 4 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)
  - 5 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)
- 柱穴 4
- 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 2%)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)
  - 3 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層偽礫 3%)

(SB11245) (C-C')

- 柱穴 7
- 1 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)
  - 2 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1%)
  - 3 7.5YR3/1 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)

SB11246



(SB11246) (A-A')

- 柱穴 1
- 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層偽礫 2%)
  - 3 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層偽礫 3%)
  - 4 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)
- 柱穴 4
- 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 2%)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層偽礫 2%)
  - 3 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層偽礫 5%)
  - 4 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 5%)
- 柱穴 5
- 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層偽礫 3%)
  - 3 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 5%)
  - 4 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層偽礫 3%)

(SB11246) (B-B')

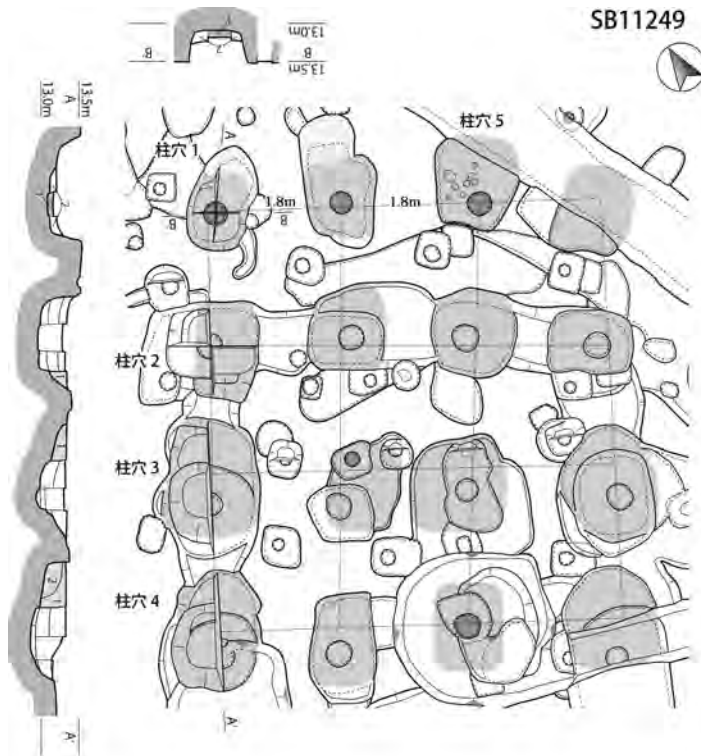
- 柱穴 2
- 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層偽礫 2%)
  - 3 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 2%)
- 柱穴 3
- 1 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 5%)
  - 3 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 10%)

(SB11246) (C-C')

- 柱穴 6
- 1 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 5%)
- 柱穴 7
- 1 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層偽礫 1%)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 5%)

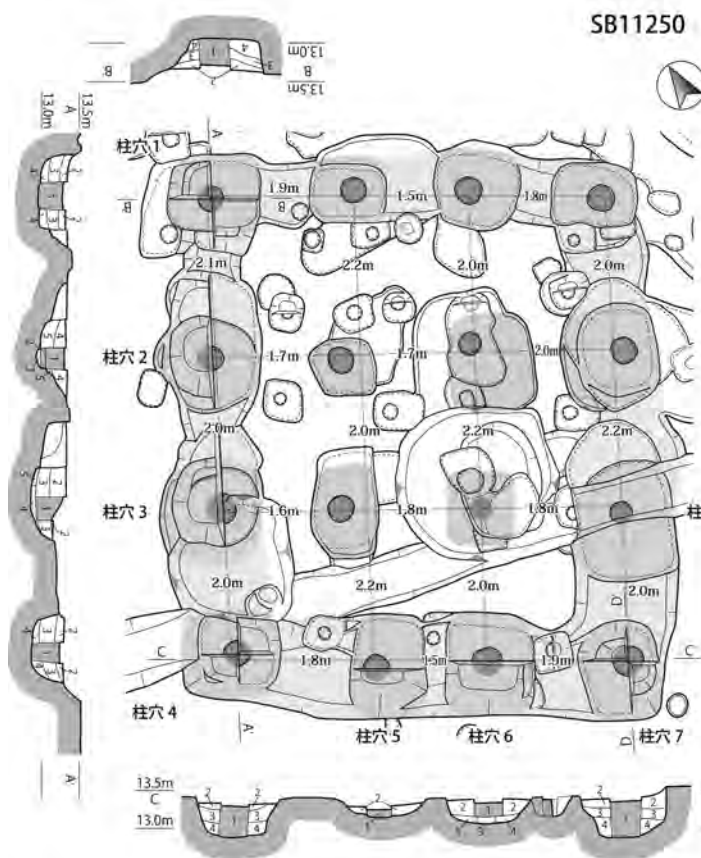
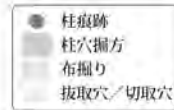
第IV-6図 SB11244~11246 平面・断面図 (1/100)





**[SB11249] (A-A' / B-B')**

- 柱穴 1  
 1 7.5YR3/2 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 20% C層偽礫 10%)  
 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 10% C層偽礫 10%)
- 柱穴 2  
 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 10%)
- 柱穴 3  
 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 10%)
- 柱穴 4  
 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 10%)  
 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 10% C層偽礫 10%)

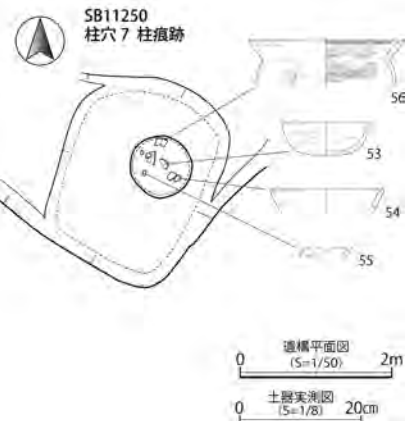


**[SB11250] (A-A' / B-B')**

- 柱穴 1  
 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 10%)  
 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層偽礫 3%)  
 3 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層偽礫 5%)  
 4 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層偽礫 2%)  
 5 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 10%)
- 柱穴 2  
 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 10%)  
 2 7.5YR3/3 暗褐色 シルト (炭化粒 2% C層偽礫 3%)  
 3 7.5YR3/3 暗褐色 中粒砂~細粒砂 (炭化粒 3% C層偽礫 5%)  
 4 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層偽礫 3%)  
 5 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 5%)  
 6 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 10%)
- 柱穴 3  
 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 10%)  
 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 5%)  
 3 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 15%)  
 4 7.5YR3/3 暗褐色 シルト (炭化粒 1%)  
 5 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1%)  
 6 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 10%)  
 7 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 10% C層偽礫 15%)
- 柱穴 4  
 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 10%)  
 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層偽礫 3%)  
 3 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層偽礫 5%)  
 4 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層偽礫 2%)

**[SB11250] (C-C' / D-D')**

- 柱穴 5  
 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 10%)  
 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層偽礫 5%)
- 柱穴 6  
 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 10%)  
 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 15%)  
 3 7.5YR3/3 暗褐色 シルト (炭化粒 1%)  
 4 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1%)
- 柱穴 7  
 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 10%)  
 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 15%)  
 3 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 20%)  
 4 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層偽礫 5%)  
 5 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層偽礫 30%)

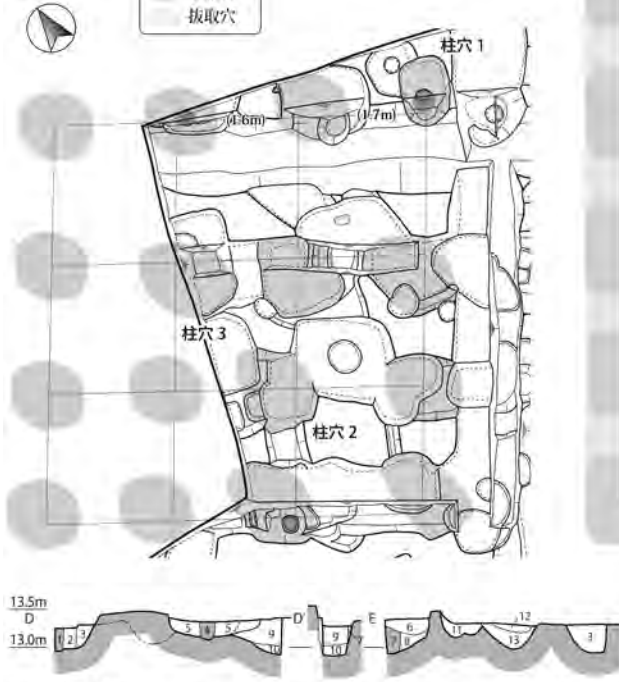
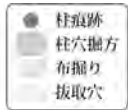


0 (S=1/100) 4m

第四-7図 SB11249・11250 平面・断面図 (1/100)



SB11247

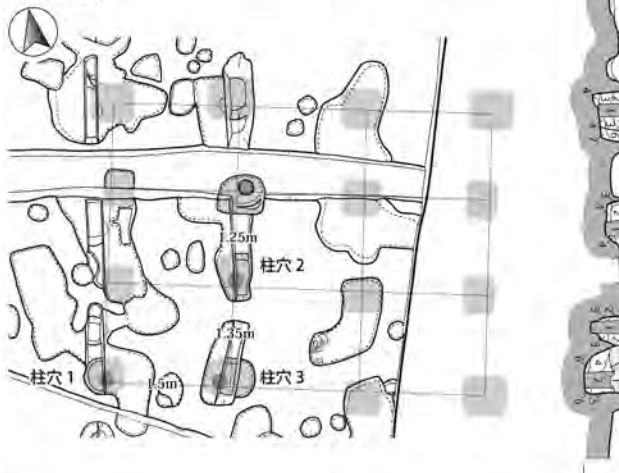


- (SB11248) (A-A')**
- 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 1%)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 3%)
  - 3 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 5%)
  - 4 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 2%)
  - 5 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 50%)
  - 6 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 2%)
  - 7 7.5YR4/2 灰褐色 中粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 5%)
  - 8 7.5YR4/2 灰褐色 シルト (炭化粒 10% C層係数 10%)
  - 9 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 5%)
  - 10 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層係数 3%)
  - 11 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 2%)
  - 12 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 1%)
  - 13 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 5%)
  - 14 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 1%)
  - 15 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 1%)

- (SB11248) (B-B')**
- 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 2%)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (黒褐色 7.5YR2/2 係数 2% C層係数 3%)
  - 3 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (黒褐色 7.5YR2/2 係数 2% C層係数 3%)
  - 4 7.5YR3/3 暗褐色 中粒砂~シルト (黒褐色 7.5YR2/2 係数 2% C層係数 3%)
  - 5 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂~シルト (黒褐色 7.5YR2/2 係数 1%)
  - 6 7.5YR3/2 黒褐色 シルト (黒褐色 7.5YR2/2 係数 3%の混入)
  - 7 7.5YR3/2 黒褐色 シルト (黒褐色 7.5YR2/2 係数 5%の混入)
  - 8 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (黒褐色 7.5YR2/2 係数 30% C層係数 10%の混入)
  - 9 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (黒褐色 7.5YR2/2 係数 40% C層係数 5%の混入)
  - 10 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (黒褐色 7.5YR2/2 係数 2% C層係数 3%)
  - 11 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (黒褐色 7.5YR2/2 係数 1% C層係数 1%)
  - 12 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (黒褐色 7.5YR2/2 係数 1% C層係数 1%)
  - 13 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (黒褐色 7.5YR2/2 係数 2% C層係数 3%)
  - 14 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (黒褐色 7.5YR2/2 係数 2% C層係数 3%)
  - 15 7.5YR4/2 灰褐色 シルト (黒褐色 7.5YR2/2 係数 2%の混入)
  - 16 7.5YR3/2 黒褐色 シルト (黒褐色 7.5YR2/2 係数 3% C層係数 3%)

- (SB11248) (D-D' / E-E')**
- 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層係数 2%)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 2%)
  - 3 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 2%)
  - 4 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層係数 1%)
  - 5 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 3%)
  - 6 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 30% C層係数 40%)
  - 7 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 10%)

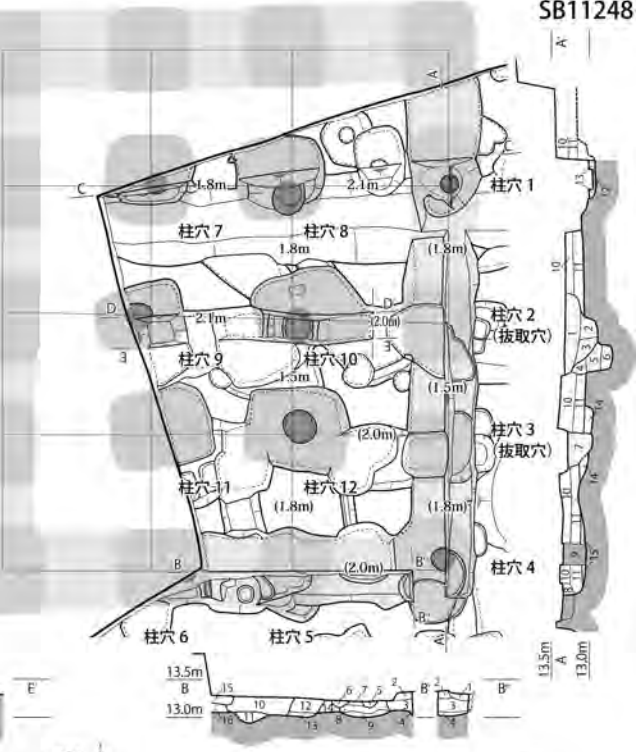
SB11251



- (SB11252) (A-A')**
- 柱穴 1
- 1 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 3%)
  - 2 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 1%)
  - 3 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 5%)
  - 4 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 5%)
  - 5 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 3%)
  - 6 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 5%)
  - 7 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層係数 2%)
- 柱穴 2
- 1 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 2%)
  - 2 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 1%)
  - 3 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層係数 5%)
  - 4 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 3%)
  - 5 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 3%)
- 柱穴 3
- 1 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 10%)
  - 2 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 3%)
  - 3 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 5%)
- 柱穴 5 (SB11251)
- 1 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 1%)
  - 2 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 5%)
  - 3 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 10% C層係数 5%)
  - 4 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 1%)
  - 5 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 1%)
  - 6 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 3%)

- (SB11252) (B-B')**
- 柱穴 5
- 1 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 2%)
  - 2 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 1%)
  - 3 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 5%)
  - 4 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 5%)
  - 5 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 1%)
  - 6 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 3%)
  - 7 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 1%)
- 柱穴 6・柱穴 2 (SB11251)
- 1 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 1%)
  - 2 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層係数 3%)
  - 3 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 5%)
  - 4 7.5YR4/2 灰褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層係数 1%)
  - 5 7.5YR5/3 に近い褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 1%)
  - 6 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層係数 3%)
  - 7 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 10%)
- (SB11252) (C-C')**
- 柱穴 4
- 1 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 5%)
  - 2 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層係数 1%)
- 柱穴 8
- 1 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層係数 1%)
- 柱穴 9
- 1 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 5%)
  - 2 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層係数 1%)
  - 3 7.5YR4/3 褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 5%)

SB11248



- (SB11248) (C-C')**
- 1 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層係数 1%)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 2%)
  - 3 7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 3%)
  - 4 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 1%)
  - 5 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 2%)
  - 6 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 5% C層係数 3%)
  - 7 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 2%)
  - 8 7.5YR2/2 黒褐色 シルト (炭化粒 1%)
  - 9 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 1%)
  - 10 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 3%)
  - 11 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層係数 2%)
  - 12 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 2% C層係数 3%)
  - 13 7.5YR3/3 暗褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 1% C層係数 2%)
  - 14 7.5YR2/2 黒褐色 細粒砂~シルト (炭化粒 3% C層係数 5%)

第四-8図 SB11247・11248・11251・11252 平面・断面図 (1/100)

遺構名	調査時遺構名	グリッド	時期	出土遺物
S I 11091	SH11091	p4・5, q4・5	古墳時代中～後期	土師器
SD 11093	溝1	r3, s3・4, t4	鎌倉時代以降	弥生土器・土師器・須恵器
SD 11094	溝5	q4・5, r5～8, s8	鎌倉時代以降	弥生土器・土師器・須恵器
SD 11097	溝16	p8, q8, r8・9	鎌倉時代以降	土師器
SD 11098	溝11	o6, p6・7, q7・r7・s7	鎌倉時代以降	弥生土器・土師器・須恵器
S I 11230	竪穴建物 (落ち込み)	r7, s6・7	弥生時代前期	弥生土器
SZ 11231	溝12・17・18 (方形周溝墓3)	p4・5, q4～6, r4～6, s5	弥生時代中期	弥生土器
SZ 11232	溝3・4 (方形周溝墓1)	s4・5	弥生時代中期	縄文土器・弥生土器・剥片石器(サヌカイト製)
SZ 11233	溝12 (方形周溝墓2)	r5・6, s5～7,	弥生時代中期	弥生土器
SZ 11234	土坑4 (方形周溝墓4)	r3・4, s3・4, t3・4	弥生時代中期	弥生土器
SP 11236	土坑2	s3	飛鳥時代後期	弥生土器・土師器
SK 11253	土坑①北	q8	奈良時代前期	土師器
SD 11254	溝①	q8, r8	奈良時代前期	土師器
SK 11255	土坑9	p9	奈良時代前期	土師器・須恵器
SD 11256	—	r7・8	—	なし
P 1	s-04 : P1	s4	縄文時代中期	縄文土器
P 2	q・r-07 : P1	q7, r7	縄文時代中期	縄文土器
P 3	p-08 : P1	p8	縄文時代中期	縄文土器
P 4	r-07 : P1	r7	弥生～奈良時代	弥生土器

第四－1表 第195次調査 遺構一覧

遺構名	調査時遺構名	時期	建物平面規模		建物面積 (㎡)	柱穴平面規模		柱抜取穴	布掘り	建物軸	備考
			柱間 (間)	桁行(m) 梁行(m)		柱穴掘方 (m)	柱痕跡 (m)				
SB 11237	溝10 (柱穴①～③)	飛鳥	2×2?	? 2.8	8.4 (推定)	0.4～0.6	0.2	?	×	N33° E	桁行3.0m(推定)
SB 11238	溝10 (柱穴①～③)	飛鳥	2×2?	(3.2) ?	8.9 (推定)	0.5～0.7	0.2	?	帯型 (東西)	N34° E	SB11237の建替え 梁行2.8m(推定)
SB 11239	総柱建物7 (柱穴①)	飛鳥	2×2	3.6～3.8 2.7～3.1	10.6	0.4～0.5	0.2	?	×	N33° E	
SB 11240	総柱建物6 (柱穴①～③)	飛鳥	2×2	3.5～3.8 2.8～3.2	10.9	0.5～0.7	0.2	?	×	N34° E	SB11239の建替え
SB 11241	総柱建物3 (柱穴①～⑤)	飛鳥	2×2	3.55～3.6 3.1～3.3	11.3	0.5～0.7	0.2	?	長方形型? (東西)	N38° E	
SB 11242	溝10 (柱穴①～③)	飛鳥	3×3	? 3.5	17.1 (推定)	0.6～0.8	0.2～0.3	?	帯型 (東西)	N34° E	桁行4.9m(推定)
SB 11243	溝10 (柱穴①～③)	飛鳥	3×3	(4.4) 4.3	18.9	0.5～1.2	0.2	有	長方形型 (東西/南北)	N36° E	SB11242の建替え
SB 11244	総柱建物4 (柱穴①～③)	飛鳥	3×3	3.8～3.9 3.5～3.8	14	0.4～0.7	0.2	無	×	N34° E	
SB 11245	総柱建物2 (柱穴①～⑦)	飛鳥	3×3	4.2 3.0+	17.6 (推定)	0.6～1.0	0.3	無	長方形型 (南北)	N34° E	梁行4.2m(推定)
SB 11246	総柱建物1 (柱穴①～⑭)	飛鳥	3×3	4.0 3.9～4.0	15.8	0.5～0.7	0.25	無	帯型 (南北)	N35° E	
SB 11247	土坑1・2・3・5 溝6～9 (柱穴①～④)	飛鳥	3×3	(5.3) (3.3+)	25.9 (推定)	0.7～1.2	0.3	?	×	N36° E	桁行5.3m(推定) 梁行4.9m(推定)
SB 11248	土坑1・2・3・5 溝6～9 (柱穴①～④)	飛鳥	4×3	5.1+ 3.9+	40.7 (推定)	1.0～1.5	0.4	有	口字型	N36° E	桁行6.9m(推定) 梁行5.9m(推定)
SB 11249	大型総柱建物(古) 溝13～15 (柱穴①～③・⑧～⑯)	飛鳥	3×3	(5.6) (5.1～5.4)	29.1 (推定)	1.0～1.6	0.3	有	×	N32° E	桁行5.6m(推定) 梁行5.2m(推定)
SB 11250	大型総柱建物(新) 溝13～15 (柱穴①～⑯)	飛鳥	3×3	6.1～6.2 5.2	32	0.8～1.6	0.4	無	口字型	N33° E	
SB 11251	総柱建物5(古) 土坑①～⑤	奈良	2×3	1.5+ 2.6+	18.5 (推定)	0.4～0.5	0.15～0.2	有	×	N13° E	桁行5.0m(推定) 梁行3.7m(推定)
SB 11252	総柱建物5(新) 土坑①～⑤	奈良	2×3	(3.4+) 4.5	23.4 (推定)	0.4	0.15～0.2	無	×	N11° E	桁行5.2m(推定)
SP 11236	土坑2	飛鳥	—	—	—	0.7	0.2	無	—	—	倉庫1期の 建物柱穴か

第四－2表 第195次調査 総柱建物一覧



**S B11237・11238** 南辺の側柱を検出したことにより、柱間寸法から2×2間の総柱建物として復原した。柱穴の重複関係より、S B11237からS B11238へ同位置に建替えられたと推定される。

**S B11239・11240** 柱穴の重複関係より、S B11239からS B11240に位置を違えて建替えられたと推定される。S B11240の柱穴3柱痕跡は主柱と同等規模であるが、柱掘方が小さいために束柱の可能性を残す。

**S B11241** 建物軸はN38° Eで、総柱建物群の中でも振り幅が大きい。建替えや補修は介在しない。

**S B11242・11243** 南辺の側柱を検出したことにより、柱間寸法から3×3間の総柱建物と復原した。柱穴の重複関係より、S B11242からS B11243へ同位置に建替えられたと推定される。

**S B11244・11245・11246** S B11244・11246は柱掘方が壺掘りか布掘りの違いはあるが、建物構造や規模は等質的といえる。S B11245はそれよりも僅かに大きい、基本的には類似する。

**S B11247・11248** S B11247の柱穴の平面形は不整楕円形を呈すると推定される。S B11247柱穴2もしくはS B11248柱穴12から飛鳥時代の土師器甕(5)が出土している。S B11248は、柱穴6・9・10の柱掘方から須恵器杯G蓋(21・34)が出土した。これによりS B11248の建立時期の上限は7世紀後半と考えられる。なお、S B11248の柱穴2・3・5・6には柱抜取穴が認められ、それらに黄灰色シルトが充填されている。

**S B11249・11250** S B11249の北妻側は柱抜取穴／切取穴が確認できる。S B11250の柱穴7柱痕跡から土師器杯A・杯G・甕(53～56・61)が出土した。これによりS B11250の廃絶時期の下限は7世紀後葉(遅くても8世紀前葉か)に比定される。

#### (5) 奈良時代の遺構

S B11251・11252は調査区南部東半(p・r8・9)

で検出した。個々の総柱建物の詳細は、第IV-8図・第IV-2表を参照されたい。

**S B11251・11252** 柱掘方はいずれも不整形で規模も不揃いとなり、柱筋の通りが悪い。柱穴同士の重複や柱抜取穴／切取穴により、柱掘方及び柱痕跡は不明瞭である。飛鳥時代の総柱建物群の建物配列軸とは異なり、柱掘方埋土の特徴や出土遺物から奈良時代に属するとみられる。ただし正方位指向の典型的な奈良時代の掘立柱建物とは異なる。

**S K11253・S D11254** S B11251・11252に付随する施設と想定される。

**S K11255** 平面形は不整形でS K11253に類似する。

#### (6) 鎌倉時代以降の遺構

**S D11093・11094・11097・11098** いずれも直線主体の溝であり、土地区画や排水機能を有するものと推測される。第85-8次・第192次調査で確認した箇所延長に相当する。S D11094からは飛鳥時代に属するとみられる土師器・須恵器などが多く含まれていた。S D11093は近現代～現代、S D11094・11097・11098は鎌倉～室町時代に属する。

## 4 遺物

遺物整理用コンテナ25箱分の遺物が出土した。遺構番号順に主な時代ごとに分けて詳述する(第IV-9～11図)。なお、ここでは特徴的な遺物のみ記述する。

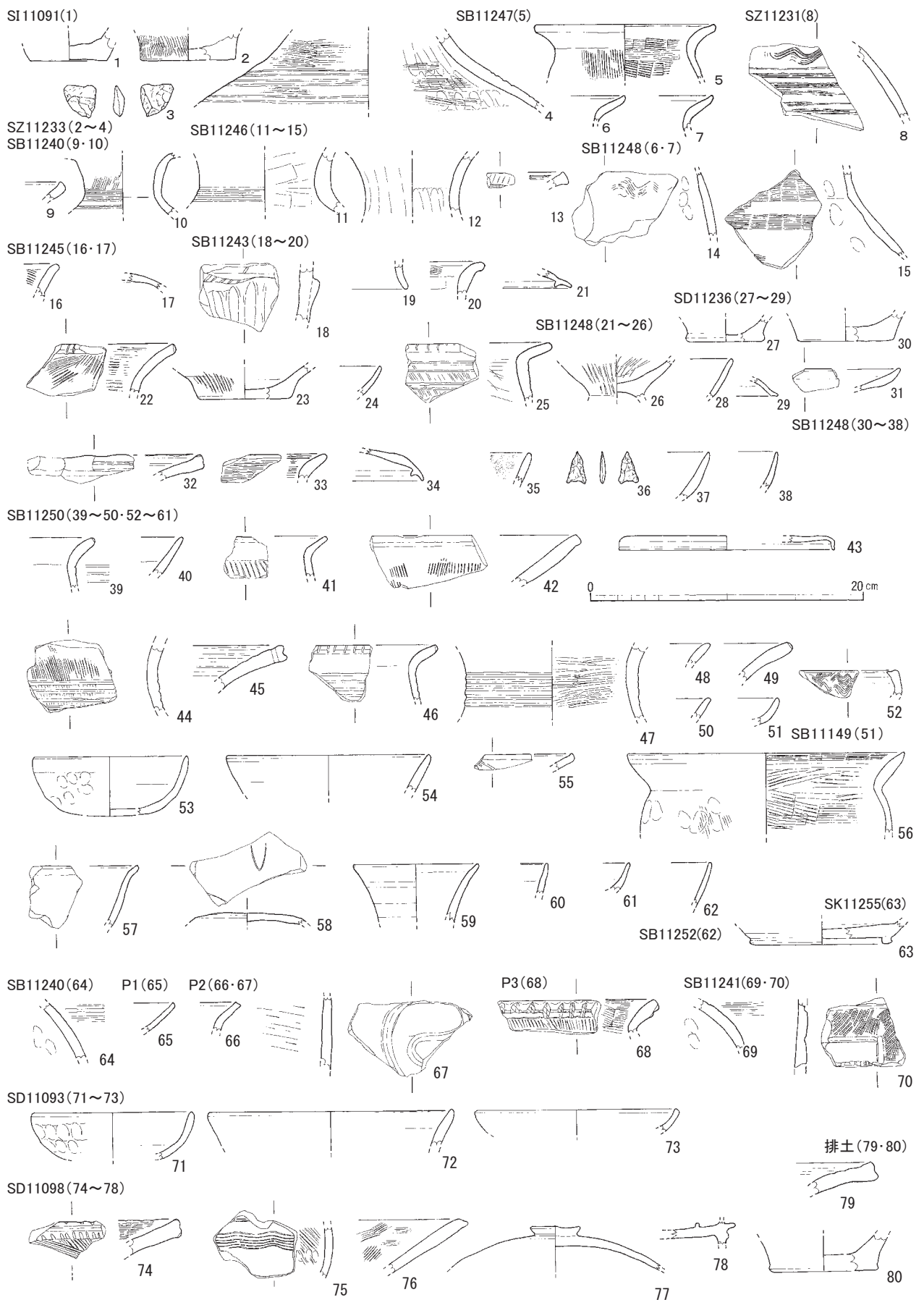
**S I11091出土遺物(1)** 弥生土器の壺底部片で、弥生時代前期後葉～中期前葉に属する。

**S Z11232出土遺物(2～4)** 弥生土器の壺胴部片と底部片、サヌカイト製の剥片石器である。弥生時代前期後葉～中期前葉に属する。

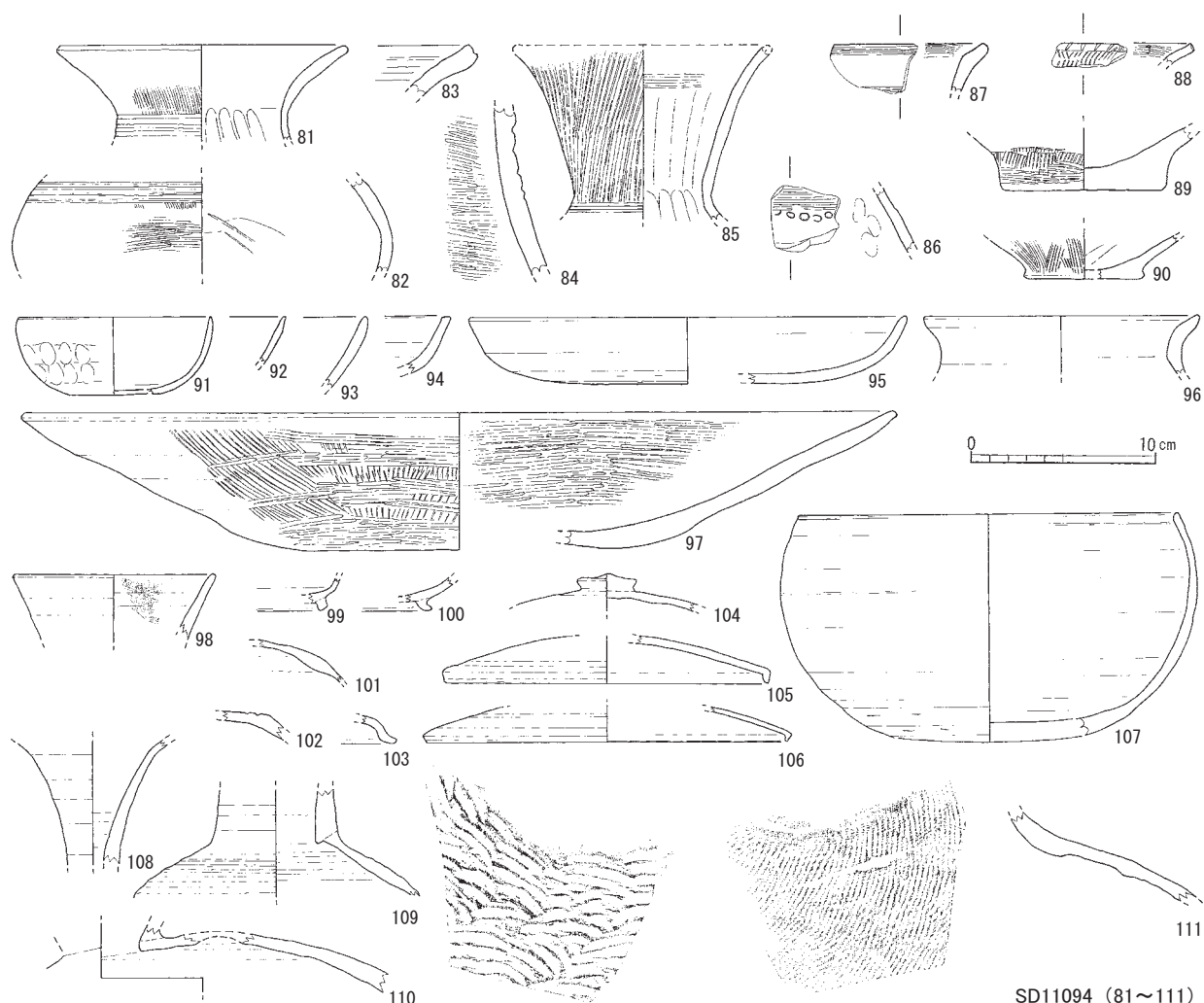
**S B11247出土遺物(5)** 土師器甕の破片で、口縁端部は面をもち、その上端部を肥厚させる。飛鳥時代に属するとみられる。

**S B11248出土遺物(6・7)** 土師器甕の破片で、口縁上端部を肥厚させる。飛鳥時代に属するとみられる。

**S Z11231出土遺物(8)** 弥生土器の壺胴部



第IV-9図 第195次調査 出土遺物実測図1 (1/4)



SD11094 (81~111)

第IV-10図 第195次調査 出土遺物実測図2 (1/4)

片で、櫛描直線文・波状文を施す。弥生時代中期中葉に属する。

**SB11240出土遺物 (9・10)** 9は土師器甕で口縁端部に面をもち、上端部を肥厚させる。飛鳥時代に属するか。10は弥生土器壺で、頸胴部に櫛描直線文を施す。弥生時代中期中葉に属する。

**SB11246出土遺物 (11~15)** 弥生土器壺の口縁部・頸部・胴部片である。13は口縁端部に列点文、14は櫛描波状文を施す。弥生時代中期中葉に属する。

**SB11245出土遺物 (16・17)** 16は弥生土器壺の口縁部片。17は須恵器杯G蓋の破片か。

**SB11243出土遺物 (18~20)** 18は縄文時代中期末の縄文土器深鉢。19は土師器杯Bの高台、20は土師器壺あるいは甕口縁部片。

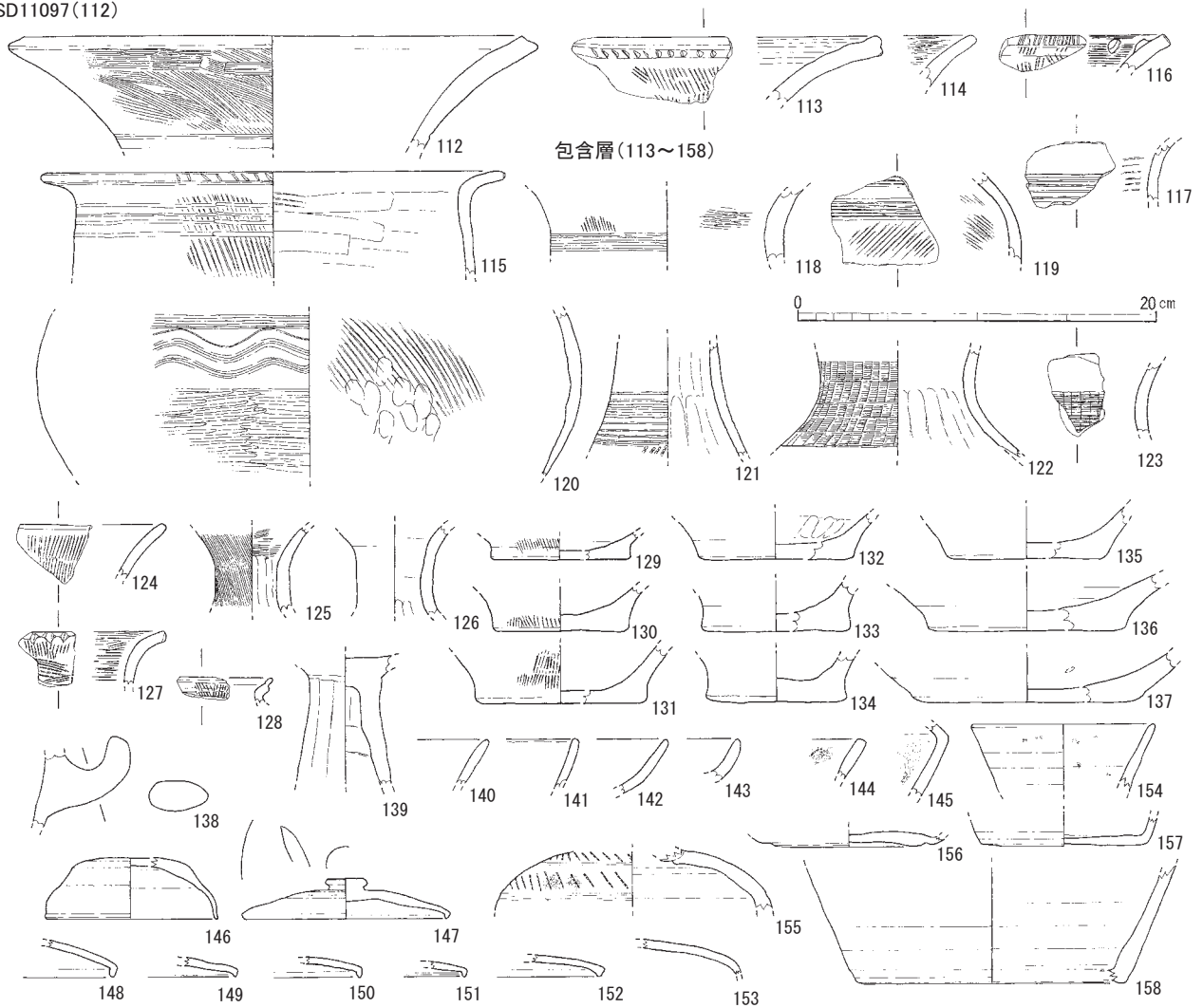
**SP11236出土遺物 (27~29)** 28は土師器杯G、29は須恵器杯H蓋の口縁部片で、飛鳥時代に属する。

**SB11248出土遺物 (30~38)** 33は土師器甕の口縁部片。34は須恵器杯G蓋で、飛鳥III~IV期の特徴をもつ。35は土師器杯の口縁部片で、内外面に漆を塗布する。37は土師器杯G、38は須恵器杯Gで、飛鳥時代に属する。

**SB11250出土遺物 (39~50・52~61)** 42は土師器高杯の口縁部片で、古墳時代後期頃に属する。43は須恵器杯B蓋もしくは壺A蓋で、飛鳥時代に属するとみられる。53は土師器杯Gで、上方へ直線的に口縁部が開く。54・55・61は土師器杯AかBの口縁部片。56は土師器甕。58は須恵器杯B蓋で、頂部に刻書をもつ。59は平瓶の口縁部で、直線的に口縁部が開く。いずれも



SD11097(112)



第IV-11図 第195次調査 出土遺物実測図3 (1/4)

飛鳥時代後期(斎宮I-1期)の特徴をもつ。  
52は弥生土器細頸壺の口縁部で、櫛描波状文を施す。弥生時代中期中葉に属する。

SB11249出土遺物(51) 土師器皿Aか杯Gの口縁部で、飛鳥時代に属するとみられる。

SB11252出土遺物(62) 土師器杯AかBの口縁部で、奈良時代に属するとみられる。

SK11255出土遺物(63) 須恵器杯Bの底部で、奈良時代に属するとみられる。

SB11240出土遺物(64) 弥生土器壺の頸胴部で、弥生時代前期後葉に属する。

SB11244出土遺物(69) 弥生土器壺の頸胴部で、弥生時代前期後葉に属する。

SB11241出土遺物(70) 縄文土器深鉢の胴部で、縄文時代中期末に属する。

SD11093出土遺物(71~73) 71は土師器杯G、72は土師器杯A、73は土師器皿Aのいずれも口縁部片で、奈良時代に属する。

SD11098出土遺物(74~78) 77は須恵器杯B蓋で、頂部に扁平な摘みがつく。78は須恵器円面硯。いずれも飛鳥~奈良時代に属する。

SD11094出土遺物(81~111) 91は土師器杯G、107は金属器模倣の須恵器鉢Aで、丸底気味の平底を留める。いずれも飛鳥時代後期に属する。94・95は須恵器皿C、97は土師器盤A、98は内外面に漆が塗布された壺、101~106は須恵器杯B蓋、108・109は須恵器壺、110は須恵器平瓶、111は須恵器甕。いずれも奈良時代に属する。

SD11247出土遺物(112) 弥生土器広口壺の

口縁部片で、弥生時代前期後葉に属する。

**遺物包含層出土遺物（113～158）** 128は小型のS字甕の口縁部片で、古墳時代前期に属する。144・145は土師器壺、154・155は須恵器壺で、内外面に漆を塗布する。146は須恵器杯H蓋、147～153は須恵器杯B蓋。いずれも飛鳥～奈良時代に属する。

## 5 まとめ

### （1）総柱建物群の特徴とその性格

第195次調査では、斎宮跡関連遺構として飛鳥～奈良時代の総柱建物16棟を新たに確認した。周辺の既往調査での総柱建物を含めると、現状で計20棟が確認されたことになる。布掘り柱掘りをもつ総柱建物が主体的で、複数回の建替えあるいは新設を伴う特徴がある。側柱と屋内柱の規模は総じて同等のため、床束というよりは通し柱の構造であったと推察される。

総柱建物群の併存関係にやや根拠に乏しい側面もあるが、大別4期の変遷が想定される（第IV-12・13図）。各期に特定の総柱建物に1回の建替えが介在するので、各々に小2期が設定できる。ここでは建替えの変化が大きい倉庫3期のみ小期を図示した。

建物規模は最小で平面積10㎡程度（倉庫1期）、最大で平面積が40㎡程度、柱掘方が一辺1～1.6m、柱痕跡の直径が0.4mを測る（倉庫3期）など、建物配置は大きく異ならないが規模の格差が明瞭で、倉庫3期に大きな飛躍があると判断される。

高床倉庫群としての構成をみると、当初は桁行2間・梁行2間の平面規模が小型の倉庫群による構成（倉庫1期）から徐々に規模を増していき（倉庫2期）、大型化した倉庫群を有する段階（倉庫3期）を迎えが、再び規模を減じる（倉庫4期）変遷が認められる。倉庫1～3期の高床倉庫群は南北配列を指向しつつ、緩やかな南北棟であったのに対し、倉庫4期は東西棟に移行する。

柱掘り方をみると、倉庫1・2期は布掘り（壺掘りが一部混在か）であったのに対し、倉庫3-

1期は壺掘りに転じ、倉庫3-2期には再び布掘りの柱掘り方を施工する。

各期の共通点は、建物配列とともに建物軸を概ね合わせる特徴をもつ。建物ごとに僅かな振り幅は異なるが、倉庫2期は建物軸のまとまりがよい。S B 11243からS B 11243へ建替えの際に、N34° EからN36° Eへ移った以降は、倉庫3期のS B 11247に引き継がれている。高床倉庫群のなかでも、飛鳥時代の掘立柱塀S A 6280・S A 11120東辺の方位と合致するのは、S B 11249・11250である。掘立柱塀を基準として配置された蓋然性が高く、倉庫3期と方形区画は併存関係にあると推察される（第IV-14図）。

方形区画の中央部の東西に配置されたS B 6281・11015を基準に高床倉庫群の配置を復原すると、西面する位置にS B 11248が対峙し、南妻側の延伸上にS B 11246・6278・6279が東西に並ぶことから、計画的な空間整備が行われたと想定できる。S B 11248は4×3間の平面規模を復原しているが、布掘り柱掘りや柱穴の配置から並び倉の可能性を残す。

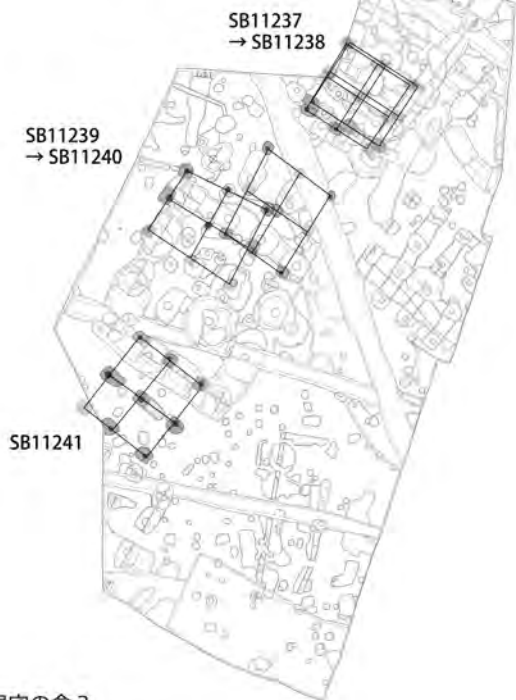
こうした倉庫群の建替えや新設・廃絶がなされる複雑な変遷の背景は、斎王の交替といった政治的な契機が第一義的に求められる。一方、段丘西縁部での配置のため、風雨等の自然成因による不朽や倒壊によって、一部の建物が改築や補修された可能性もある。

既往調査からも、高床倉庫群を取り囲む柵・塀などの圍繞施設は確認できない。現況の沖積低地と段丘面の比高は3m程度を測るが、飛鳥時代はおそらく5m以上となると推定されることから、要害的な地形環境を巧みに利用して内部と外部の境界（倉院としての遮蔽）を企図したと考えられ、圍繞施設は設けられなかったと想定できる。倉庫群からの眺望は広範に及ぶことから、段丘崖の縁辺に構えられた重厚な倉庫群によって、斎宮の威容を誇示したと憶測される。いずれにせよ、飛鳥時代の斎王宮殿域に付随する斎宮倉院というべき高床倉庫群の発見は、本調査の重要な成果となる。

### （2）高床倉庫群からみた斎宮の成立と展開

倉庫 1 期

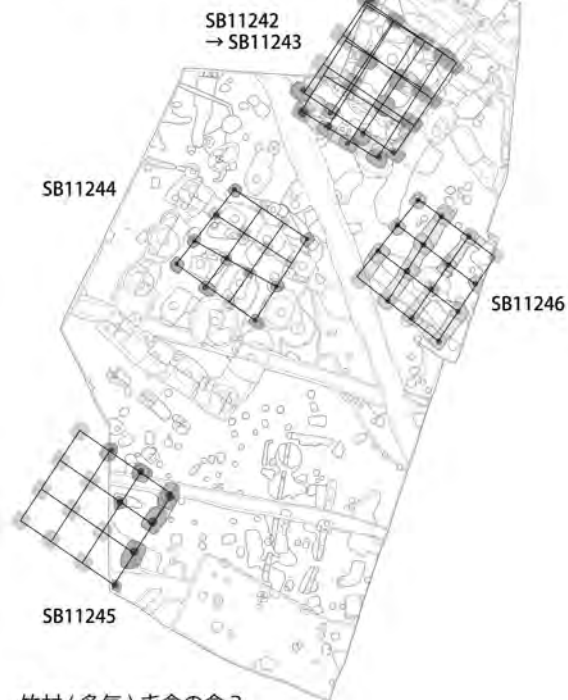
布掘り／壺掘り総柱建物  
2×2 間・10 m 程度



居宅の倉？  
〔在地系氏族倉？〕

倉庫 2 期

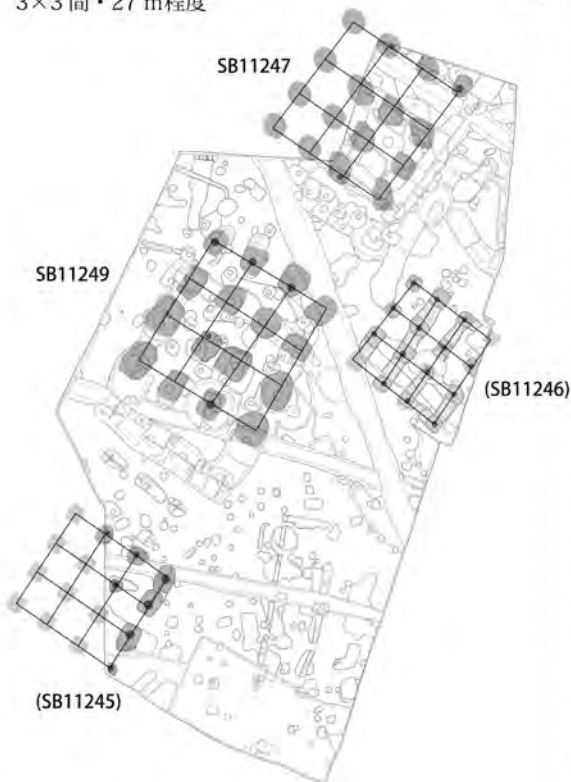
布掘り総柱建物  
3×3 間・16 m 程度



竹村（多気）屯倉の倉？  
〔公的倉？〕

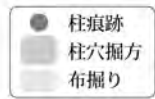
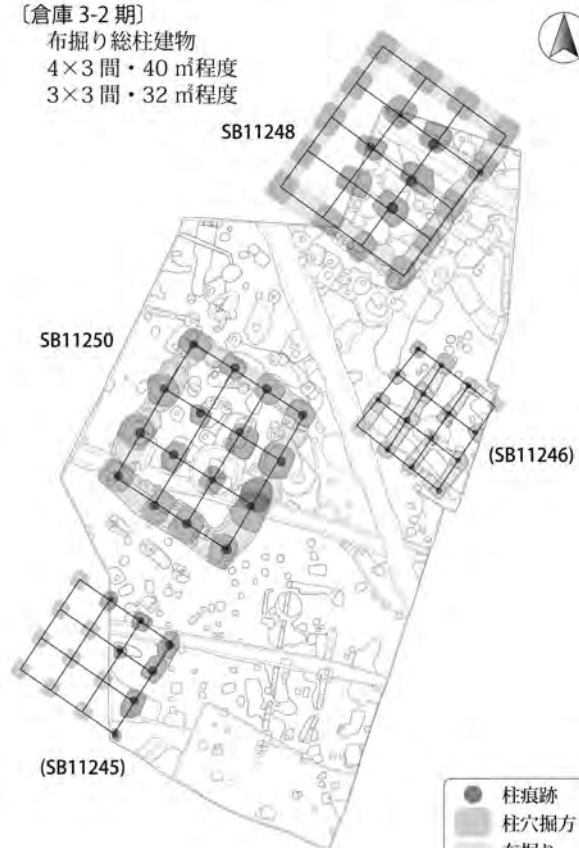
倉庫 3 期

〔倉庫 3-1 期〕  
壺掘り総柱建物  
3×3 間・27 m 程度



飛鳥時代の斎宮倉院

〔倉庫 3-2 期〕  
布掘り総柱建物  
4×3 間・40 m 程度  
3×3 間・32 m 程度



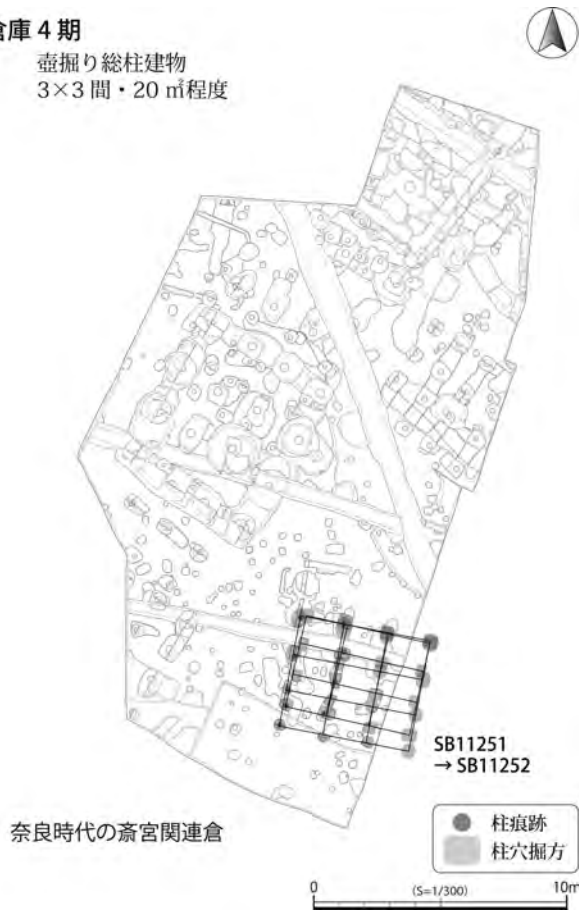
0 (S=1/300) 10m

第IV-12図 総柱建物群 変遷図 1



## 倉庫4期

壺掘り総柱建物  
3×3間・20㎡程度



第IV-13図 総柱建物群 変遷図2

飛鳥時代には北で東に約33度振る方位で、掘立柱塀による東西約41～42m（およそ115～120大尺（1大尺=35.6cm）、南北55m以上（推定復元71m（およそ200大尺））の方形区画の存在とその内部に大型掘立柱建物を擁すること、方形区画の西側隣接地にはこの区画の方位に合わせた高床倉庫群が整然と建ち並ぶことが判明した。奈良時代の方形区画のように正方位（真南）を向くのではなく、地形環境（段丘崖）に合わせた配置をとることが大きな特徴である。

倉庫3-2期は7世紀後葉から大きく降らないことから、天武朝の斎宮倉院と想定できる。倉庫1・2期はそれ以前に比定される。

斎宮成立以前の倉とすると、倉庫2期は『皇太神宮儀式帳』初神郡度會多氣飯野三箇郡本記行事にある竹村（多氣）屯倉といった前身の公的施設に関連するものと推測される。竹村屯倉は「孝徳天皇の立評時、度會郡の山田原に屯倉を造って新家連阿久多を督領、磯連牟良を助督とし、（多氣郡は）竹村に屯倉を造って麻績連

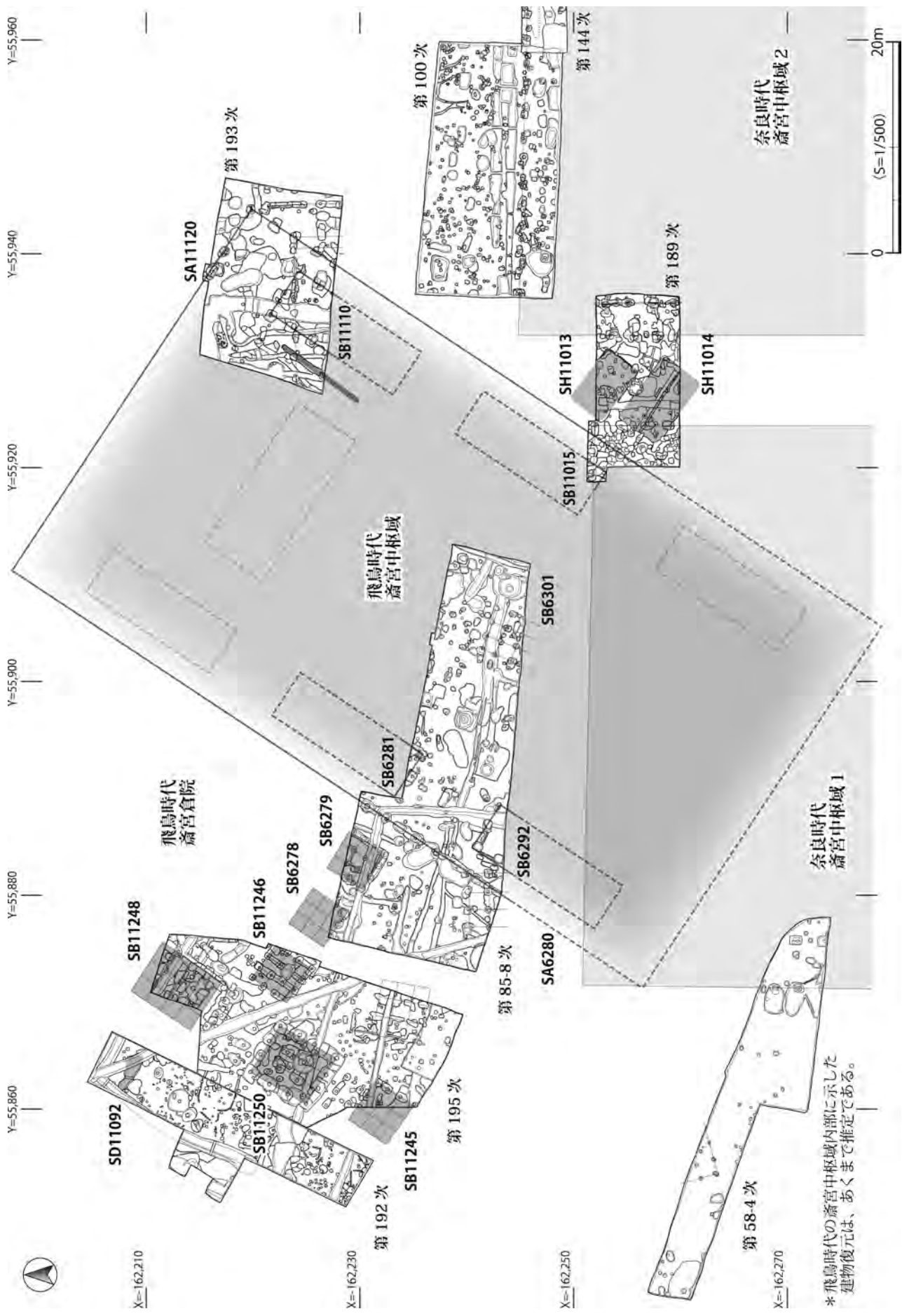
廣背を督領に、磯部眞夜子を助督とした」という記事にあるよう、①孝徳朝の設置であること、②麻績氏は王権祭祀に使用する布帛製作に従事した祭祀系氏族であり、伊勢神宮創祀に伴って神衣祭といった奉斎を担う氏族として王権からつかさどったこと、③麻績氏の本拠地は櫛田川流域にあたることなどが見出せる。麻績氏は屯倉設置以前に伊勢へ派遣されていたとみられる。

少なくとも、倉庫2期の基盤を引き継ぐことで、倉庫3期の斎宮成立に関わる大型化した倉庫群が建てられたと推定され、斎宮造営には前身の公的施設を再利用したとみるほうが妥当といえる。ただし、7世紀中葉の孝徳朝に比定される出土遺物は、明確には抽出できていない。

いまだ仮説の域を脱し得ないが、倉庫1期の倉庫群を麻績氏居宅倉（在地系氏族倉）、倉庫2期を屯倉（公的倉）のものと仮定し、その基盤を引き継ぐことで倉庫3期は斎宮に関わる大型化した倉庫群（倉院）が建てられ、方形区画の造営もこの時期に相当すると考えられる。

倉庫3期は、斎王宮殿域と倉院が成立した段階と推定され、飛鳥時代の中でも天武朝（7世紀後半頃）にあたる。当該期は、律令国家体制の整備を進めていた時期にあたり、天皇による伊勢神宮祭祀の整備に関連して造営されたとみることができる。掘立柱塀は1回の建替えや倉庫3期以降の倉庫群の変遷は、具体的にどの天皇および斎王の時代にあたるかは断定できない。建築物の建替え・新設等にも空間構成の変遷は、斎王の交替といった政治的な契機により、斎宮中枢域の整備（同一地点に宮殿域や倉庫群の新装）が行われた可能性を高く推察できる。

飛鳥～奈良時代の大規模な斎宮の空間整備については、①天武3（674）年に天武天皇の娘である大来皇女が斎王として伊勢へ遣わされたこと、②文武2（698）年に当耆皇女を伊勢斎宮に侍らせたこと、③大宝元（701）年に斎宮の役所が司から寮に格上げされたこと、④泉内親王を遣わしたこと、あるいは⑤聖武天皇の娘の井上内親王が斎王として、養老5（721）年に赴任するにあたって、新たに正方位の空間整備を行っ



\* 飛鳥時代の齋宮中樞域内部に示した  
建築物は、あくまで推定である。

第四-14図 飛鳥・奈良時代の齋宮中樞域

たことなどが契機として考えられる。こうした『日本書紀』や『続日本紀』の関連記事を裏付

けるような調査結果を得たことが、本調査の結果といえる。

番号	器種	器形	地区 遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
1	弥生土器	壺	SI11091	復原底径 5.3 残存高 2.1	外面：ナデ・オサエ 内面：ナデ	密	良	橙2.5YR6/6	底部 3/12		019-03
2	弥生土器	甕	SZ11232	底径 6.7 残存高 1.9	外面：タテハケ・オサエ・ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	底部 3/12		008-02
3	剥片石器		SZ11232	長さ 2.4 幅 2.3 厚さ 0.65						重さ：4.18g	001-09
4	弥生土器	壺	SZ11232	残存高 5.6	外面：ナデのちヘラミガキ 内面：ナデのちヘラミガキ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	—	外面：煤付着	013-01
5	土師器	甕	SB11247 柱穴2 (SB11248 柱穴12)	口径 13.0 残存高 4.0	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 3/12		013-06
6	土師器	甕	SB11248 柱穴3 (抜取穴)	残存高 1.9	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12未満		013-04
7	土師器	甕	SB11248 柱穴9 (SB11247 柱穴3)	残存高 2.6	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	—		013-05
8	弥生土器	壺	SZ11231	残存高 5.4	外面：ナデ・櫛描波状文・櫛描直線文 内面：ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	—	内面：炭化物付着	019-02
9	土師器	甕	SB11240 柱穴1 柱痕跡	残存高 1.2	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	明赤褐5YR5/6	口縁部 1/12未満		018-11
10	弥生土器	壺	SB11240 柱穴3 掘方	頸部径 5.6 残存高 4.4	外面：ナデ・ハケ・櫛描直線文 内面：ナデ	密	良	浅黄2.5Y7/3	頸部 3/12		019-01
11	弥生土器	壺	SB11246 柱穴4 掘方	復原頸部径 9.6 残存高 4.3	外面：籠描沈線・櫛描直線文 内面：板ナデ	密	良	浅黄2.5Y7/4	頸部 2/12		017-09
12	弥生土器	壺	SB11246 柱穴6-7間 布掘り	頸部径 6.8 残存高 4.2	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	頸部 3/12		017-08
13	弥生土器	壺	SB11246 柱穴7-8間 布掘り	残存高 1.0	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12未満		017-07
14	弥生土器	壺	SB11246 柱穴10 柱痕跡	残存高 4.7	外面：ナデ・櫛描波状文 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	—		018-02
15	弥生土器	壺	SB11246 柱穴10	残存高 6.1	外面：櫛描直線文 (櫛描籐状文?) 内面：ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	—		018-01
16	弥生土器	壺	SB11245 柱穴1 柱痕跡	残存高 2.4	外面：ヨコナデ・籠描沈線 内面：ハケ・ヨコナデ	密	良	にぶい褐 7.5YR5/4	口縁部 1/12未満		018-03
17	須恵器	杯G蓋	SB11245 柱穴4	残存高 1.2	外面：ロクロナデ・ロクロケズリ 内面：ロクロナデ	密	良	灰4/0	—		018-04
18	縄文土器	深鉢	SB11243 柱穴4 (SB11242 柱穴1)	残存高 4.2	外側：ナデ・刻目 内側：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	—		014-05
19	土師器	杯B	SB11243 柱穴5 (SB11242 柱穴2)	残存高 1.8	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	明赤褐5YR5/8	—		014-06
20	土師器	壺	SB11243 柱穴5北 布掘り	残存高 2.3	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコハケ	密	良	浅黄2.5Y7/4	口縁部 1/12未満		014-07
21	須恵器	杯G蓋	SB11248 柱穴6	残存高 2.3	外面：ロクロナデ・ロクロケズリ 内面：ロクロナデ	密	良	黄灰2.5Y6/1	口縁部 1/12	外側：自然釉付着	014-04
22	弥生土器	壺	SB11248 布掘り	残存高 3.6	外面：ハケ・刻目 内面：ヨコハケ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 1/12未満		013-07
23	弥生土器	壺	SB11248 布掘り	復原底径 6.2 残存高 2.4	外面：ナデ・ハケ 内面：ハケ	密	良	橙7.5YR7/6	底部 3/12		014-01
24	土師器	杯	SB11248 布掘り	残存高 2.2	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	明黄褐10YR6/6	口縁部 1/12未満		013-08
25	弥生土器	甕	SB11248 柱穴8	残存高 4.3	外面：ナデ・半截竹管文・刻目 内面：ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/12		019-05
26	弥生土器	高杯	SB11248 柱穴8	残存高 2.7	外面：ナデ・ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密	良	灰黄褐10YR5/2	—		019-04
27	弥生土器	甕	SP11236	復原底径 5.2 残存高 1.7	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	底部2/12		019-06
28	土師器	杯G	SP11236	残存高 2.9	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12未満		019-08
29	須恵器	杯H蓋	SP11236	残存高 1.4	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ・ロクロケズリ	密	良	灰白2.5Y7/1	口縁部 1/12未満	内面：自然釉付着	019-07
30	弥生土器	壺	SB11248 柱穴7	復原口径 6.6 残存高 2.0	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	底部2/12		019-10
31	土師器	高杯	SB11248 柱穴7	残存高 1.6	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/12		019-09
32	弥生土器	壺	SB11248 柱穴9・10	残存高 1.8	外面：ナデ・籠描沈線 内面：ナデ・刻目	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12未満		002-08
33	土師器	甕	SB11248 柱穴9・10	残存高 1.8	外面：ヨコハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12未満		014-03
34	須恵器	杯G蓋	SB11248 柱穴9・10	残存高 2.3	外面：ロクロケズリ・ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰5Y6/1	口縁部 1/12未満		014-02
35	土師器	杯	SB11248 柱穴10	残存高 2.2	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	—	内外面：漆付着	001-02
36	石鏃		SB11248 柱穴10	長さ 2.4 幅 1.45 厚さ 0.35						重さ：0.88g サヌカイト製	001-08
37	土師器	杯G	SB11248 柱穴10	残存高 3.4	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	密	良	明黄褐10YR7/6	口縁部 1/12		013-02

第IV-3表 第195次調査 遺物観察表1



38	須恵器	杯G	SB11248 柱穴9・10	残存高	2.7	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰5Y6/1	口縁部 1/12		013-03
39	弥生土器	甕	SB11250 布掘り(西辺)	残存高	3.7	外面：ヨコナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄褐 10YR5/4	口縁部 1/12		015-06
40	土師器	杯	SB11250 布掘り(西辺)	残存高	2.7	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 1/12未満		015-04
41	弥生土器	甕	SB11250 布掘り(西辺)	残存高	3.0	外面：ハケ・ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい褐7.5YR5 /4	口縁部 1/12未満		015-07
42	土師器	高杯	SB11250 布掘り(西辺)	残存高	3.6	外面：ハケ・ナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 1/12未満		015-05
43	須恵器	蓋	SB11250 布掘り(北辺)	復原口径 残存高	15.6 1.0	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	釉：璃寛茶983 素地：灰黄 2.5Y6/2	口縁部 1/12		010-04
44	弥生土器	壺	SB11250 柱穴1	残存高	4.4	外面：ナデ・ハケ 内面：ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	—		015-08
45	弥生土器	壺	SB11250 柱穴2	残存高	3.1	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	明赤褐5YR5/6	口縁部 1/12	口縁部：紐穴	015-09
46	弥生土器	甕	SB11250 柱穴3	残存高	4.0	外面：ナデ・刻目 内面：ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/12未満		016-01
47	弥生土器	壺	SB11250 柱穴3	頸部径 残存高	12.6 5.2	外面：ハケのちナデ 内面：ヘラミガキ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	頸部 2/12		016-02
48	土師器	甕	SB11250 柱穴8	残存高	1.4	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	明黄褐10YR7/6	口縁部 1/12		017-04
49	弥生土器	壺	SB11250 柱穴4 柱痕跡	残存高	2.8	外面：ナデ・刻目 内面：ナデ	やや密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12未満		016-04
50	土師器	杯	SB11250 柱穴8 掘方	残存高	1.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 1/12未満		017-05
51	土師器	皿か杯	SB11249 柱穴5	残存高	2.0	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	明黄褐10YR7/6	口縁部 1/12未満		017-06
52	弥生土器	壺	SB11250 柱穴4 柱痕跡	残存高	1.9	外面：ナデ・櫛波状文 内面：ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/12未満		016-03
53	土師器	杯G	SB11250 柱穴7 柱痕跡	口径 残存高	11.2 4.2	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR 7/4	口縁部 2/12		016-07
54	土師器	杯	SB11250 柱穴7 柱痕跡	復原口径 残存高	14.7 2.8	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 1/12		017-01
55	土師器	甕	SB11250 柱穴7 柱痕跡	残存高	1.1	外面：ハケ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 1/12未満		017-02
56	土師器	甕	SB11250 柱穴7 柱痕跡	口径 残存高	20.1 5.9	外面：ハケ・ヨコナデ 内面：ハケ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12		016-08
57	土師器	杯	SB11250 柱穴3	残存高	4.5	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙5YR7/6	口縁部 1/12未満		018-05
58	須恵器	杯B蓋	SB11250 柱穴4	残存高	0.8	外面：ロクロズリ 内面：ロクロナデ	密	良	灰白7.5Y7/1	—		018-06
59	須恵器	平瓶	SB11250 柱穴5	口径 残存高	8.9 4.3	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	釉：根岸色987 素地：灰白 5Y7/1	口縁部 4/12	内外面： 自然釉付着	018-07
60	須恵器	杯	SB11250 柱穴5	残存高	2.2	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰5Y5/1	口縁部 1/12未満		018-08
61	土師器	杯	SB11250 柱穴7 柱痕跡	残存高	1.9	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 1/12		018-09
62	土師器	杯	SB11252 柱穴5	残存高	3.3	外面：オサエ・ナデ 内面：ナデ	密	良	橙5YR7/6	口縁部 1/12		018-10
63	須恵器	杯B	SK11255	底径 残存高	9.7 1.7	外面：ロクロズリ 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	底部 3/12		019-11
64	弥生土器	壺	SB11240 柱穴2	残存高	4.1	外面：ナデ・篋描沈線 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	—		020-01
65	土師器	杯	P1	残存高	2.2	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	黄橙7.5YR7/8	口縁部 1/12		015-03
66	土師器	甕	P2	残存高	2.2	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12未満		020-02
67	縄文土器	深鉢	P2	残存高	5.2	外面：ナデ 内面：ケズリ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	—		020-05
68	弥生土器	甕	P3	残存高	2.5	外面：タテハケ・ナデ・刻目 内面：ヨコハケ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/12		020-04
69	弥生土器	壺	SB11244 柱穴5	残存高	3.7	外面：ナデ・篋描沈線 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	—		020-03
70	縄文土器	深鉢	SB11241 柱穴7	残存高	5.0	外面：縄文・ナデ 内面：ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	—		020-06
71	土師器	杯G	SD11093	口径 残存高	11.6 3.5	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 2/12		010-07
72	土師器	杯A	SD11093	復原口径 残存高	17.7 2.8	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 1/12		011-01
73	土師器	皿A	SD11093	復原口径 残存高	14.5 1.7	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 1/12		011-02
74	弥生土器	壺	SD11098	残存高	2.5	外面：ハケ・ナデ・刻目 内面：ハケ・ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/12未満		014-08
75	弥生土器	壺	SD11098	残存高	3.7	外面：ナデ・櫛波状文 内面：ハケメ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	—		014-09
76	土師器	高杯	SD11098	残存高	3.9	外面：ヨコナデ・ヘラケズリ 内面：ハケ	密	良	橙5YR7/6	口縁部 1/12未満		015-02
77	須恵器	杯B蓋	SD11098	残存高	3.3	外面：ロクロズリ・ロクロナデ 内面：ナデ・ロクロナデ	密	良	灰白5Y7/1	—		015-01
78	須恵器	硯	SD11098	残存高	1.6	外面：ロクロナデ 内面：ナデ・ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	—		001-06

第IV－4表 第195次調査 遺物観察表2

79	弥生土器	壺	排土	残存高	2.3	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12		007-07
80	弥生土器	壺	排土	復原底径 残存高	7.6 2.7	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	底部 4/12		007-08
81	弥生土器	壺	SD11094	復元口径 残存高	15.4 5.2	外面：ハケのちナデ・櫛描直線文 内面：ハケのちナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部 1/12		008-01
82	弥生土器	壺	SD11094	復原胴径 残存高	20.6 5.1	外面：ナデ・櫛描直線文 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	胴部 1/12		004-04
83	弥生土器	壺	SD11094	残存高	2.8	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	—		012-02
84	弥生土器	壺	SD11094	残存高	9.0	外面：ナデ 内面：ヘラミガキ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	—		012-05
85	弥生土器	壺	SD11094	頸部径 残存高	7.4 9.5	外面：ハケ・櫛描文 内面：ハケ・ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	頸部 12/12		004-01
86	弥生土器	壺	SD11094	残存高	3.6	外面：ナデ・櫛描直線文・列点文 内面：ナデ	密	良	浅黄2.5Y7/4	—		012-04
87	弥生土器	甕	SD11094	残存高	2.6	外面：ハケ・ナデ 内面：ナデ・貝殻条痕	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部 1/12		011-03
88	弥生土器	甕	SD11094	残存高	1.1	外面：ハケ・ナデ・刻目 内面：ハケ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	—		012-03
89	弥生土器	壺	SD11094	復原底径 残存高	8.4 3.4	外面：ナデ・ヘラミガキ 内面：ナデ・ヘラミガキ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	底部 2/12		004-05
90	弥生土器	壺	SD11094	復原底径 残存高	5.9 2.3	外面：ナデ・ハケ 内面：ハケ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	底部 2/12		002-09
91	土師器	杯G	SD11094	復原口径 器高	10.4 4.2	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	明黄褐10YR7/6	口縁部 1/12未満		011-08
92	須恵器	杯	SD11094	残存高	2.7	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	口縁部 1/12未満		011-07
93	土師器	杯	SD11094	残存高	3.9	外面：ヨコナデ・ヘラミガキ? 内面：ヨコナデ・ヘラミガキ?	密	良	橙5YR6/8	—		010-06
94	須恵器	皿C	SD11094	残存高	2.8	外面：ロクロケズリ・ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良		—		004-03
95	須恵器	皿C	SD11094	復原口径 器高	23.6 3.7	外面：ロクロケズリ・ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰オリーブ 5Y6/2	口縁部 1/12		011-09
96	土師器	甕	SD11094	口径 残存高	14.7 3.3	外面：ハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 2/12		011-04
97	土師器	盤A	SD11094	復原口径 残存高	47.0 7.5	外面：ハケのちヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 1/12		021-01
98	須恵器	杯	SD11094	復原口径 残存高	10.7 3.6	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰7.5Y6/1	口縁部 1/12	内外面：漆付着	001-01
99	須恵器	杯B	SD11094	残存高	1.7	外面：ロクロケズリ・ロクロナデ・ 糸切痕 内面：ロクロナデ	密	良	灰オリーブ 5Y6/2	底部 1/12未満		011-06
100	土師器	椀	SD11094	残存高	1.8	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	明赤褐2.5YR5/8	底部 1/12未満		012-01
101	須恵器	杯B蓋	SD11094	残存高	2.3	外面：ロクロナデ・ロクロケズリ 内面：ロクロナデ	密	良	灰5Y6/1	—		012-07
102	須恵器	杯B蓋	SD11094	残存高	1.6	外面：ロクロケズリ 内面：ロクロナデ	密	良	灰10Y5/1	—		012-06
103	須恵器	杯B蓋	SD11094	残存高	1.7	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	にぶい黄 2.5Y6/3	口縁部 1/12未満		011-05
104	須恵器	杯B蓋	SD11094	残存高	2.1	外面：ロクロナデ・ナデ 内面：ロクロナデ・ナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	—	外面：自然釉付着	002-10
105	須恵器	杯B蓋	SD11094	口径 残存高	17.5 2.6	外面：ロクロケズリ・ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	口縁部 2/12		010-05
106	須恵器	杯B蓋	SD11094	復原口径 残存高	19.5 1.9	外面：ロクロケズリ・ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰5Y6/1	口縁部 1/12		004-02
107	須恵器	鉢A	SD11094	復原口径 残存高	20.5 12.1	外面：ロクロケズリ・ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰5Y6/1	口縁部 5/12		020-07
108	須恵器	壺	SD11094	頸部径 残存高	2.8 6.8	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	釉：鶯色814 素地：灰白 2.5Y7/1	頸部 4/12	内外面：自然釉付着	004-06
109	須恵器	壺	SD11094	残存高	5.9	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	釉：千歳茶813 素地：灰白 2.5Y7/1	—	外面：自然釉付着	003-03
110	須恵器	平瓶	SD11094	残存高	3.8	外面：ロクロナデ・ナデ 内面：ロクロナデ・ナデ	密	良	釉：威光茶990 素地：灰白 2.5Y7/1	口縁部 8/12	外面：自然釉付着	003-01
111	須恵器	甕	SD11094	残存高	4.8	外面：タタキ・ヨコナデ 内面：当て具痕・ナデ	密	良	灰7.5Y6/1	—		003-02
112	弥生土器	壺	SD11097	復原口径 残存高	27.7 6.3	外面：ハケ・ナデ・ヘラミガキ? 籠描沈線 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部 2/12		006-4
113	弥生土器	壺	包含層	残存高	3.7	外面：ハケ・ナデ・刻目 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12		009-08
114	弥生土器	壺	包含層	残存高	2.9	外側：ヘラミガキ 内側：ヘラミガキ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/12		007-04
115	弥生土器	甕	包含層	復原口径 残存高	25.0 5.8	外側：ハケ・ナデ・櫛描直線文・刻目 内側：ハケのちナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 1/12	外面：煤付着	008-04
116	弥生土器	壺	包含層	残存高	2.0	外面：ハケ・ナデ・刻目 内面：ハケ・円形浮文	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12		007-03
117	弥生土器	甕	包含層	残存高	3.2	外面：ナデ・貝殻直線文 内面：ハケ・条痕?	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	—	外面：煤付着	007-06
118	弥生土器	壺	包含層	復原頸部径 残存高	13.0 4.1	外面：ハケのちナデ・櫛描直線文 内面：ヘラミガキ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	頸部 1/12		002-03

第IV-5表 第195次調査 遺物観察表3

119	弥生土器	壺	包含層	残存高	5.0	外面：ナデ・櫛描直線文 内面：ハケ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	—		005-01
120	弥生土器	壺	包含層	復原口径 残存高	30.3 9.1	外面：ヘラミガキ・櫛描直線文・ 櫛描波状文 内面：ハケ・ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	胴部 1/12		006-01
121	弥生土器	壺	包含層	残存高	6.4	外面：ナデ・櫛描直線文・列点文 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	頸部 2/12		002-01
122	弥生土器	壺	包含層	頸部径 残存高	8.6 6.0	外面：ナデ・櫛描簾状文 内面：ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	頸部 2/12		005-05
123	弥生土器	壺	包含層	残存高	3.9	外面：ナデ・櫛描簾状文 内面：ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	—		002-02
124	弥生土器	壺	包含層	残存高	3.0	外面：ハケ・ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	—		002-05
125	弥生土器	壺	包含層	復原頸部径 残存高	4.1 4.8	外面：ハケ 内面：ハケ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	頸部 3/12		002-04
126	弥生土器	壺	包含層	頸部径 残存高	4.2 5.0	外面：ハケ・ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	頸部 12/12		009-05
127	弥生土器	甕	包含層	残存高	2.9	外面：ハケ・ナデ・刻目 内面：ハケ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12未滿		007-05
128	土師器	甕	包含層	残存高	1.4	外面：ハケ・ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	—	S字甕	008-06
129	弥生土器	壺	包含層	底径 残存高	7.3 1.6	外面：ハケ・ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	底部 4/12		009-02
130	弥生土器	壺	包含層	復原底径 残存高	7.1 2.5	外面：ハケ・ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	底部 3/12		006-03
131	弥生土器	壺	包含層	底径 残存高	8.7 3.3	外面：ハケ・ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい褐 7.5YR5/3	底部 4/12		008-05
132	弥生土器	壺	包含層	復原底径 残存高	7.6 2.6	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	底部 2/12		009-04
133	弥生土器	壺	包含層	復原底径 残存高	7.2 2.8	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	底部 2/12		008-03
134	弥生土器	壺	包含層	底径 残存高	7.2 2.7	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	橙5YR6/6	底部 6/12		009-03
135	弥生土器	壺	包含層	底径 残存高	8.2 2.9	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	底部 3/12		005-02
136	弥生土器	壺	包含層	復原底径 残存高	9.6 3.2	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	底部 2/12		009-01
137	弥生土器	壺	包含層	復原底径 残存高	9.6 2.8	外面：ナデ 内面：調整不明	密	良	明赤褐5YR5/6	底部 1/12	内面：刳圧痕	002-07
138	土師器	甕	包含層	残存高	5.0	外面：ハケ・ナデ 内面：ハケ	密	良	淡黄2.5Y8/3	把手1個の み		009-06
139	土師器	高杯	包含層	残存高	7.2	外面：ナデ 内面：巻上げ痕・シボリ痕	密	良	橙5YR6/6	—		006-02
140	土師器	杯	包含層	残存高	2.5	外面：ヨコナデ・ヘラミガキ? 内面：ヨコナデ・ヘラミガキ?	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12		007-01
141	土師器	杯	包含層	残存高	2.8	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 1/12未滿		007-02
142	土師器	杯	包含層	残存高	3.1	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 1/12未滿		002-06
143	土師器	杯	包含層	残存高	2.2	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	橙2.5YR6/8	口縁部 1/12未滿		008-08
144	土師器	壺	包含層	残存高	2.3	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	—	内外面：漆付着	001-04
145	土師器	壺	包含層	残存高	4.1	外面：ロクロナデ・ナデ 内面：ロクロナデ・ナデ	密	良	橙5YR7/6	—	内外面・破 断面：漆付着	001-05
146	須恵器	杯H蓋	包含層	復原口径 残存高	9.5 3.4	外面：ロクロナデ・ロクロケズリ・ ヘラ切りのちナデ 内面：ロクロナデ・ナデ	密	良	灰5Y5/1	口縁部 1/12	内面：漆付着	010-03
147	須恵器	杯B蓋	包含層	口径 残存高	11.1 2.2	外面：ロクロナデ・ロクロケズリ 内面：ロクロナデ・オサエ・ナデ	密	良	灰白5Y7/2	口縁部 1/12未滿	線刻	010-01
148	須恵器	杯B蓋	包含層	残存高	2.1	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	釉：璃寛茶983 素地：灰黄 2.5Y6/2	口縁部 1/12未滿	外面：自然釉付着	005-03
149	須恵器	杯B蓋	包含層	残存高	1.1	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	暗灰黄2.5Y5/2	口縁部 1/12未滿		005-04
150	須恵器	杯B蓋	包含層	残存高	1.1	外面：ロクロケズリ 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	—		005-08
151	須恵器	杯B蓋	包含層	残存高	0.9	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	口縁部 1/12		008-07
152	須恵器	杯B蓋	包含層	残存高	1.2	外面：ロクロナデ・ロクロケズリ 内面：ロクロナデ	密	良	釉：鶯茶815 素地：灰黄褐 10YR5/2	口縁部 1/12	外面：自然釉付着	008-09
153	須恵器	杯B蓋	包含層	残存高	2.0	外面：ロクロナデ・ロクロケズリ 内面：ロクロケズリ	密	良	灰黄2.5Y6/2	—		005-07
154	須恵器	壺	包含層	復原口径 残存高	9.9 3.8	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰7.5Y5/1	口縁部 1/12	内外面：漆付着	001-03
155	須恵器	壺	包含層	残存高	3.2	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	浅黄2.5Y7/3	—	外面：漆付着	001-07
156	須恵器	壺	包含層	底径 残存高	6.8 0.8	外面：ナデ・ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰7.5Y5/1	底部 12/12		009-07
157	須恵器	瓶	包含層	底径 残存高	9.2 1.7	外面：ロクロナデ・ロクロケズリ・ 糸切痕 内面：ロクロナデ	密	良	暗灰黄2.5Y5/2	底部 3/12		005-06
158	須恵器	壺	包含層	復原底径 残存高	14.5 6.6	外面：ロクロナデ・ロクロケズリ 内面：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	底部 2/12		010-02

第IV－6表 第195次調査 遺物観察表 4





第195次調査区全景（垂直写真）



総柱建物群（北東から）



S B11237・11238・11242・11243・11247・11248（南東から）

写真図版 2



S B11237・11238・11242・11243・11247・11248 (北西から)



S B11248布掘り柱掘方土層 (東平側・南から)



S B11248布掘り柱掘方土層 (南妻側・南から)



S B11248柱穴 (南西から)



S B11248柱穴土層 (北から)





S B11239・11240・11244・11249・11250 (北西から)



S B11250柱穴2土層 (北西から)



S B11250柱穴3土層(北西から)



S B11250柱穴7土層 (南東から)



S B11250柱穴7柱痕跡 土器出土状況 (北から)



写真図版 4



第195次調査区全景（南から）



総柱建物群（南西から）



総柱建物群（北東から）



S B11241・11245（北東から）



S B11246（南西から）



第195次調査出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと へいせいさんじゅうねんどはつくつちょうさがいほう							
書名	史跡齋宮跡 平成30年度発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	川部浩司・宮原佑治							
編集機関	齋宮歴史博物館							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596-52-3800							
発行年月日	西暦 2020年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さいくうあと 齋宮跡	たきぐんめいわちょう 多気郡明和町 さいくう たげがわ 齋宮・竹川	24442	210	34° 31' 55" ～ 34° 32' 30"	136° 36' 16" ～ 136° 37' 37"	20170724 ～ 20191228	106m <sup>2</sup> (第190次) 204.5m <sup>2</sup> (第193次) 330m <sup>2</sup> (第195次)	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	特記事項
齋宮跡 第190次	官衙	飛鳥・奈良・ 室町		溝・土坑・ 落ち込み		土師器・須恵器・灰釉陶器・ 陶器・瓦質土器・石製品・ 金属製品・無釉陶器・白磁・ 石製品		中世期齋宮の縁 辺地区、齋宮廃 絶後の集落遺跡
齋宮跡 第193次	官衙	縄文・弥生・ 飛鳥・奈良・ 鎌倉		掘立柱建物・ 掘立柱塀・ 方形周溝墓・ 溝・土坑		縄文土器・弥生土器・土師 器・須恵器・陶器・青磁・ 白磁・近世陶磁・石製品・ 金属製品		飛鳥時代の齋王 宮殿域北東角部
齋宮跡 第195次	官衙	縄文・弥生・ 古墳・飛鳥・ 奈良・鎌倉		竪穴建物・ 総柱建物・ 方形周溝墓・ 溝・土坑		縄文土器・弥生土器・ 土師器・須恵器・石製品		飛鳥時代の齋宮 倉院
要約	<p>飛鳥時代の齋宮中枢域での発掘調査において、掘立柱塀で構成される方形区画とこれに付随する総柱建物群（高床倉庫群）を確認した。方形区画は齋王宮殿域、総柱建物群は齋宮倉院と推定され、飛鳥時代の中でも天武朝から文武朝（7世紀後葉～8世紀前葉）に属すると推定される。当該期は律令国家体制の整備を進めていた時期に相当し、天皇による伊勢神宮祭祀の整備に関連して造営されたとみられる。掘立柱塀は1回の建替え、倉庫群は4期の変遷を認めるが、こうした空間整備の変遷は齋王の交替といった政治的な契機により、齋宮中枢域の整備が行われた可能性が考えられる。</p>							



---

---

史跡 齋宮跡

平成30年度

発掘調査概報

2020年3月19日

編集・発行 齋宮歴史博物館

印刷 共立印刷株式会社

---

---